

文化課永久保存

沖縄県文化財調査報告書第83集

うがん やま
拝 山 遺 跡

—沖縄自動車道(石川～那覇間)建設工事
に伴う緊急発掘調査報告書(5)—

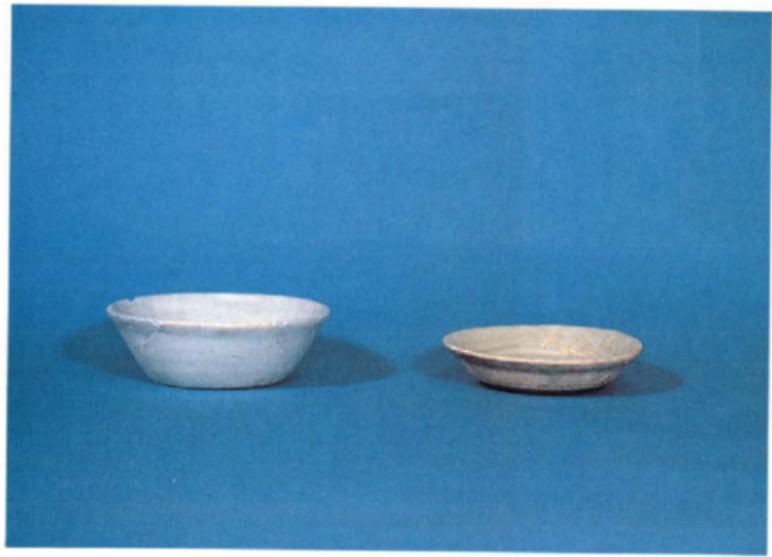
1987年9月

沖縄県教育委員会





拝山遺跡周辺の空中写真



上：青磁皿 下：白磁皿

序

本調査報告書は西原町森川および浦添市西原所在の挾山遺跡発掘調査の成果を記録したものであります。

さて、沖縄の日本復帰記念事業として開催された沖縄国際海洋博覧会に関連して、日本道路公団により石川～許田間に自動車道が開設されたのは周知の通りであります。その後、石川～那覇間の延長計画が策定されたのでありますが、同公団と当委員会との間では早い時期から、当該区間の文化財の取り扱いに関する照会、協議、調整に取り組んでまいりました。

当委員会としましても独自に分布調査事業を実施し、埋蔵文化財の適切な保存に配慮してきたところであります。

最終的に確定した予定路線内における埋蔵文化財は7件で、このうち6件については現状保存がきわめて困難であるということで、やむをえず記録保存の措置をとることになった次第であります。

発掘調査についてはその経費を同公団が負担し、沖縄県がこれを受託して当委員会が担当するということで協議が成立し、昭和58年度から実施してまいりました。この間、日本道路公団沖縄建設所の文化財に対する御理解と御協力をいただき、円滑に発掘調査が推進できたことを喜びとするものであります。

発掘調査の結果、当遺跡からグスク時代の土器、須恵器、中国陶磁器、骨器、貝器などの遺物が豊富に出土いたしました。これらを記録した本報告書は、沖縄のグスク時代の人々の生活と社会の様相を知る資料として、大いに役立つものと確信するものであります。

本書が文化財についての知識の普及ならびに文化財愛護思想の高揚、さらには歴史学習教材および学術研究などの資料として、今後各方面に活用されることを期待するものであります。

昭和62年10月1日

沖縄県教育委員会

教育長 池 田 光 男

例　　言

1. 本報告書は、昭和59～60年度に実施した押山遺跡発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 調査は「沖縄自動車道建設工事」に伴うもので、日本道路公団沖縄建設事務所の委託を受けて沖縄県教育委員会（文化課所管）が実施した。
3. 本報告書掲載の25,000分の1の地図は国土地理院発行のものを、1,000分の1の地形図は日本道路公団所有のものを使用した。
4. 輸入陶磁器、石質、獸魚骨の鑑定は下記の方々による。記して感謝を表する次第である。
輸入陶磁器　手塚直樹氏（鎌倉考古学研究所）
石　　質　神谷厚昭氏（沖縄県立南風原高等学校教諭）
獸　魚　骨　金子浩昌氏（早稲田大学講師）

5. 本報告書の執筆は、次のとおりである。編集は座間味、大田が行なった。

第I章第1節・第2節	安里　嗣淳
第II章第1節・第2節、第III章、第IV章第1節・第2節A(1)～(4)、第V章	座間味政光
第IV章第2節A(5)	島袋　洋
第IV章第2節A(6)、(8)、(9)、(11)	大田　宏好
第IV章第2節A(7)	島袋　春美
第IV章第2節A(10)	上地千賀子
第IV章第2節B(1)～(3)	花城　潤子

6. 資料整理は下記のメンバーで行なった。

実測・トレース	花城潤子、新垣千恵子、城間千栄子、上地千賀子、比嘉優子
	高良三千代、渡慶次純子、善平スガ子
注　記・分　類	大城勝江、伊集恵子、大城ますみ、大嶺みな子、宮城奈々子

7. 調査で得られた遺物は、すべて沖縄県教育庁文化課資料室に保管。

目 次

序

例 言

第I章	調査に至る経緯	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査体制	2
第II章	遺跡の立地と環境	3
第1節	位置と環境	3
第2節	周辺遺跡と歴史的環境	7
第III章	調査の経過	13
第IV章	調査の成果	16
第1節	層序	16
第2節	出土遺物	23
A	人工遺物	23
(1)	青磁	23
(2)	白磁	60
(3)	陶器	72
(4)	陶質土器	73
(5)	須恵器	84
(6)	土器	92
(7)	貝製品	140
(8)	骨製品	146
(9)	玉	146
(10)	石器	148
(11)	鉄・青銅製品	159
B	自然遺物	162
(1)	貝類遺存体	162
(2)	脊椎動物遺存体	169
第V章	まとめ	182

挿図目次

図1 拝山遺跡周辺の地形	4	図34 鉢形土器	96
図2 地層の断面	5	図35 鉢形土器	98
図3 拝山遺跡と周辺の主要遺跡分布	8	図36 鉢形土器	100
図4 黒褐色土の分布	15	図37 鉢形土器	102
図5 層序	17	図38 鉢形土器	106
図6 イ地区黒褐色土A地点断面図	19	図39 鉢形土器	108
図7 ロ地区黒褐色土F地点断面図	21	図40 鉢形土器・壺形土器	112
図8 剣花文碗	26	図41 壺形土器	114
図9 剣花文碗	28	図42 壺形土器・碗形土器	116
図10 楠櫛蓮弁文碗・鎬蓮弁文碗	34	図43 土器底部	120
図11 鎬蓮弁文碗	36	図44 土器底部	122
図12 鎬蓮弁文碗底部	38	図45 土器底部	124
図13 鎬蓮弁文碗底部・無鎬蓮弁文碗	40	図46 土器底部	126
図14 青磁無文口縁碗	42	図47 土器底部	130
図15 青磁碗	44	図48 土器底部	132
図16 底部模式図	46	図49 土器底部	134
図17 青磁碗有文胴部・底部	48	図50 土器底部	136
図18 青磁碗底部	50	図51 土器底部	138
図19 青磁皿	54	図52 貝匙	140
図20 青磁皿	56	図53 殻高・重量分布	140
図21 青磁皿	58	図54 ピード	141
図22 白磁碗	62	図55 二枚貝具孔製品	142
図23 白磁碗	64	図56 卷貝具孔品	144
図24 白磁皿	68	図57 骨製品・玉	146
図25 白磁皿	70	図58 石器	152
図26 無釉陶器	74	図59 石器	154
図27 陶器	76	図60 石器	156
図28 陶器	78	図61 鉄・青銅製品	160
図29 陶器	80	図62 棲息地別出土比較	163
図30 陶質土器	82	図63 棲息地別構成比較	163
図31 須恵器	86	図64 計測部位	170
図32 須恵器	88	図65 計測部位	170
図33 須恵器	90		

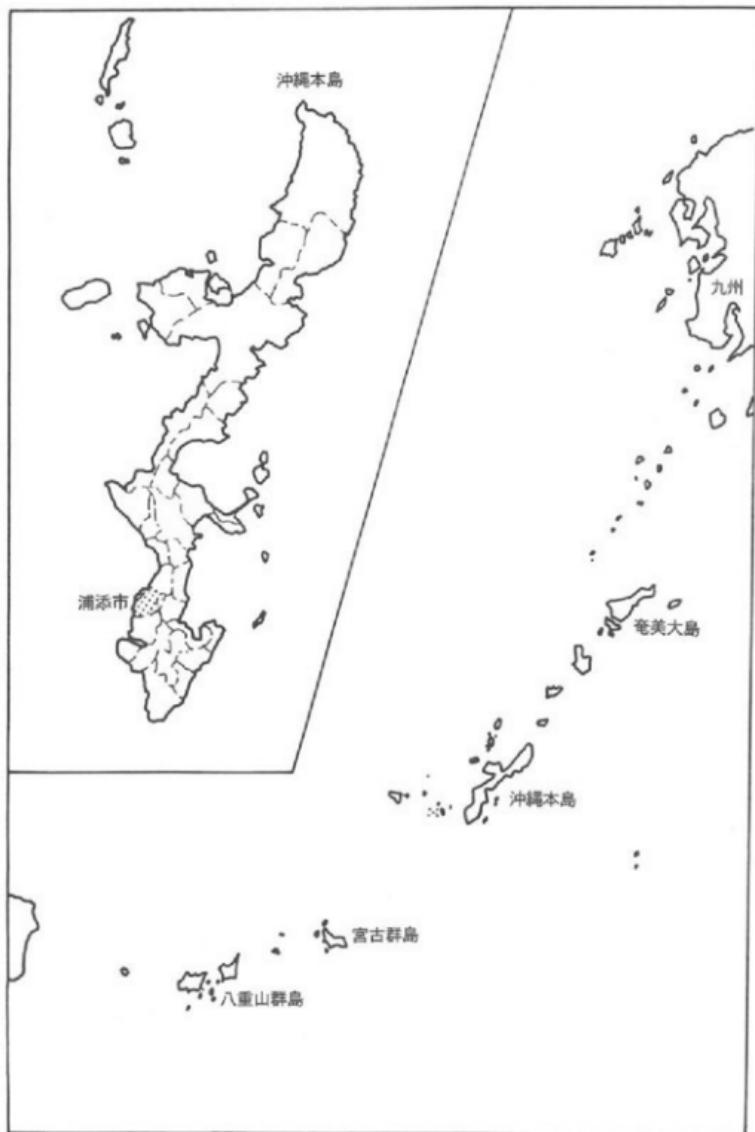
表 目 次

表 1 地質層序	6	表16 石質における産地一覧	149
表 2 青磁地区別出土状況	23	表17 石器観察一覧	149
表 3 刺花文碗底部観察表	25	表18 主体貝の構成比較	162
表 4 鎏蓮弁文碗底部観察表	31	表19 ハ地区貝類出土状況	164
表 5 無鶴弁文底部観察表	32	表20 イ地区貝類出土状況	165
表 6 底部観察表	46	表21 ロ地区貝類出土状況	167
表 7 白磁地区別出土状況	60	表22 魚骨の出土状況	169
表 8 口縁部出土状況	92	表23 上顎骨-体長の相関表	169
表 9 底部出土状況	93	表24 椎骨の計測比較	170
表10 土器観察一覧	94	表25 径長計測一覧	171
表11 貝製品出土状況	140	表26 椎骨白部の計測比較	171
表12 二枚貝有孔製品(貝錐)出土一覧	141	表27 ヒトの骨出土状況	171
表13 ピード観察表	141	表28 ネズミの骨の出土状況	172
表14 卷貝有孔品観察表	144	表29 偶蹄目の骨の出土状況	173
表15 石質別形態一覧	149		

図 版 目 次

図版 1 拝山遺跡遠景	3	図版17 蓼弁文碗出土状況	33
図版 2 浦添貝塚遠景	9	図版18 櫛搔蓮弁碗・蓮弁文碗	35
図版 3 浦添城跡遠景	10	図版19 鎏蓮弁文碗	37
図版 4 古棚原之御嶽	11	図版20 鎏蓮弁文碗底部	39
図版 5 古棚原之殿	11	図版21 鎏蓮弁文碗底部・無鎔蓮弁文	41
図版 6 西原東ガ	12	図版22 青磁無口縁碗	43
図版 7 ロ地区発掘風景	13	図版23 青磁碗	45
図版 8 ハ地区発掘風景	14	図版24 青磁碗有文胴部・底部	49
図版 9 グリッド20ラインの層序	16	図版25 青磁碗底部	51
図版10 イ地区黒褐色土A地点	20	図版26 青磁皿	55
図版11 ロ地区黒褐色土F地点	21	図版27 青磁皿	57
図版12 ハ地区発掘風景	22	図版28 青磁皿	59
図版13 青磁碗出土状況	24	図版29 口禿碗出土状況	61
図版14 刺花文碗	27	図版30 白磁碗	63
図版15 刺花文碗	29	図版31 白磁碗	65
図版16 鎏蓮弁文碗出土状況	30	図版32 白磁皿出土状況	66

図版33	白磁皿	69	図版57	土器底部	133
図版34	白磁皿	71	図版58	土器底部	135
図版35	無釉陶器	75	図版59	土器底部	137
図版36	陶器	77	図版60	土器底部	139
図版37	陶器	79	図版61	二枚具有孔製品	143
図版38	陶器	81	図版62	ビード(上) その他(下)	145
図版39	陶質土器	83	図版63	骨製品、玉	147
図版40	須恵器	87	図版64	石器	153
図版41	須恵器	89	図版65	石器	155
図版42	須恵器	91	図版66	石器	157
図版43	鉢形土器	97	図版67	鉄・青銅製品	161
図版44	鉢形土器	99	図版68	貝類	174
図版45	鉢形土器	101	図版69	貝類	175
図版46	鉢形土器	103	図版70	貝類	176
図版47	鉢形土器	107	図版71	貝類	177
図版48	鉢形土器	109	図版72	魚類	178
図版49	鉢形土器・壺形土器	113	図版73	魚類・爬虫類・鳥類	178
図版50	壺形土器	115	図版74	哺乳類(ヒト)	179
図版51	壺形土器・碗形土器	117	図版75	哺乳類(ネズミ)	179
図版52	土器底部	121	図版76	哺乳類(イルカ・イヌ・ ウマ・中型獣)	180
図版53	土器底部	123	図版77	哺乳類(イノシシ)	180
図版54	土器底部	125	図版78	哺乳類(ウシ)	181
図版55	土器底部	127	図版79	哺乳類(ウシ)	181
図版56	土器底部	131			



沖縄本島と浦添市の位置

第Ⅰ章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

沖縄の日本復帰記念事業のひとつ、沖縄国際海洋博覧会が1975年に沖縄本島北部の本部（もとぶ）において開催された。

このとき中南部からの観客輸送対策として、日本道路公団によって沖縄自動車道が石川～名護間に開通した。その後、石川～那覇間の路線延長が計画され、いくつかの路線案が出されたが、その中から石川市伊波～沖縄市～北中城村～宜野湾市～中城村～浦添市～西原町～那覇市首里間の本島脊梁部を通過する設計案が採択された。

日本道路公団沖縄建設所は、当該地域に関する独自の環境アセスメントを作成すると共に、^{註1}沖縄県教育委員会（教育庁文化課）に対して文化財についての照会を求めてきた。そこで当教育委員会は、文化庁と日本道路公団との「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」（昭和42年9月30日）の3に基づいて事前の分布調査を実施し、^{註2}その報告書を昭和57年3月に刊行した。

この分布調査の結果、当該計画線内には古我地原貝塚（石川市）、知花遺跡、竹下遺跡（沖縄市）、ヒニグスク（北中城村）、石嶺坂石敷道（中城村）、イシグスク（西原町）、拝山遺跡（浦添市）の7カ所の埋蔵文化財包蔵地が存在することが判明した。

その後この7カ所の遺跡の取り扱いに関する協議が続けられた。その結果、ヒニグスクはトンネル工法によるので埋蔵文化財は保存されること、他の6遺跡は線形上および工法上保存は困難であるので、同覚書1の(3)「発掘調査を行なって記録をのこすもの」として取り扱うこととなった。

発掘調査事業は同覚書4の(1)「……埋蔵文化財包蔵地の発掘調査が必要となった場合、公団は都道府県教育委員会に委託して実施するものとし……」に基づき、日本道路公団沖縄建設事務所はその費用を負担し、沖縄県教育委員会（所管教育庁文化課）がその委託を受けて実施することで協議が成立した。

発掘調査事業委託契約は昭和58年4月1日に締結され、最初に同年6月古我地原貝塚から着手することになった。本遺跡については昭和60年3月4日に着手した。

註1. 日本道路公団沖縄建設所 沖縄自動車道（南部区間）石川、那覇間環境影響調査報告書 昭和53年6月

註2. 金武正紀、大城慧「沖縄自動車道埋蔵文化財分布調査報告」沖縄県教育委員会 1980年3月

第2節 調査体制

この事業は次の体制で実施した。

事業主体	沖縄県教育委員会	教育長	米村 幸政
事業所管	沖縄県教育庁文化課	課長	比嘉 賀幸
	〃	課長補佐	西平 守勝
事業総括	〃	埋蔵文化財係	係長 安里 喬淳
事業事務	〃	文化振興係	〃 山根 義治 (59年度)
	〃	〃	〃 大城 真幸 (60年度)
	〃	〃	主事 大村 光仁 (59年度)
	〃	〃	〃 新垣 政子 〃
	〃	〃	主任 大山 京子 (60年度)
	〃	〃	主事 本郷 公朗 〃
発掘調査員	〃	埋蔵文化財係	指導主事 座間味政光
	〃	〃	専門員 花城 潤子
	〃	〃	島袋 春美
	〃	〃	大田 宏好
	〃	〃	島 弘
	〃	〃	松川 章
	〃	〃	金城 透
	〃	〃	大城 剛
発掘作業員 (59年度)			
	大城 輝子、呉屋 幸江、幸地ヨシ子、仲松みゆき、新間 春美、		
	幸地ヨシ子、麗 幸子、小波津郁子、小波津康江、小橋川政枝、		
	大城 直也、比嘉 サダ、石川 ヨシ、石川 チヨ、石川 ツル、		
	諸見里ユキ、麗 直樹、幸地 克信、呉屋 正一、翁長 静江		
発掘作業員 (60年度)			
	小波津ヨシ子、小橋川政枝、呉屋千賀子、呉屋 正一、麗 幸子、		
	大城 幸、幸地ヨシ子、幸地 克信、幸地ヨシ子、比嘉 サダ、		
	石川 ヨシ、石川 チヨ、翁長 静江、諸見里ユキ、棚原 齐、		
	国吉 喜盛、亀川 盛勝、大城 輝子、石川 ツル、宮城奈々子		

第II章 遺跡の立地と環境

第1節 位置と環境

拝山遺跡は沖縄本島中央部よりやや南の浦添市字西原と西原町字森川の境に位置し、琉球石灰岩の丘陵に形成された遺跡である。

沖縄本島中南部一帯は琉球石灰岩（第4紀層）が、標高100～200mの台地をつくる。この石灰岩の分布する地域の地形は、断層による垂直状の断崖をつくる特徴があり、浦添、西原を走る断層崖の外、いくつもの断層地形をつくっている。又石灰岩の溶食作用にともなう差別的作用で形成された残丘地形（カルスト）をつくることもある。南部一帯ではシルト質第三紀層系泥岩（クチャ・ジャーガル）及び砂岩（ニーピ）の表層部に冠層として琉球石灰岩を載せた独立丘陵を、至る所で確認することができる。

遺跡の立地する拝山丘陵も、この残丘地形の一つである。丘陵は東西の長さがおよそ220m、南北が130m程の規模を有し、標高はおよそ134mある。117mで水平状に拡がった泥岩層の上に、厚さ17mの石灰岩を載せた地形となっている。石灰岩を頂にいだき、周囲の裾部を縁に囲むたゞまいは、一見グスクを思われる。

西から北側にかけて丘陵は比較的緩い傾斜面がめぐり、そのまま西原区方向へ伸びてゆく。



図版1 拝山遺跡遠景（南より）

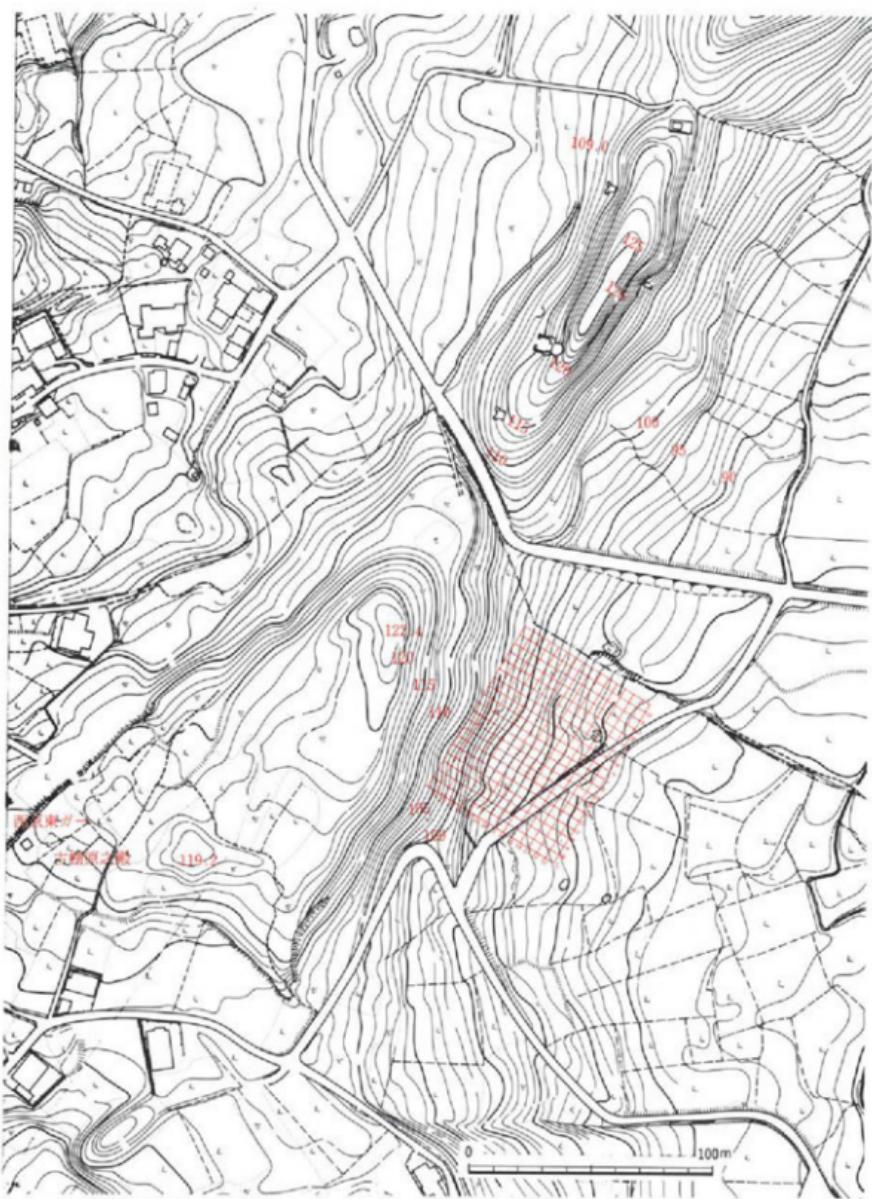


図1 拝山遺跡周辺の地形

東は掘切りで建設された道路を越え、西原町の櫻原グスク、琉大附属病院の台地へと連なっている。

南側は一転して15m程降る厳しい断崖を形成する。その後に緩い傾斜面が裾部へと伸びるが、ここには大小かなりの数の転石が見られる。その範囲も広い感をうける。今回調査を実施したのはこの斜面地である。

尚、図2は辯山から町道を越えて伸びた所に位置する丘陵の土性断面図で、工事用に作成したものを利用させてもらった。その地質層序については表1で示した。

参考文献

木崎甲子郎 『琉球弧の地質誌』 沖縄タイムス社 1985年5月

日本道路公團 沖縄建設所 沖縄自動車道（南部区間） 石川－那覇間 環境影響調査報告書 昭和53年6月

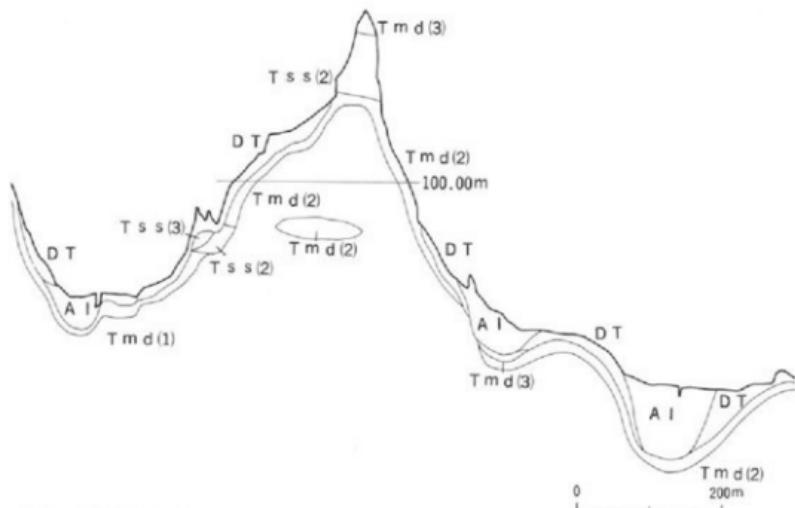


図2 地層の断面

表1 地質層序

地質年代	地層名	記号	説明	
第 四 紀	沖 積 世	堆 土 崩 積 土	泥岩を主体とした材料による埋土で、礫混じり粘土状を呈している。礫分は非常に脆く指圧で容易に潰れる程度となる。全体的に間隙が大きく緩い地盤となっている。色は暗褐色を呈す。 表層部1.0m程度は含水量が少く、やや固い地盤をなすが、下位になると含水量が多く軟弱な粘土層が堆積する。地盤粘土で粘着性が強く少量の腐植物を混入する。色は表層部が黄褐色、下部は青灰色を呈す。 山裾部にみられ、表層は石灰岩礫が混じる粘土から成るが下位になると泥岩の礫を処々に混入する。礫分は脆く指で容易に潰れ粘土状となる。全体に含水量は少なく、粘土としては硬い地盤をなしている。色は黄褐色を呈している。	
	洪 積 世	琉 球 層 群 那霸石灰岩	D I S	
			屋根上にテープル状に分布するものと、傾斜地に転石として存在するものがある。貝や有孔虫化石を多量に含み、硬い岩質であるが、浸水性が良く石灰岩の下部は浸透水の影響により風化が著しい。色は黄～白灰色を呈す。	
新 第 三 紀	鮮 新 世 － 中 新 世	砂岩(3)	T s s(3) 砂岩(2) 砂岩(1)	砂岩の強風化部であり、土砂化して細砂状をなす。色は褐色を呈す。 砂岩の風化部で、コアでは土砂状となるが、露頭では垂直の小崖をなしハンマーの軽打で容易に崩すことができる。色は黄褐色～暗褐色を呈す。 砂岩の新鮮部であり、コアは大半が土砂状となるが、処々硬質の短柱状として採取される。色は黒灰色を呈す。
		泥岩(3)	T m d(3)	島尻層の泥岩で風化が著しく完全に粘土化している。含水量は少なく、やや硬い粘質で色は暗褐色を呈す。
		泥岩(2)	T m d(2)	完全な粘土化の状態ではなく固結状となり、非常に硬い粘土状を呈す。岩片は軟質で指で潰れる程度である。色は暗灰色を呈す。
		泥岩(1)	T m d(1)	全体に棒状コアとなるが岩質は軟質で脆い。手で容易に折れる程度であり、岩片は指で壊れる。処々細粒砂岩を挟む。色は暗灰色である。

第2節 周辺遺跡と歴史的環境

1. 周辺の遺跡

西原町、浦添市で確認された埋蔵文化財は、27件である。その内、主な遺跡8件について、時期の古い順に概略を述べたい。

(1) 貝塚時代の遺跡

イ. 浦添貝塚

浦添、西原を走る断層の傾斜地に形成された貝塚である。約3,500年～4,000年前と推定され、本地域では最も古い遺跡。1970年の発掘調査の結果、土器を中心に貝製品・骨製品・石器が出土した。特に土器は所謂奄美系と称される。面縄前庭式、嘉徳式、面縄東洞式等で占めている。当時の九州本土・奄美・沖縄の関係を知る貴重な遺跡である。

ロ. 当山洞穴遺跡

浦添貝塚から東へ約1km、やはり石灰岩断層の傾斜地の洞穴に形成された貝塚である。洞穴は入口がチリ投棄で塞って調査は未だ実施されてないが、奄美系面縄前庭式土器が採集されていることで、浦添貝塚と同時期と推定される。

ハ. 牧港貝塚

牧港川沿岸に伸びる石灰岩が海蝕されてできた半洞穴に形成された貝塚。時期は弥生中期から後期である。^{註1} 1983年の発掘調査では、土器・石器・貝製品・貝類が出土した。獸骨・魚骨は出土していない。土器の中には九州山ノ口系の弥生式土器が、2片含まれている。

(2) グスク時代の遺跡

グスクの発生にともない12世紀から16世紀を考古学上グスク時代と呼んでいる。第三紀層泥岩（クチャ・ジャーガル）地帯での遺跡が増える。

イ. 我謝遺跡

中城湾に近い西原町字我謝の標高30～40mの小陵に形成された遺跡である。1982年町教育委員会が実施した発掘調査では、^{註2} グスク土器、次いで中国製輸入陶磁器が多量出土している。その他石器、鐵製品、青銅製品、玉類、自然遺物（炭化米・貝殻）等がある。押山遺跡とは近い距離関係にあり、ジャーガルという地理的条件も酷似する。又出土遺物でも同様な傾向を見せる。

ロ. 与那城貝塚

西原町字与那城、ジャーガル土壤地帯の標高30mの円錐状の丘陵に形成された貝塚。^{註3} 1979年中央公民館の附帯施設のテニスコートの建設中に発見された。1981年発掘調査が実施され、土器、須恵器、石器等が出土した。特に土器は、くびれ平底と呼ばれるフェンサ下層式が主体となることから、11世紀～12世紀後半の時代と考えられる。

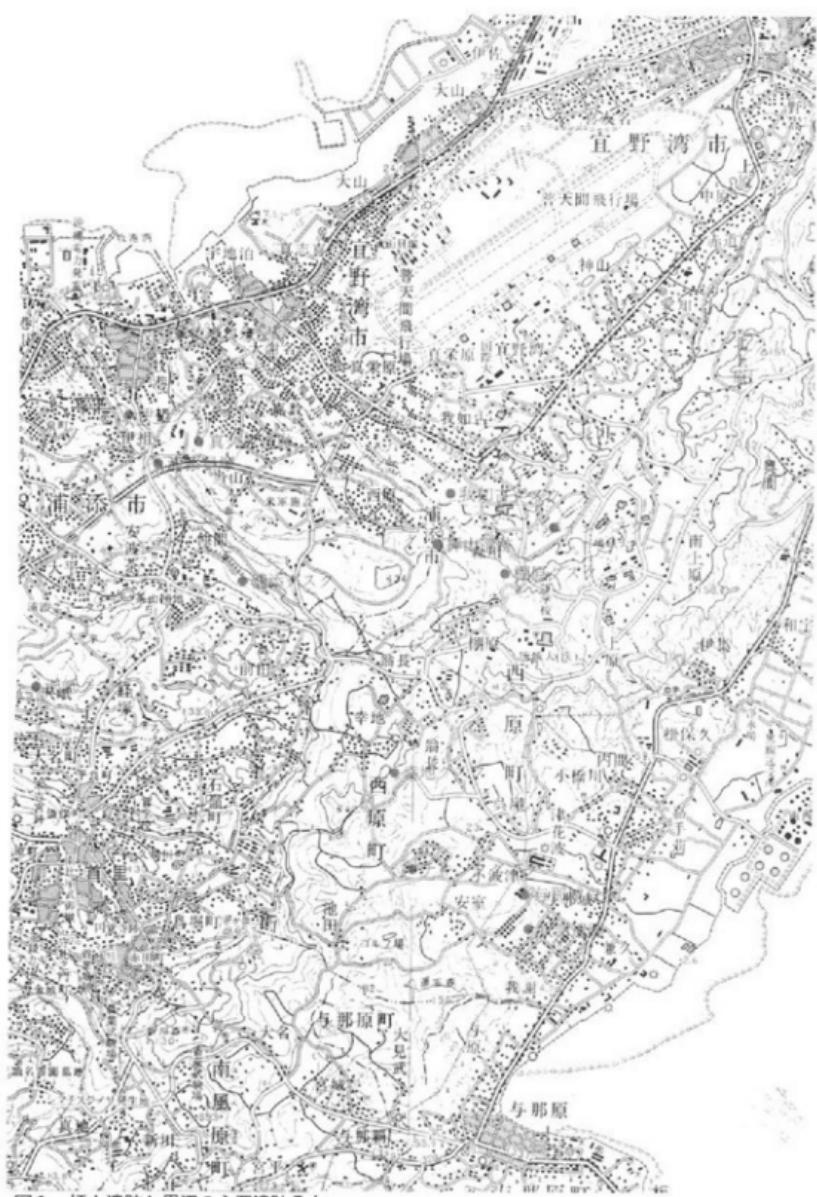


図3 拝山遺跡と周辺の主要遺跡分布

ハ. 真久原遺跡

浦添市字伊祖の小字真久原の標高45m～55mの石灰岩台地上に形成された遺跡である。時期は13世紀末から15世紀である。^{註4}1983年の発掘調査では、グスク系土器とともに、白磁・青磁・天目・瓦・滑石製品の出土があった。又13世紀頃までさかのばる保護柵遺構の発見は、グスク時代の発展過程を知る上で貴重である。

ニ. 浦添城跡

浦添市字仲間に所在し、標高140mの石灰岩台地上に築かれたグスクである。東西380m、南北60～80mを測り比較的の規模の大きいグスクである。

去る大戦では日米間に激しい戦闘の交わされた所である。又その後採石工事等がありかなりの部分が破壊されている。1982年から三次にわたり実施された発掘調査では、基壇の一部、掘立柱建物の遺構をはじめ、輸入陶器・土器・瓦・武具類・建物の金具が出土している。

ホ. 棚原グスク

西原町字棚原の西方の石灰岩丘陵上に築かれたグスクである。拝山丘陵の東方の延長に当たる。1975年の分布調査でグスク系土器が表面採集されただけで、遺物は殆んどみられない。石垣等の遺構も認められない。採石工事によって北東側はかなり破壊されている。



図版2 浦添貝塚遠景

註

註1. 大城 慧、金城亜信「牧港貝塚・真久原遺跡」沖縄県教育委員会 1985年

註2. 大城 慧 「我謝遺跡」 西原町教育委員会 1982年

註3. 当真嗣一 「与那城貝塚」 // 1980年

註4. 註2に同じ



図版3 浦添城跡遠景（断層崖の中央付近）

ロ、拝山丘陵内の史跡

拝山丘陵、遺跡内には、古棚原之御嶽（ふるたなばるのうたき）、古棚原之殿（…とうん）、西原東ガ一（にしづらひがや）等の史跡が見られる。かつてビジュルもここにあったという。丘陵は文字通り全体が聖山である。拝山の呼称もここからきたのであろう。

1. 古棚原之御嶽

丘陵の南端に古棚原之嶽はある。今回調査を行った斜面はここの真南下となる。

現在御嶽には、セメント製の祠が建っている。祠は屋根の部分が平面で、約110cm×84cm、高さ5.5cmある。頂の大棟は17cmを測り、その中央にはやはりセメント製の三日月を模したのを載せている。三日月は径約24cmの下弦の状態で、大棟の両端とは不釣合に大きくはみ出している。

屋根を支えている部分は、高さ45cmを測り、左右の面は壁となり、前後を空けてトンネル状になっている。その中央には、砂岩製の香炉を配している。

御嶽は村を愛護する祖靈神を祭った所とさ
^{註1}れている。「琉球國由来記」によると、本御嶽には、神名カナモリギミの御イベを祭ったと著している。

2. 古棚原之殿

丘陵西側の入口から約40mの所に、プロックに囲まれた広場がある。地元で「殿毛」（トゥンモー）と呼ぶ、古棚原之殿である。

殿毛は面積約90m²あり、南北に僅に長い略長方形を呈している。普段は全く使用されてない。中央を横切り御嶽へ向う道が赤土となっている外は、伸びた雑草に覆われている。

一般に殿と称されているのは、沖縄本島北部の神アシャギに似た性格のものといわれ、御嶽の神を招請して祭祠を行う所とされている。^{註2}ここ殿毛でも旧暦3月3日御嶽の神を招いて盛大な行事を行っている。



図版4 古棚原之御嶽



図版5 古棚原之殿

3. 西原東ガー

押山丘陵の北西側崖下に湧泉がある。西原区の東に位置することから、西原東ガーと呼んでいる。ガーとは、地元の言葉で湧泉のことをいう。湧泉は粘板岩とその上を覆う石灰岩の不整合部から湧出した水を、細かく丁寧に切石積で囲んでいる。水は澄み、水量は今なお豊富である。

ところで西原東ガーは近年まで西原区において唯一の水源であった。子供が生まれた時の産湯、又正月早朝一番に仏壇に供する初水（ハチミジ）もここで汲んだ。水道の普及でその重要性は少し弱まったがしかし、旧暦6月のウマチーや夏の大綱ひき等の字の行事は、先ずここで水神に感謝し区民の健康を祈願してから開始しているという。

浦添市教育委員会が現地に建てた説明板には「……600年前から現存する湧水といわれ現存する石積にしたのは300年前と伝えられる。……」とある。14世紀頃から湧出ていたら、押山遺跡で活動した人々にとっても、当然貴重な水源であったろう。

市教育委員会は1981年市の文化財史跡に指定している。

註

註1. 仲松弥秀 「御嶽」「沖縄大百科辞典」 沖縄タイムス社 1983年

註2. 琉球政府文化財保護委員会監修 「殿」「沖縄文化史辞典」



図版6 西原東ガー

第三章 調査の経過

発掘調査は1985年3月4日から7月26日の日程で実施した。

遺跡は石灰岩の丘陵とそれを取巻く裾部から形成されている。今回の調査は南斜面の一部が対象となったのだが、尚東西約85m、南北約110mの広い範囲である。先ず調査範囲を図4のように3地区に区分した。調査地区には丘陵とほぼ並行して里道と市道が走っている。この2道を区切る目安とし、斜面の上方からI地区、ロ地区、市道を挟んでハ地区とした。

又調査地内にはすでに自動車道建設のための測量杭が設置されていた。杭にはそれぞれ、エレベーション(E L)、座標の測定値が表示されていることから、グリッドの設定作業にはその成果を使用させてもらう。

グリッドの設定は南斜面の東西にそれぞれ設置されている工事用杭S TAB 0+60(E L86.5m、座標X27128,2059、Y25075,6958)とS TAB 1+00(E L、86.50m、座標X27117,8239、Y25113,5658)を結ぶ主軸ラインを設けた。この主軸ラインを4m毎に区切り、そして4m×4mを単位とするグリッドを主軸北側の遺跡全体に拡げていく。S TAB 0+60から東へ設置した杭にB、C、D、E、西へあ、い、う、えのアルファベットと50音の記号を与え、同様に北側に設置された杭には11、12、13、14の算用数字を与えた。



図版7 ロ地区発掘風景

この両者の組合せでできた、A-10、A-15、B-15などの杭の名称をその北東に位置しているグリッドの名称とする。全体のグリッドの設置状況は図4で示した通りである。

調査は樹木の伐開終了の後ハ地区から始めた。先ず飛び地状にグリッドを開け包含層を確認する方法でロ地区、イ地区の順に進める。

調査の結果イ、ロ地区で遺物を含む黒褐色土を検出することができた。しかしいずれも地山直上の凹地に溜った状況の規模の小さいものである。かつて黒褐色土層は南斜面全域に堆積していたと考えられる。しかしほとんどが地滑りなどで崩壊し、比較的平坦あるいは凹地の部分だけがそのまま残ったのであろう。

なおハ地区においても西端で黒褐色土層を検出したが、拡がりの主要部分は市道下に伸びていた。そのため工事関係者とも協議を行い調査は自動車道建設工事の際迂回路を建設し、改めて実施するものとした。

ハ地区のこの一部を残し7月26日に調査は一応終了した。しかし同年9月初旬2週間に亘って降り続いた大雨で土砂壊れが発生した。土砂壊れは規模が大きく、調査には危険を伴うことが予想され、結局この地区における調査を断念せざるを得なかった。



図版8 ハ地区発掘風景

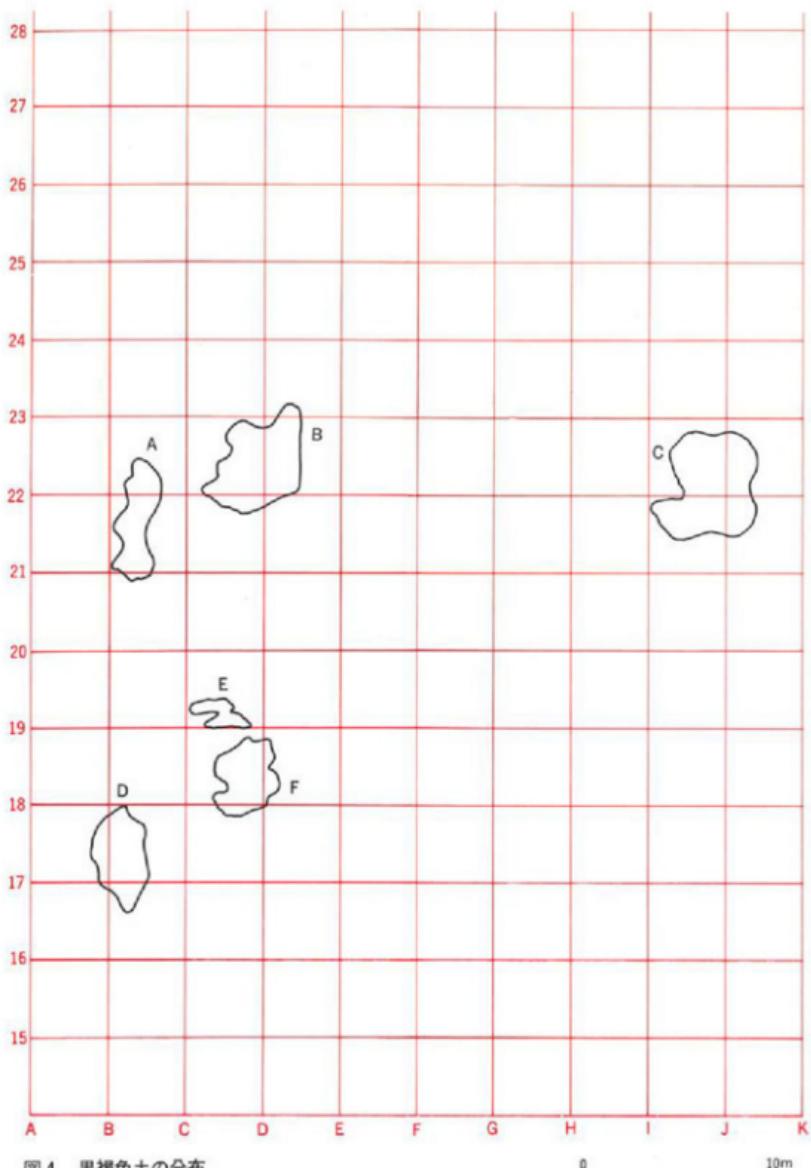


図4 黒褐色土の分布

0 10m

第IV章 調査の成果

第1節 層序

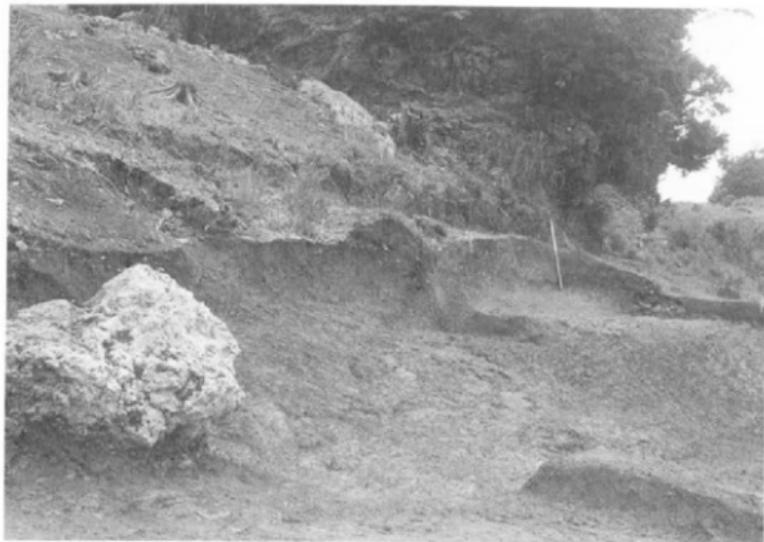
飛び地状にグリッドを開け、包含層の確認作業を行う。さらにイ地区、ロ地区では斜面の全般的な状況を把握するため東西のグリッドの20ライン、そして南北のAライン、Fラインと十字状に大がかりのトレンチ掘りを実施した。図5、図版9はその壁面の層の状況である。

第I層 約1mの厚い表土層である。磁器、陶器など多量に出土するが現代遺物を含む搅乱層である。レンズ状に部分的に認められる黒褐色土層は、斜面が崩壊した時できたものである。

第II層 地山への移行層で、約30cm黄褐色を呈し遺物は全く含まない。

第III層 青灰色土層（島尻層群）のいわゆる地山である。

グリッド掘り、十字状トレンチ掘りでも、遺物包含層は確認できなかった。しかし発掘域を拡大していく中で、最終的には小規模ながら6地点で検出することができた。以下イ、ロ地区の特徴と層序について述べる。



図版9 グリッド20ラインの層序

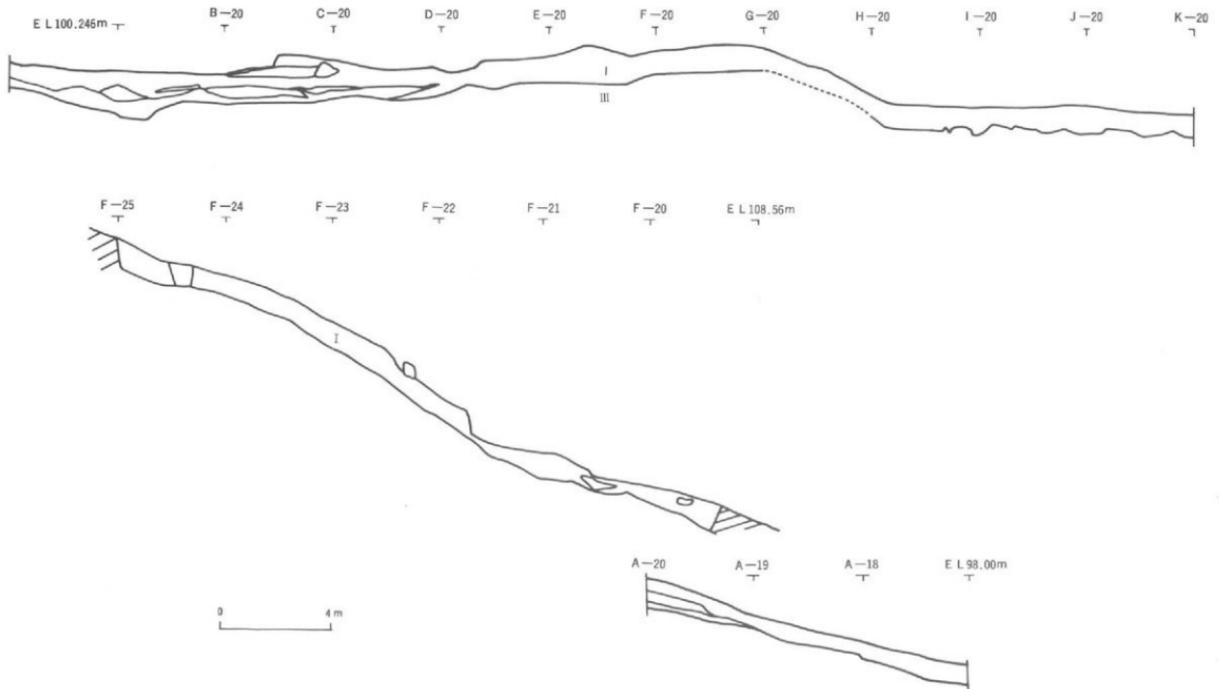


図5 層序

イ地区

樹木の茂る最も高所に位置する急斜面部をイ地区とした。

イ地区は東西68m、南北が28mの規模である。樹々の間には頂上から転落した石灰岩の大石が点在している。その転石を利用して沖縄戦当时日本軍が建設した陣地跡が、2ヵ所見つかった。発掘中にも小銃弾、手榴弾等かなりの量採取した。丘陵頂部の石灰岩にも掘り込んだ構築物があり、戦時中丘陵がそのまま要塞化していた事が想像される。

ところでイ地区では、A-21、B-18、K-21を中心とする3地点で黒褐色土層を検出した。しかしいずれも径5m程の小規模なものである。図6、図版10はA-21を中心とした地点Aの状況を示したものである。

第I層 磁器、グスク式土器、陶器の外砲弾破片などの現代遺物が出土する。基盤の青灰色土層（島尻層群）と黒色土層の混在する攪乱層である。

第II層 磁器、グスク式土器、貝などを含んだ黒褐色土層。崖上から投棄された二次堆積の層ではあるが、現代遺物を全く含まず、遺跡の形成された早い時期に堆積したものだと考えられる。

第III層 地山への移行層である。黄褐色を呈し遺物は全く含まない。

第IV層 青灰色土層（島尻層群）でいわゆる地山である。

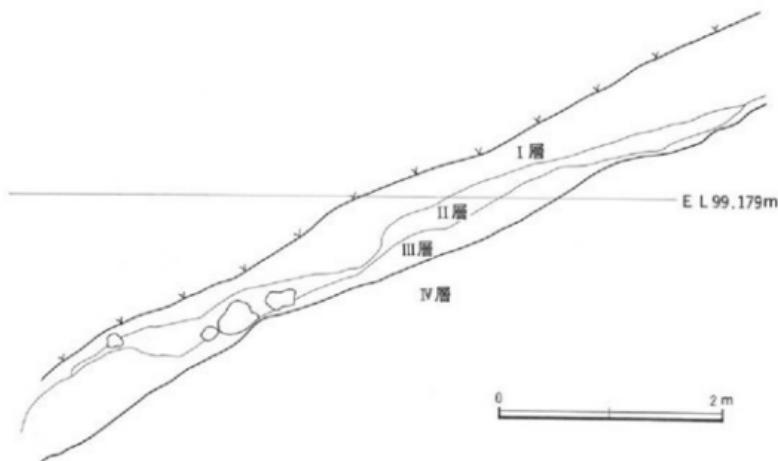


図6 イ地区黒褐色土A地点断面

ロ地区

グリッドの20ラインを境に南に約2m程降ると、小崖が形成される。このグリッド20ラインと市道の間約35mをロ地区とした。本来は斜面の麓になるので緩かな傾斜地であったはずだが、ブルトーザで斜面上方を削平し、耕作地にした所である。しかし調査の時点ではほとんど原野となっていた。イ地区同様に大形石灰岩の転落がみられる。

ところでロ地区では、B-17、C-18、C-19、を中心とした3地点で黒褐色土層を検出した。その内最も大きいのが図7、図版11で示したC-18のF地点である。他は1m弱のかなり小規模のものである。F地点の層序は次の通りである。

- 第I層 磁器、グスク式土器が多量に出土した。瓦、鐵屑などの現代遺物も含んでいる。基盤をなす青灰色土と黒褐色土の混った搅乱層である。
- 第II層 磁器、グスク式土器、石器、貝殻を含んだ黒褐色土層、イ地区第II層の出土遺物と接合できる資料があり、曾って一連の層であった事が窺える。尚30cm大の石灰岩礫を多量に供っている。現代遺物は含まない。
- 第III層 地山への移行層で遺物は全く含まず、黄褐色を呈している。
- 第IV層 青灰色、泥岩（クチャ）層でいわゆる地山である。



図版10 イ地区黒褐色土 A地点

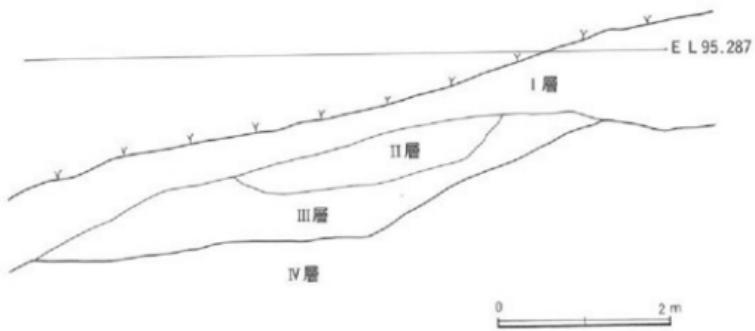
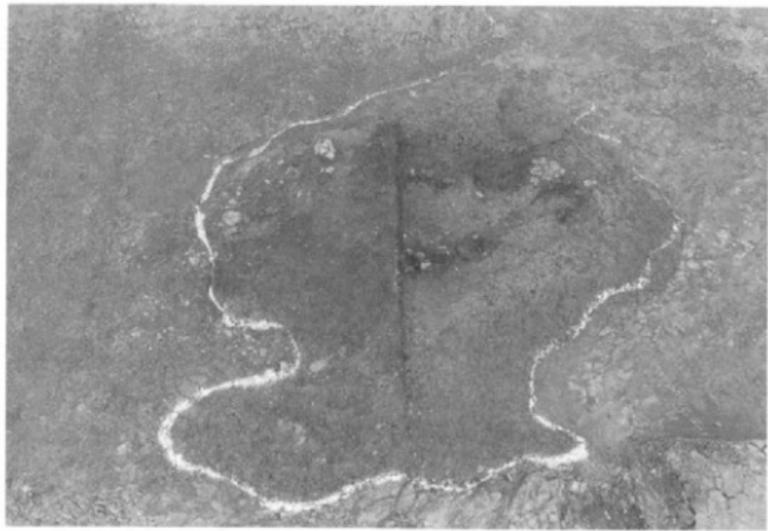


図7 口地区黒褐色土F地点断面



図版11 口地区黒褐色土 F地点（中央のライン図7）

ハ地区

市道から南側がハ地区である。これまで農耕地と使用されている所で、更に南に緩い傾斜を示すものの平坦な地形である。地区としては最も広い範囲である。

前述したように、北西部での黒褐色土を除いては、遺物包含層は検出できなかった。全体が斜面からの流れ込み堆積でできた地区である。

遺物の出土もイ地区、ロ地区と比較してはるかに少い。特に磁器については、全く得られなかった。出土品の主なものは、土器、陶器、陶質土器、貝類である。陶質土器については、イ地区、ロ地区で全く出土していない。土器はほとんど表採である。



図版12 ハ地区発掘風景

第2節 出土遺物

A. 人工遺物

本遺跡から、青磁、白磁、陶器、陶質土器、須恵器、土器、貝製品、骨製品、玉、石器、鉄製品、青銅製品が出土した。以下これらの人工遺物について述べる。

(1) 青 磁

本遺跡で得た青磁は、碗167点、皿40点、鉢1点の計208点である。その出土状況を示したのが表2である。大部分が搅乱された層から出土したものである。器種は、碗、皿、鉢の3種である。

表2 青磁地区別出土状況

器種	分類	イ地区		ロ地区		ハ地区		計	
		I	II	I	II	I	II	I	II
碗	割花文	外反口縁	2					2	
		直行口縁	1	4	2	3		3	7
	櫛搔文				1			1	
	蓮弁文	鍋蓮弁文	12	8	21	6		33	14
		無鍋蓮弁文	1		3			4	
	無文	外反口縁	7	2	6	2		13	4
		直行口縁	3		4			7	
	底部	I			2			2	
		II	1		2	1		3	1
		III	1	1	3	1		4	2
		IV	1		1			2	
		V	1					1	
	その他		41	4	17	2		58	6
皿	櫛搔文			1		4	1		5
	蓮弁文			2		5	1		7
	双魚文					2			2
	輪花文			1					1
	無文			3		1	1		4
	底部					1			1
	その他		14	1	2			16	1
鉢					1				1
合計			92	20	78	18	0	0	170
			112		96		0		208

A 瓢

甕の資料は167点の出土である。文様、口縁形態などの特徴で、1 刺花文甕、2 柳搔蓮弁文甕、3 蓮弁文甕、4 無文口縁甕、5 胸部有文甕、6 底部資料に分類した。

1. 刺花文甕 (図8 図版14)

内体面に蓮花などの刺花文を有する龍泉窯系の青磁である。資料は20点である。

胸部からの立上りで、イ、口縁端が外反するもの、ロ、口縁が直行するもの、ハ、底部資料に分類した。

イ、胸部から口縁端にかけて外反する

1は内面に竈による線の細かい片切彫の蓮花、外面に圓線を描く。両面に透明灰緑色の釉を施すが、気泡跡の無数の小さな凹と貫入がみられる。

2は明るい淡青色の釉を施し、両面に細かい貫入がみられる。

ロ、胸部から口縁端にかけて直行する

3は内面に片切彫の幅広蓮花文を描く。片切彫は深さ、幅とも一定せず雑である。釉は灰緑色の色調を呈し、口縁外面では肥厚状になる。肥厚部に細かい貫入がみられる。

4の内面の竈影は0.3cmの幅を有しつつ深く蓮花文も鮮明である。外面腰部には軸轉成形痕を残す。灰緑色の釉を施すが口縁外面で釉だれが厚くなり幅約1cmの波状になる。

5、6は内面上位に2条の圓線を描く。その直下にも施文が認められるが小破片のため不明。

5は細かい気泡を含む素地に茶緑色の釉を施す。6も素地に気泡が認められる。釉は淡い茶緑色の色調を呈し、釘先程の無釉の凹と細かい貫入が内外面にみられる。

8、9は螺旋状の草花を描く。細片のため文様の内容は不明だが、線め細かく丁寧である。

8は口径16cmを推定する。釉は透明灰青色の色調で外面には粗い貫入がみられる。9も推定口径16cmで、釉は灰緑色を呈す。

10、11は同一個体と考えられる。内面に竈影の深い丁寧な文様を描くが、細片のため内容は不明である。

ハ、底 部

底部資料は4点である。分類は46ページの分類基準及び図16の模式図に基く。



図版13 青磁甕出土状況

表3 菊花文碗底部観察表

図・図版番号	分類 出土地	高台径	高台高 内部	高台高 外部	疊付幅	底部厚	観察事項
図9-12 図版15-15	I ロ- I		6	0.3	0.9	0.7	1.4 内底見込みに浅いヘラ彫の菊花文を有す。素地は細かい黒色粒を多く含み、灰青色の釉を外底面を除いて厚く施す。
図9-13 図版15-13	I ロ- I		6.2	0.2	1.1	0.8	1.7 内底見込みを圓線で囲み、中央に草花文を配する外底面には重ね焼きの跡を残す。釉は淡青色の色調で、外底面を除いて厚く施す。
図9-14 図版15-14	I イ- I		6.3	0.4	0.7	0.8	1.2 見込みが圓線を境に一段盛る。中央は僅かに凹み「金玉満堂」が押印される。素地は細かい気泡を含む。釉は灰緑色を呈し全面に施釉した後内底面を拭きとっている。疊付には赤褐色の3足の目跡が残る。
図9-15 図版15-15	I ロ- I		6	0.4	0.8	0.8	1.3 灰緑色の釉を高台脇まで厚く施す。一部は疊付外底面まで釉だれが及んでいる。

2. 柳搔蓮弁文碗 (図10 図版18)

16は外体面に片切彫の蓮弁と柳搔文、内体面に片切彫の蓮花文を描く。いずれも彫りが深く釉調も良好なことから文様は鮮明である。釉色は透明淡緑色の色調を呈している。

3. 蓮弁文碗 (図10 図版18)

外体面に竈による片切彫の蓮弁文を有する碗である。88点の資料が出土した。これらはイ、蓮弁文が鍋を有する鍋蓮弁文とロ、鍋を有しない無鍋蓮弁文に分けることができる。

イ. 鍋蓮弁文碗

片切彫の蓮弁文は幅広で盛上り立体感を有す。中央を走る鍋の稜線も明瞭である。盛上りを強調するため弁先の間を搔きとるのもある。施文の方法で更に細分をした。

① 独立した蓮弁の間を弁先だけの間弁でうめる。

17、18は丸味を帯びた膨みのある蓮弁文である。弁先の間を薄く搔きとるため、浮彫に似た立体感がある。17は口径16.6cmを推定する。透明灰緑色の釉を厚く施すが口唇部では全面に剥落する。イ地区第II層からの出土。18は淡緑色の釉を厚く施す。

19は間弁の片切彫の側線が細い。又弁先が低い位置に配されたことから、口唇との間がかなり空白となる。推定口径16cmで釉は淡緑色の色調を呈す。20は左側線の片切彫が幅広く、右側線そして間弁は細い。弁先の位置が揺わず施文は稚である。推定口径16.5cmで、淡緑色の釉は薄い。

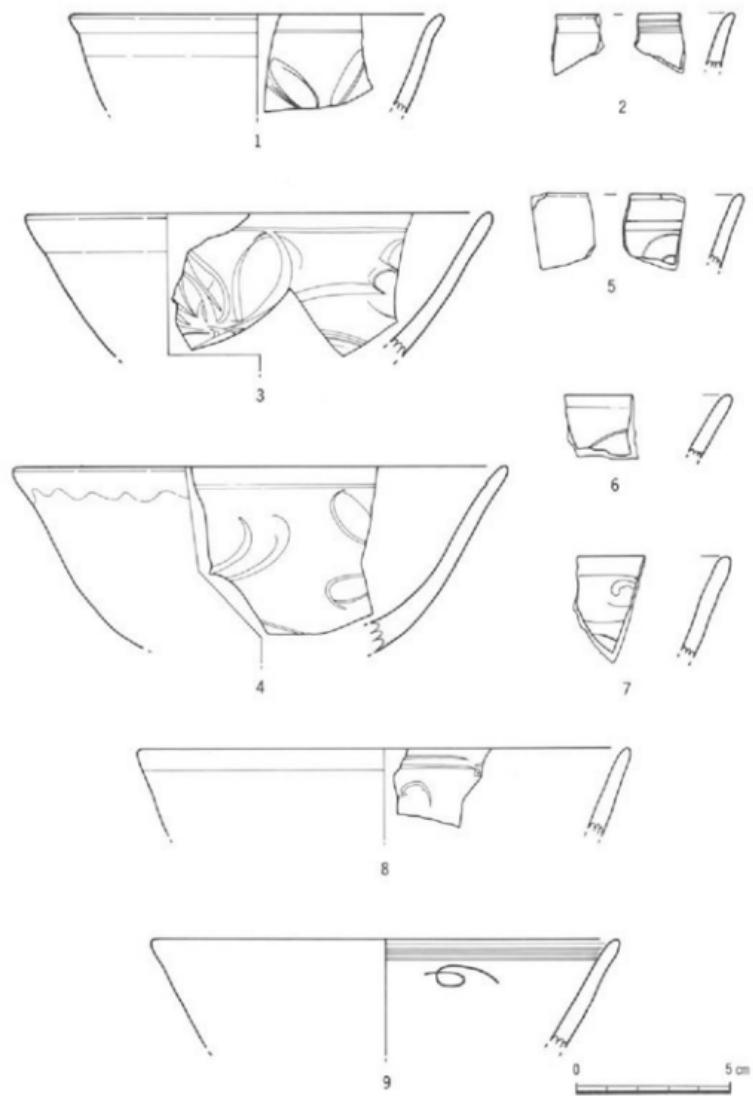
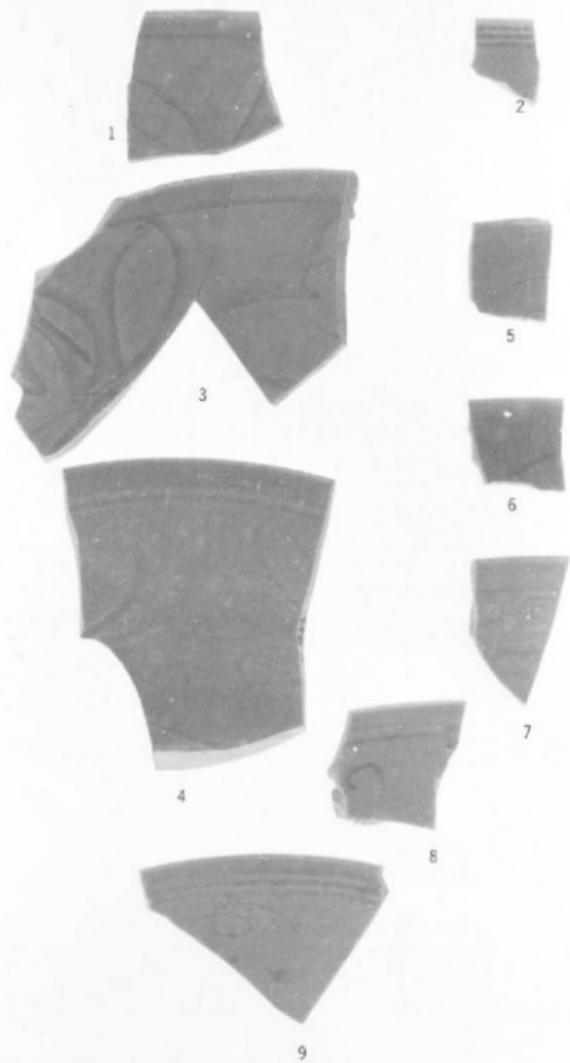


图8 刻花文碗



図版14 刺花文碗

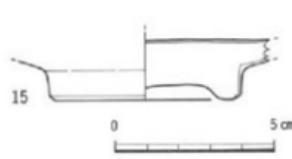
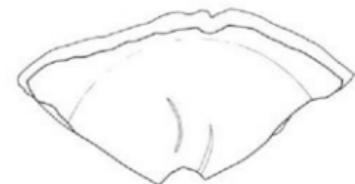
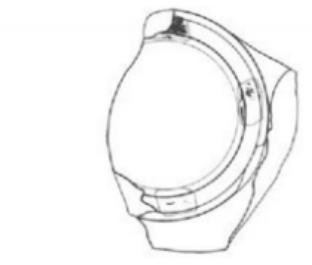
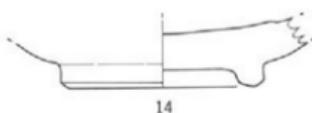
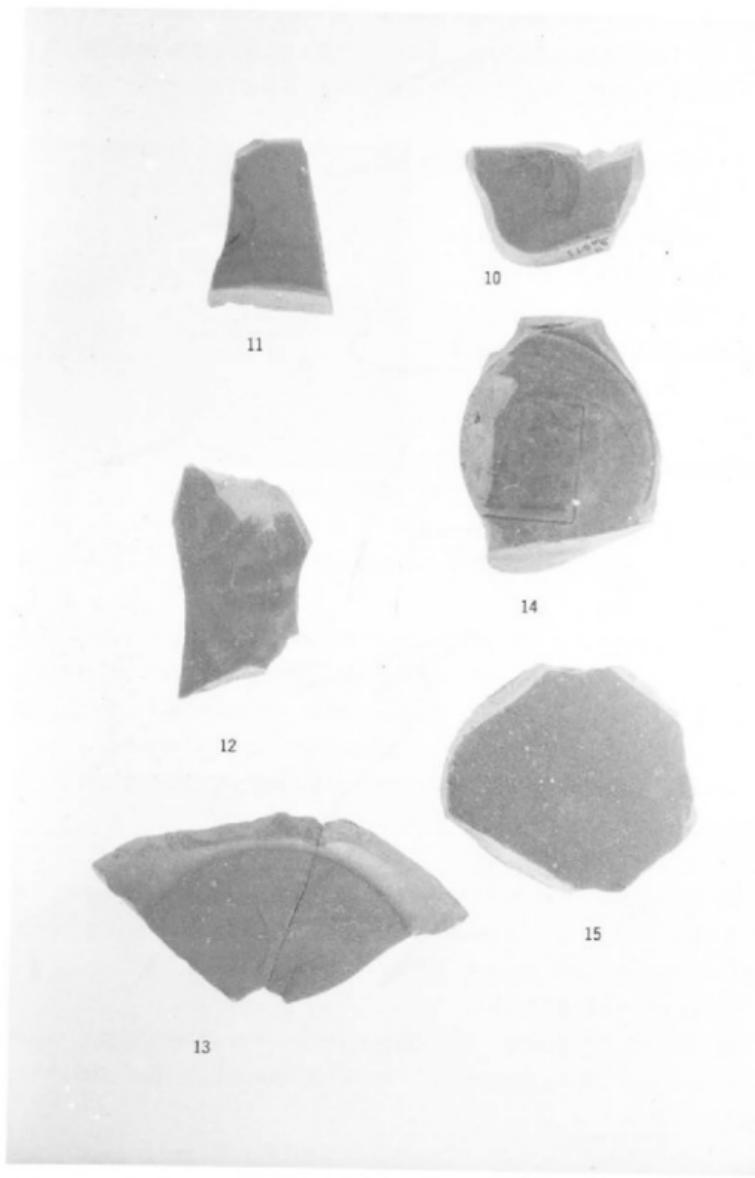


图9 刻花文碗



图版15 划花文碗

21は蓮弁の弁先が口唇に届き、弁先間が薄く搔きとられる。片切形の側線は、0.5cmの幅を有しだい。口径は15.3cmを推定する。素地は細かい気泡を多く含み、茶緑色の釉を厚く施す。22は蓮弁の側線が体部の中央付近で略され、鎬の稜線だけが胸部下端まで伸びている。推定口径は15cmで淡緑色の釉を厚く施す。

23、24は口縁の小破片である。透明淡緑色の釉を厚く施す。

25、26も口縁端の小破片で、灰緑色の釉には粗い貫入がみられる。

27の蓮弁は盛上りがなく平坦に描かれる。その間を対象的に丸く膨む幅のある間弁でうめる。間弁の弁先は丸い。推定口径22.5cmでかなり大振りの碗である。釉色は失透性灰緑色を呈し、発色は悪く器面もサラッとしている。

28は蓮弁文の途中から破損するため最幅長は不明だが、残存部分でもなお2.5cmを測る幅広の蓮弁である。口径10.7cmを推定する。釉色は灰緑色を呈し薄い。

29、30は透明淡緑色の釉を薄く施す。29は蓮弁の幅員が1.5cmを測り本遺跡出土の鎬蓮弁文の中では最も短かい。蓮弁は中央で盛上り稜線は明瞭。30は弁先の両側線がX字状に交錯する。

31、32は間弁が蓮弁間をうめきっておらず、右側線の下端が隙間となっている。31は失透性的灰緑色の釉色で、口径15.5cmを推定する。32は淡緑色で、口径15cmを推定する。

33は弁先の側線が描わず、間弁も両端で弁間をうめきっておらず施文は雑である。釉色は淡緑色の色調を呈し、両面に縱位の粗い貫入がみられる。

② 蓮弁をM字状に連ねるもの

34、35は2個の蓮弁がM字を描きながら横位に転回している。蓮弁の間は薄く搔きとられることで蓮弁は立体感を増す。中央の稜線も明瞭である。口径は14.5cm、17.3cmを推定する。釉色は淡緑色の色調を呈す。35は縦位の貫入がみられる。

③ 蓮弁の転回が不明なもの

36は蓮弁の右にかなりの空白がある。間弁を有しないものではとも考えられるが、小破片のため不明である。弁先はX字状に交錯する。釉は失透性的淡緑色を呈し薄い。両面にやや粗い貫入がみられる。

37、38は横列する弁先部分だけが認められる。資料が文様の中葉から欠失した破片のため転回の方法は不明である。弁先の間は搔きとられ蓮弁は立体感がある。37は素地に細かい気泡を



図版16 鎬蓮弁文碗出土状況

含み、釉色は淡緑色の色調を呈す。38は口縁端が小さく反る。釉は灰緑色の色調で推定口径は両者とも16cmである。

39も蓮弁が盛上り、弁先は三角状に尖る。推定口径16cmで失透性の茶緑色の釉を厚く施す。

40、41、42は蓮弁の一部が認められる細片の資料である。40は器厚が薄く淡緑色の釉を厚く施す。41は素地に気泡を多く含み、淡緑色の釉を厚く施す。42は弁先間が薄く搔きとられ弁先が尖る。釉色は灰緑色を呈す。

④ 底部 (図12・13 図版21・22)

12点の底部資料が出土した。下記の表4の観察表にした。分類は46ページの分類基準及び図16の模式図に基く。

表4 鎬蓮弁文碗底部観察表

図・図版番号	分類	出土地	高台径	高台高 内部	高台高 外部	疊付幅	底部厚	観察事項
図12-43 図版20-43	I		5.4	0.4	0.7	0.7	1.4	内底見込みに印花文を有す。釉は淡緑色を呈し施釉後に外底面は拭きとる。外底面に重ね焼きの際のトンキンの一部が付着する。
図12-44 図版20-44	I		5.3	0.3	0.7	0.8	1.4	内底見込みに印花文を有する。灰緑色の釉を胴部脇まで施すが、釉だけが高台脇まで及び。
図12-45 図版20-45	I		5	0.4	0.8	0.6	1.6	内底見込みを深いV字状の圓線で囲み、中央にはゼンマイ状の印文を配す。釉は失透性の淡緑色で高台脇まで厚く施す。
図12-46 図版20-46	I		5.5	0.3	0.9	0.7	1.6	内底見込みに印花文を有する。印花文を中心には小さな敲打をくり返しながら全体を梢円状に成形する。疊付にもこの時の小さな破損が残る。素地は細かい気泡を含み透明淡緑色の釉を施した後、高台内部は搔きとる。
図13-47 図版21-47	I		5.5	0.2	0.9	0.7	1.7	脇部と高台の境が軽く抉られ、高台脇には7mm間隔で縱位の刻文が彫刻する。
図13-48 図版21-48	I			0.3	1.0	1.0	1.4	釉は茶褐色の色調を呈し高台脇まで薄く施す。両面にやや粗い貫入がみられる。
図13-49 図版21-49	I		5.6	0.3	1.0	0.9	1.4	細かい気泡を含む素地に、灰緑色の釉を高台脇まで厚く施す。外面では気泡跡が2mm程の凹を隨所につくる。

図 13-50 図版21-50	I	5.5	0.3	0.8	1.0	1.3	透明淡緑色の釉を高台脇まで厚く施す。釉は一部で疊付にも及び拭きとっている。
図 13-51 図版21-51	I	5.4	0.3	0.6	0.7	1.4	失透性の茶緑色の釉を高台脇まで厚く施す。両面にやや粗い貫入がみられる。
図 13-52 図版21-52	I	5.5	0.4	0.7	0.9	1.3	釉調は51に同じ。 疊付に砂粒が付着する。
図 13-53 図版32-53	I	5.5	0.5	1.0	0.7	1.1	釉調は51に同じ。 内底面にやや粗い貫入がみられる。
図 13-54 図版21-54	I	5.4	0.3	0.8	0.8	1.3	釉調は51に同じ。 胸部下半に気泡跡の小さな凹みがある。 高台内側の無釉の部分がレンガ色を帯びる。

ロ. 無縫蓮弁文碗 (図13 図版21)

鎬のない蓮弁文碗の資料は、口縁1点、底部2点の出土である。底部は観察表にした。

55は直行口縁で端部は舌状に仕上げる。蓮弁は口唇に届き、間弁の両側線も高い位置に配している。片切彫は一定の幅を持って丁寧に施文され、淡緑色の釉の薄いこともあり蓮弁は明瞭である。

表5 無縫蓮弁文碗底部観察表

図・図版番号	分類 出土地	高台径 内部	高台径 外部	疊付幅	底部厚	観察事項
図 13-56 図版21-56		5.9	0.8	1.1	0.6	1.2 内底見込みを圓線で囲み、中央に印花文を配す。外底面を作る削りは深い。 疊付は両端を削り丸く仕上げる。
図 13-57 図版21-57	不明	6			0.5	1.0 片切彫の側線は4mmの幅を有し、釉の薄いこともあり明瞭である。釉は透明灰緑色の色調を呈し内外面には微細の貫入がみられる。

4. 無文口縁碗 (図14・15、図版22・23)

無文の口縁碗資料は21点の出土である。口縁の形態でイ、口縁端が外反する。ロ、口縁端が直行するに細分した。

イ. 口縁端が外反するもの

58、59は器厚が薄く軽量感のある資料である。やや粗粒の素地に失透性茶緑色の釉を薄く施す。58は口縁外面に輻轂成形痕があり、口径14.9cmを推定する。細かい貫入が内外面にみられる。

60は胴部から口縁への器厚が次第に薄くなり、外反の手前で1.3cm幅の成形時の平坦面を残す。口径は15.3cmを推定する。釉は淡青色の色調を呈し、外面で縦位に、内面では横位のやや粗い貫入がみられる。

61は口唇直下に2.5mm幅の圓線を3条描く。素地は細かい気泡を含み、深緑色の釉を施す。両面にやや粗い貫入がみられる。

66、67は内外面に竈による圓線を描く。66は灰青色の厚い釉を施す。67は灰緑色の釉で、いずれも縦位の細かい貫入がみられる。

68は推定口径10.7cmで、出土した青磁碗の中でも最も小振りの碗である。透明灰青色の釉は厚い。

69は推定口径14.8cmでイ地区第II層の出土である。淡緑色の厚い釉を施す。両面に粗い貫入がみられる。

70、71は灰青色の釉を薄く施すが、白濁の部分もあり発色は良くない。両面に粗い貫入がみられる。口径は14.8cmと14.1cmを推定する。

ロ、口縁が直行するもの

72は素地の粒子がやや粗く、釉は深緑色を呈している。推定口径14.1cmである。

73、74は茶緑色の色調だが微細の貫入を伴い発色は良くない。73は口径14.1cmを推定する。74は器厚・施釉とも薄い。

75、76は器厚が異なるので同一個体ではないが、素地、厚く施された緑色釉などから同一窯の作だと考えられる。いずれもロ地区第II層からの出土である。

77は口径10.1cmの内彌ぎみの比較的小振りの碗である。口縁外側が僅かに膨む。細かい気泡を含む素地に淡緑色の釉を厚く施す。両面に粗い貫入がみられる。

78も内彌する小振の資料である。茶緑色の釉を厚く施すが両面に粗い貫入がみられる。口径は10.3cmを推定する。

5. 有文の胴部資料（図17 図版24）

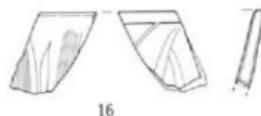
有文胴部の資料は2点出土した。

79は内面に模様を施すが細片のため、内容は不明。釉は灰青色の色調だが白濁し粗い貫入もあり、手触りはザラッとしている。

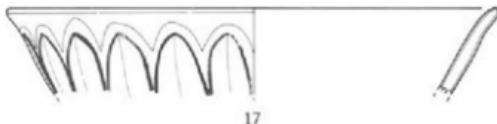
80も細片資料で文様は不明。釉は灰緑色の色調を呈す。



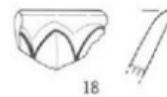
図版17 蓮弁文碗出土状況



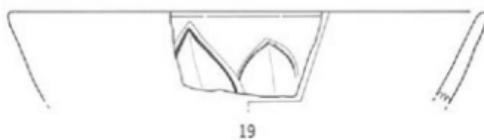
16



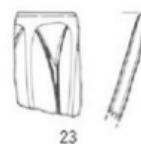
17



18



19



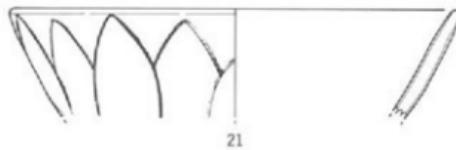
23



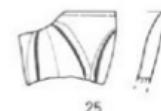
20



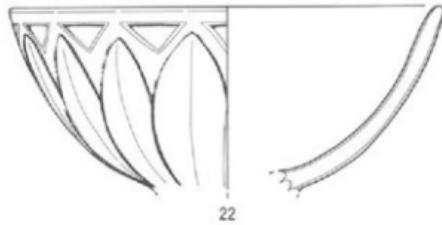
24



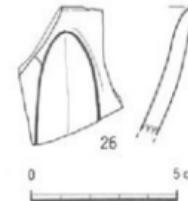
21



25



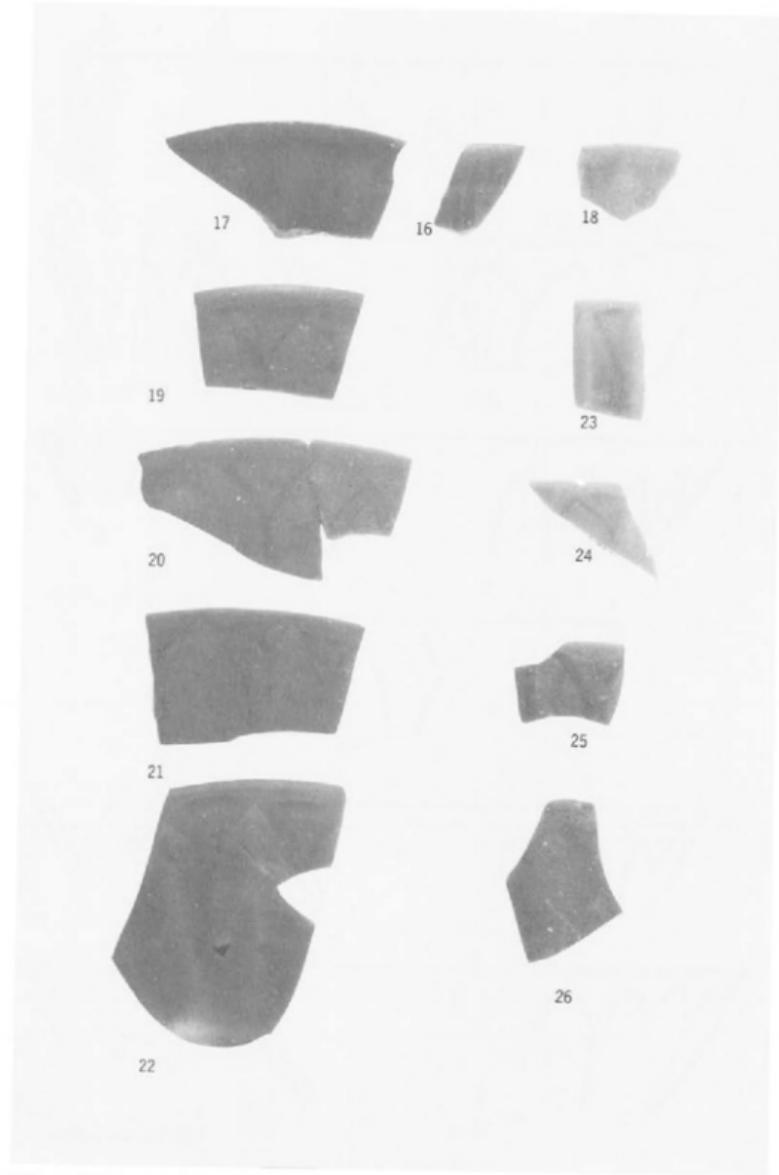
22



26



図10 檻搔蓮弁文碗・鍋蓮弁文碗



図版18 榴捶蓮弁文碗(16) 鎏蓮弁文碗(17~26)

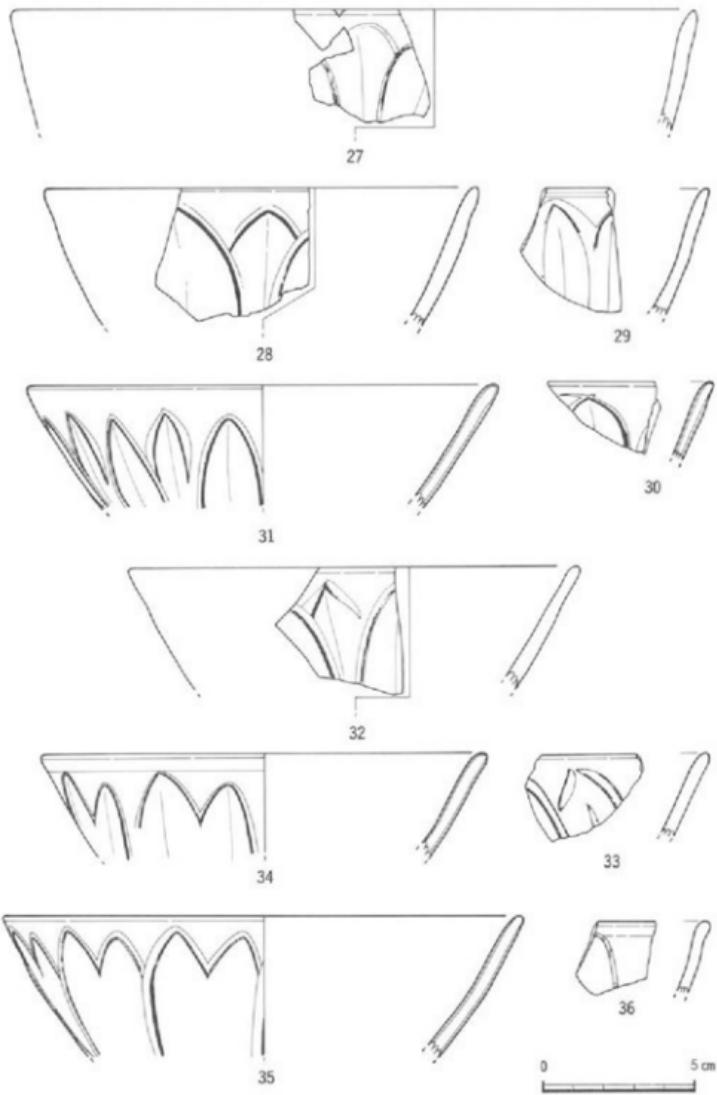
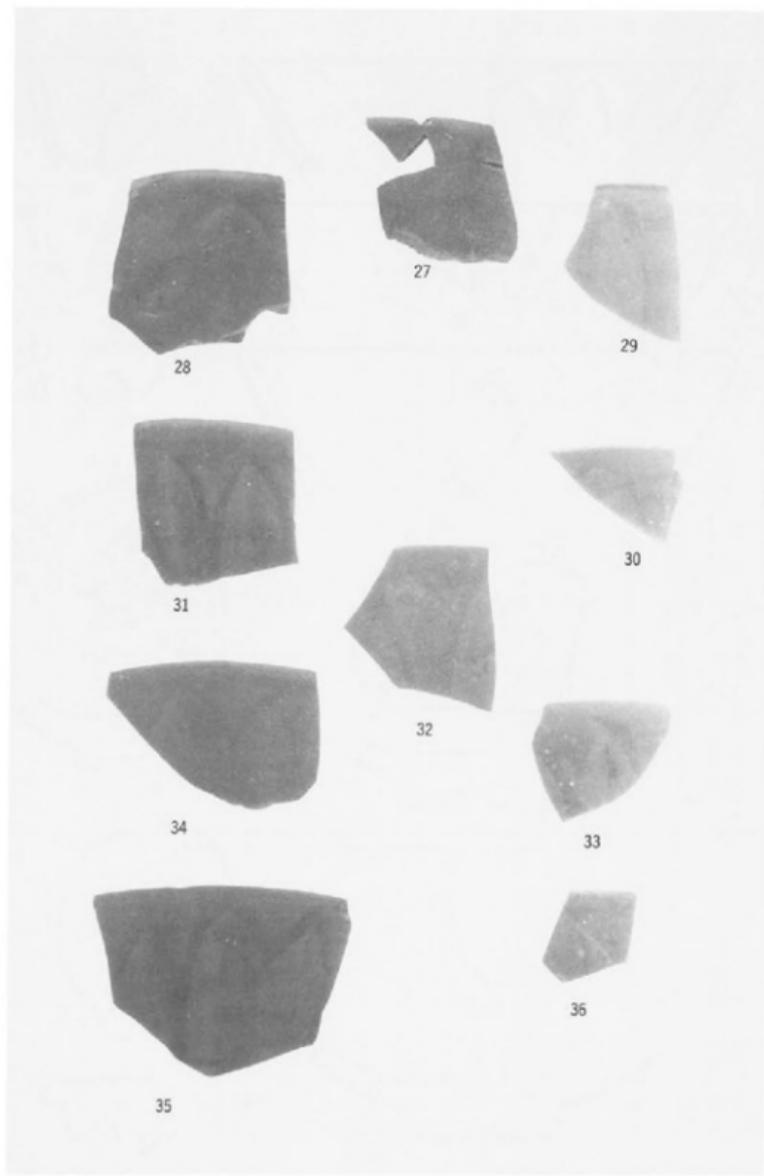


图11 鎏莲瓣文碗



図版19 鯉蓬弁文碗

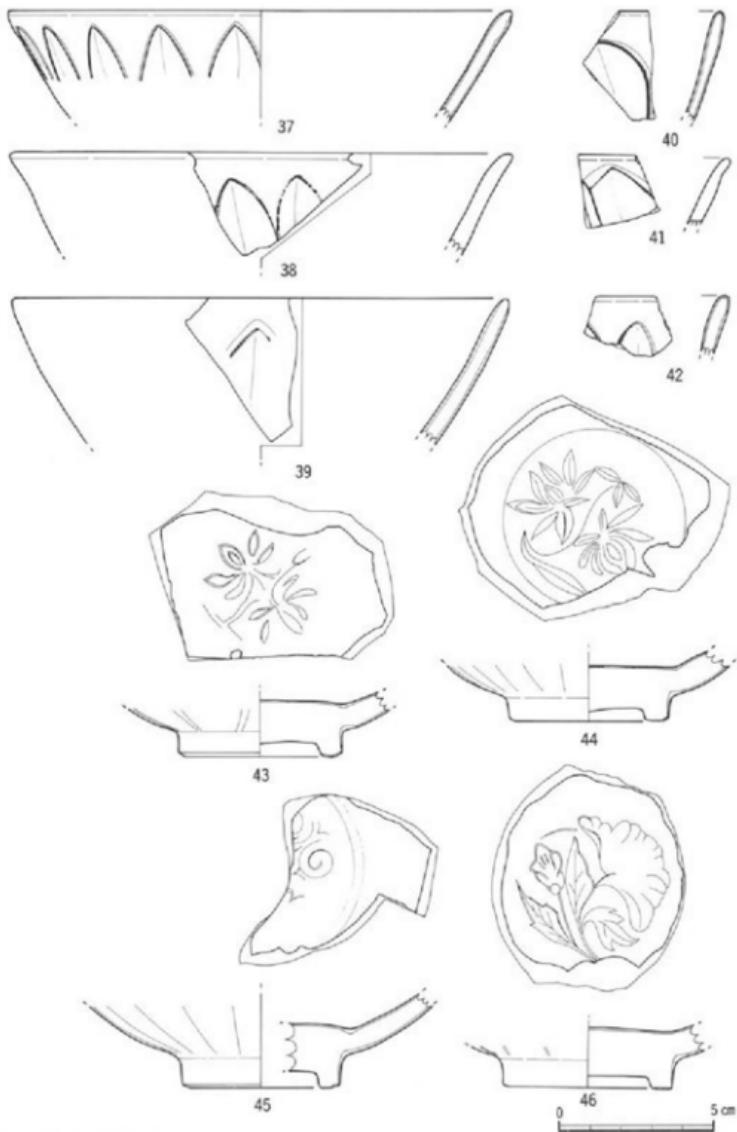
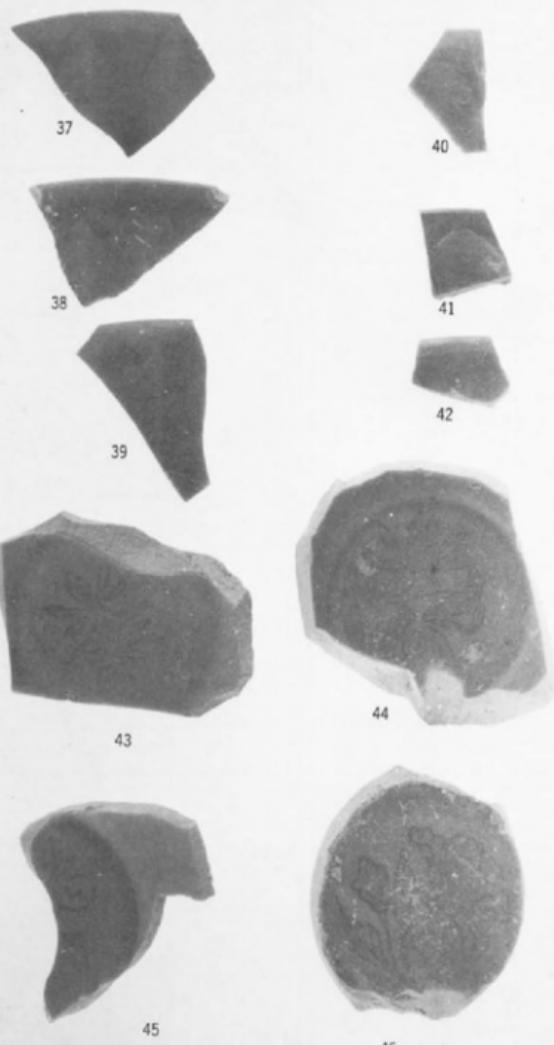


図12 鎏蓮弁文碗底部



圖版20 鎏蓮弁文碗底部

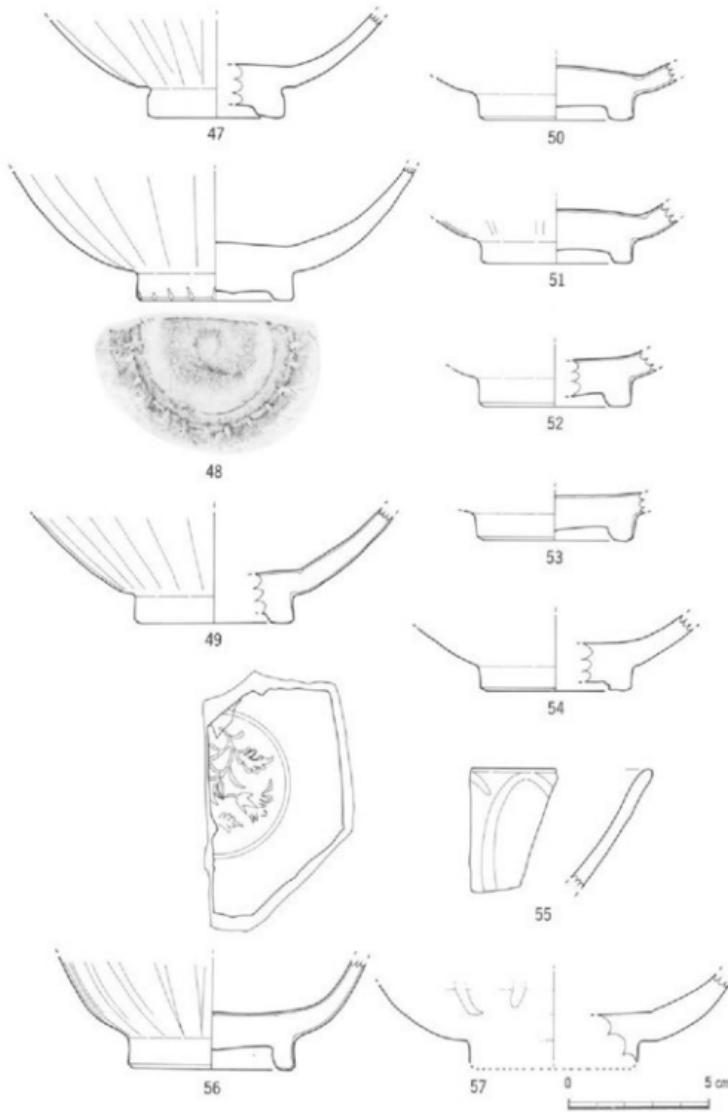
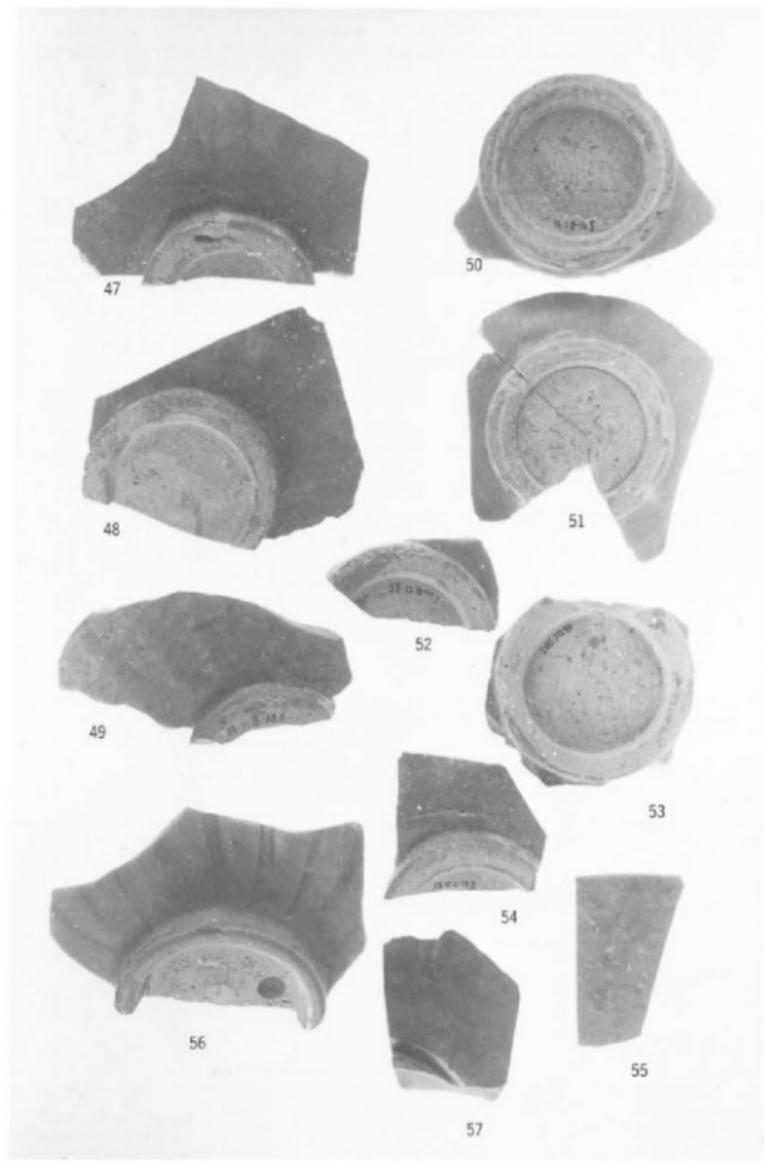


図13 鯉井文碗底部・無鯉井文碗



图版21 铸莲瓣文碗底部·无铸莲瓣文碗

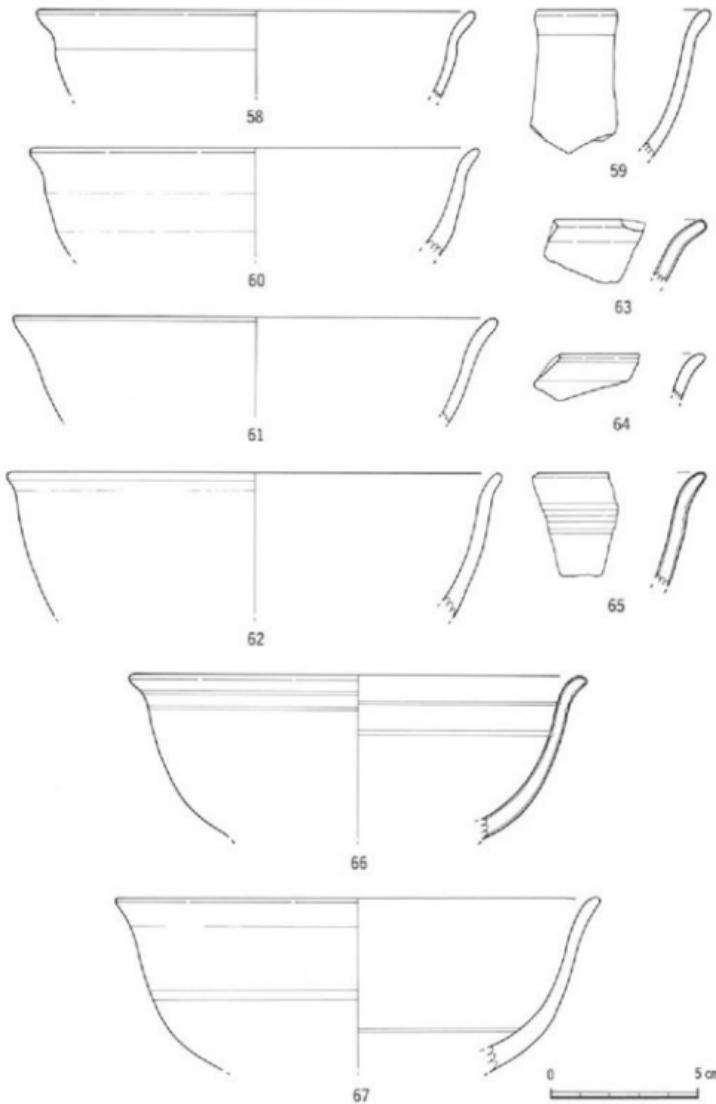
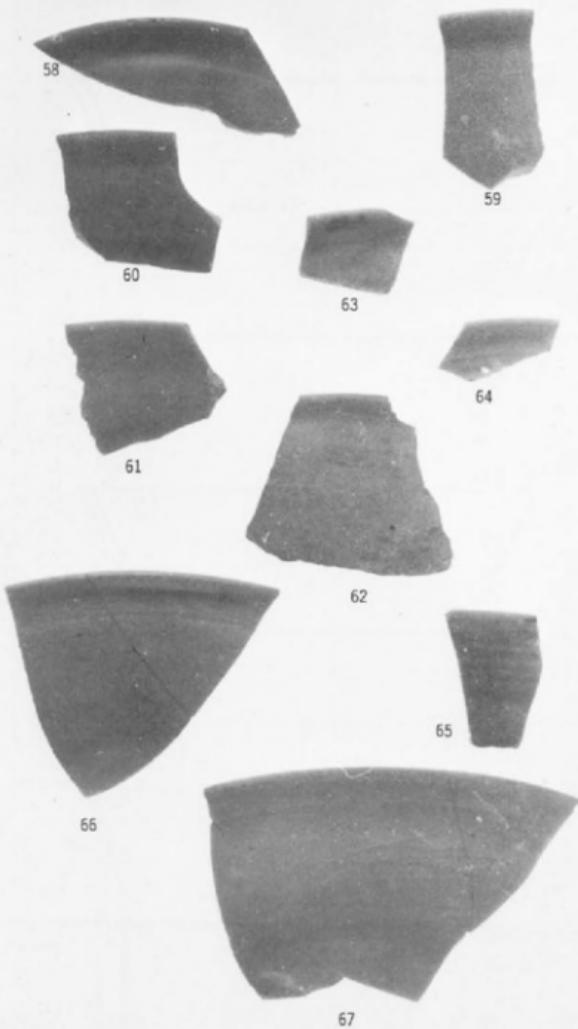
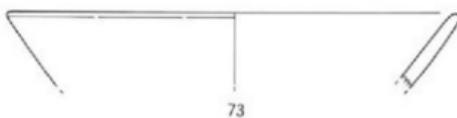
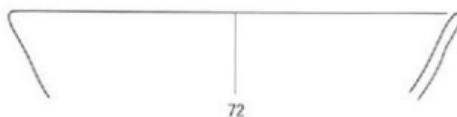
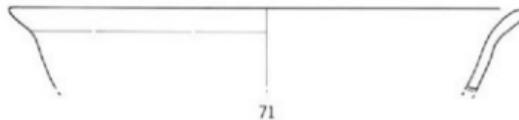
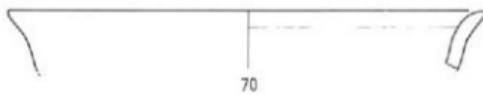
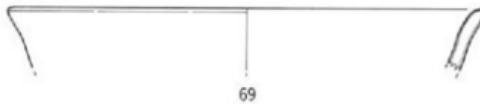
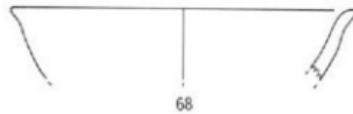


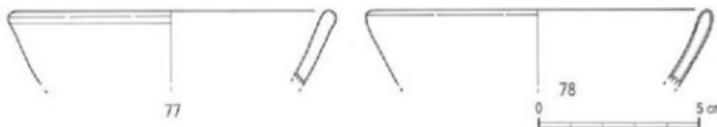
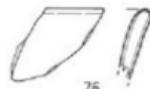
図14 青磁無文口縁碗



図版22 青磁無文口縁碗

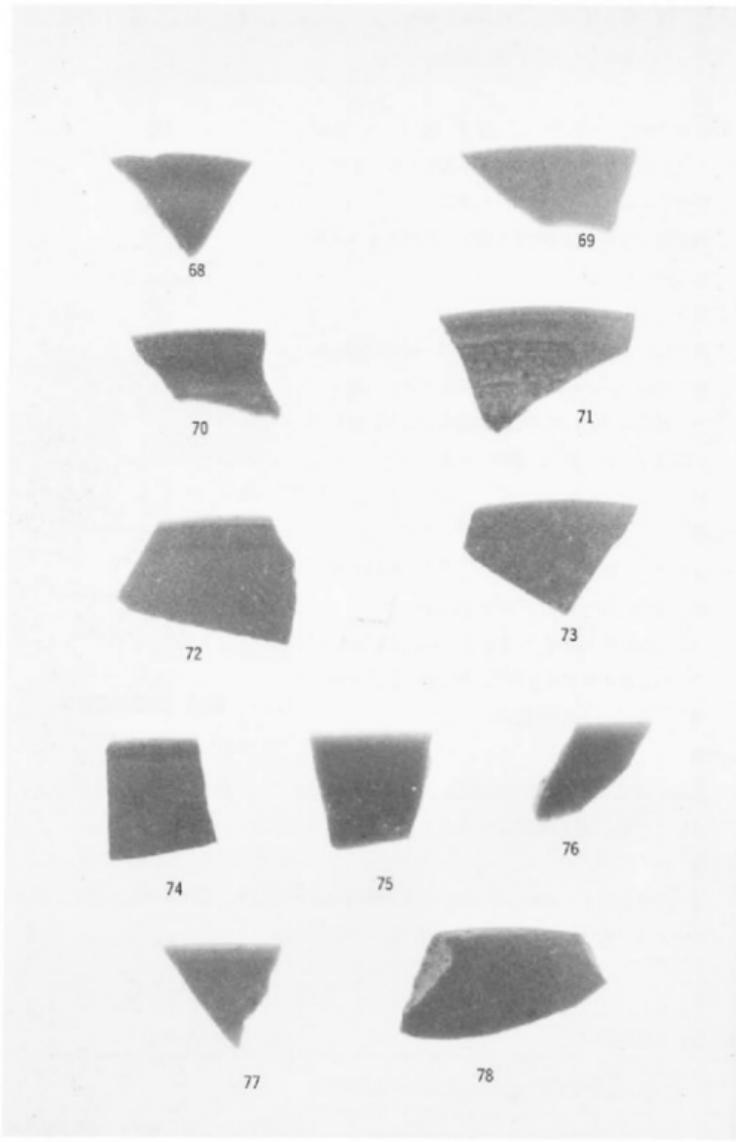


75



5 cm

図15 青磁碗



図版23 青 磁 碗

6. 底部

割花文、蓮花弁で既に触れた資料を含め青磁碗の底部資料は34点である。高台、外底面の形状、施釉の方法をみると次の5種に細分できる。

第I種

高台が断面四角形を呈し、疊付の幅が広い。高台内部の削りが浅いので、底部の器厚が厚くなる。疊付の外端は小さく面取りをする。

釉は高台脇まで比較的厚く施し、疊付及び外底面は露胎にする。

第II種

高台は断面四角形を呈すが、疊付の幅はI類に比較して狭い。高台は外底面を深く削るため高くなり、底部器厚は体部下半と同程度になる。疊付の外端角を小さく削り、面取をする。

釉は高台脇まで施すが薄い。

第III種

高台は概ね断面四角形を呈す。疊付の幅はII類同様に狭く、又面取ではなく両端とも直をなしている。外底面の削出しが深く、体部下半の延長を越ゆる。中心部は盛上ったまま残す。釉は高台脇まで薄く施し、疊付から内は露胎にする。

第IV種

高台形はIII類とほぼ同様である。高台は5種中最も高い。疊付は両端の角を削りとり丸く仕上げる。釉は外底面の中心付近を残して、全面に施す。

第V種

高台内を抉るように削ったため、高台は開きぎみに伸びる。疊付の外端を低く、深い面取をする。釉は高台脇まで施すが薄い。

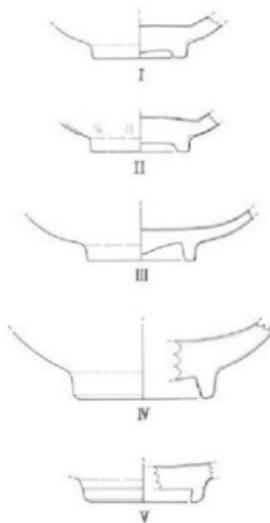


図16 底部模式図

表6 底部観察表

図・図版番号	分類	高台径 出土地	高台高 内部 外部	疊付幅	底部厚	観察事項
図17-81 図版24-81	I	5.6	0.4 0.8	0.8	1.2	灰青色の釉を薄く施す。内底面にはやや粗い貫入がみられる。

図 17-82 図版24-82	III	5.8	0.9	0.8	0.5	0.6 1.4 (中心)	灰青色の釉を厚く施す。内底で横位に、外体面で縦位の貫入がみられる。
図 17-83 図版24-83	II	6.8	0.7	1.2	0.5	0.9	内底見込みを圓線で囲み、中央にワラビ状の印花文を配す。釉は灰緑色を呈し薄い。
図 17-84 図版24-84	II	7.4	0.7	1.1	0.5	1.4	内体面に圓線を描く。釉は灰緑色の色調で内外面にはやや粗い縦位の貫入がみられる。
図 17-85 図版24-85	II	6.4	0.7	0.9	0.6	0.9	外体面に圓線、見込みに印花文を配する。印文は細く、押圧も弱く不鮮明である。
図 17-86 図版24-86	II	6.2	0.7	1.0	0.5	1.5	外体面に圓線、見込みに印花文を配する。釉は黄緑色の色調を呈し表面に砂粒が付着する。画面に細かい貫入がみられる。
図 17-87 図版24-87	I	4.7	0.4	1.0	0.7	1.8	内底見込みを圓線で囲み、中央に印花文を配す。内底、外底面をのぞいて黄緑色の釉を薄く施すが発色は悪い。無釉の部分が朱色を帯び焼成も良くない。
図 18-88 図版25-88	III ロ-II	6.1	0.9	0.7	0.7	0.8 1.5 (中心)	内体面に圓線を描く。見込みから中央へ漸次盛上り中心では小さく尖がる。釉は失透性の淡緑色を薄く施す。内体面に横位、外面では縦位の細長い貫入がみられる。
図 18-89 図版25-89	III	4.7	0.5	0.5	0.6	0.6	高台内、見込みを除いて、淡緑色の釉を薄く施す。高台脇は縦位の貫入を有す。
図 18-90 図版25-90	III	5.7	0.7	0.7	0.5	0.9	灰緑色の釉を薄く施す。画面に縦位の粗い貫入がみられる。
図 18-91 図版25-91	III	4	0.6	0.5	0.3	0.5 0.8	内体面では圓線を境にして見込み部分が一段盛上る。灰緑色の釉を高台を除いて施すが外体面の下半も部分的に無釉となる。画面にやや粗い貫入がみられる。
図 18-92 図版25-92	V	6.5	0.6	1.3	0.6	1.3	淡灰緑色の釉を施すが、白濁しており発色は良くない。見込みには多くの気泡がある。
図 18-93 図版25-93	IV	6.7	1.1	1.1	0.5	0.9	素地は均一に赤褐色を帯び、灰緑色の釉も部分的に赤褐色を帯び発色は悪い。両面にやや粗い貫入を有す。

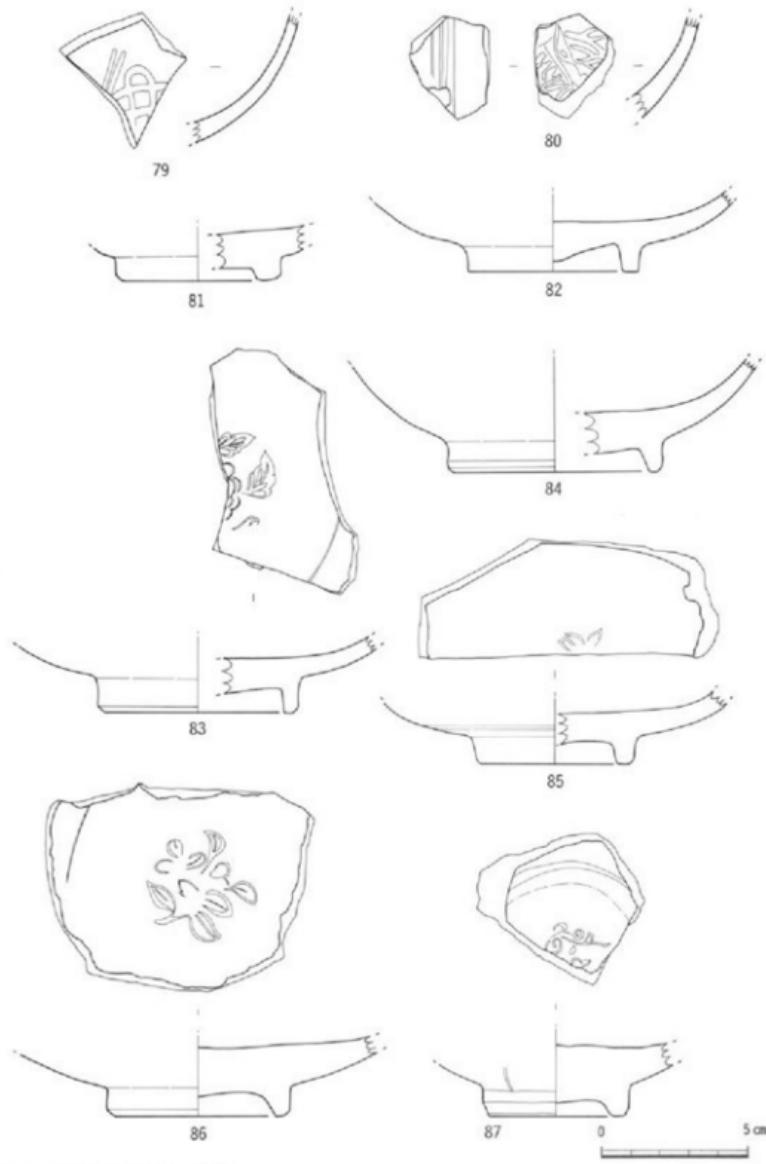
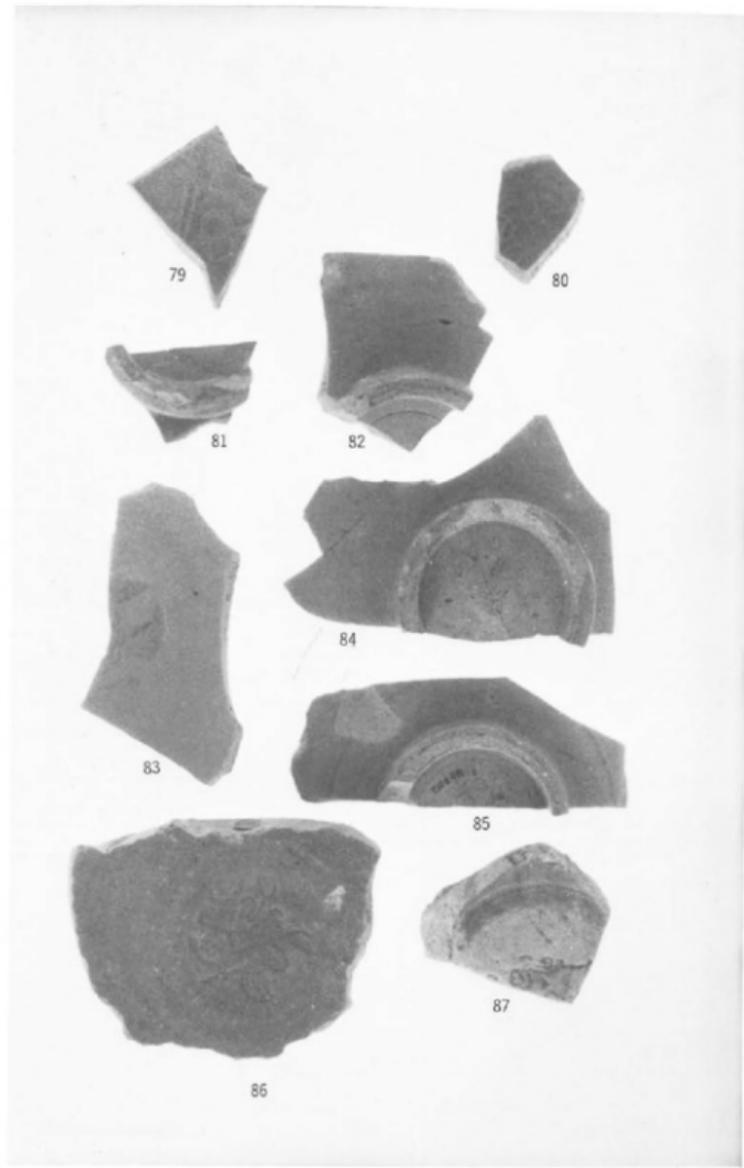


图17 青磁碗有文底部



图版24 青磁碗有文底
部

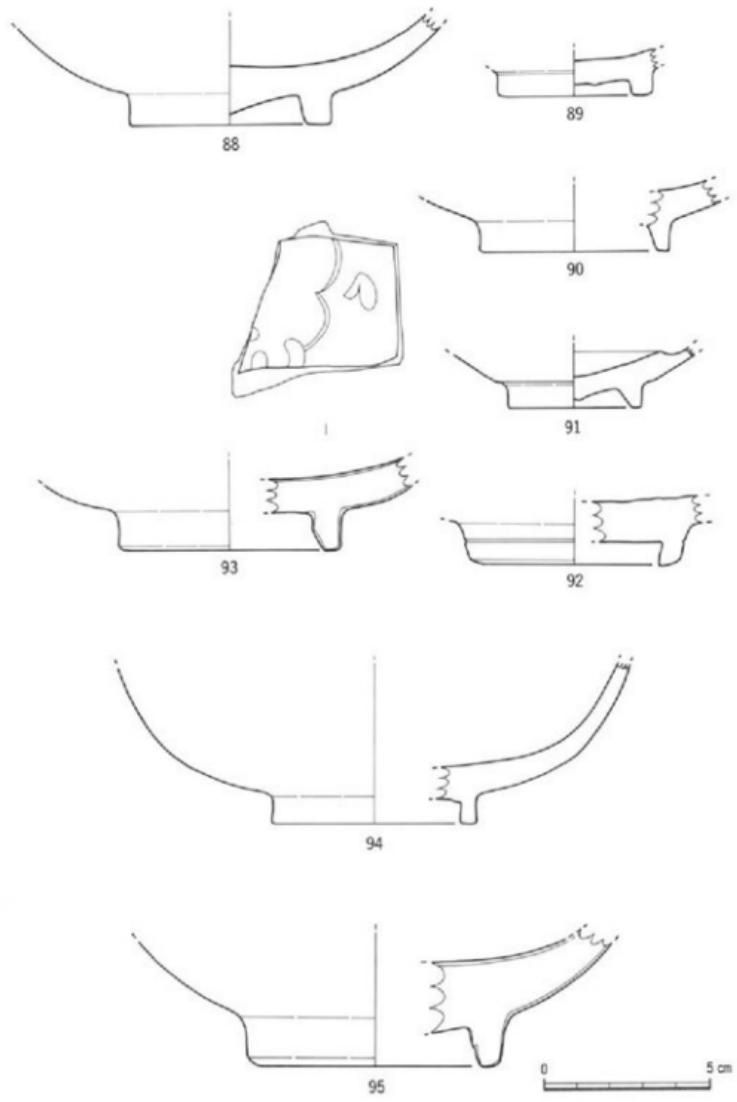
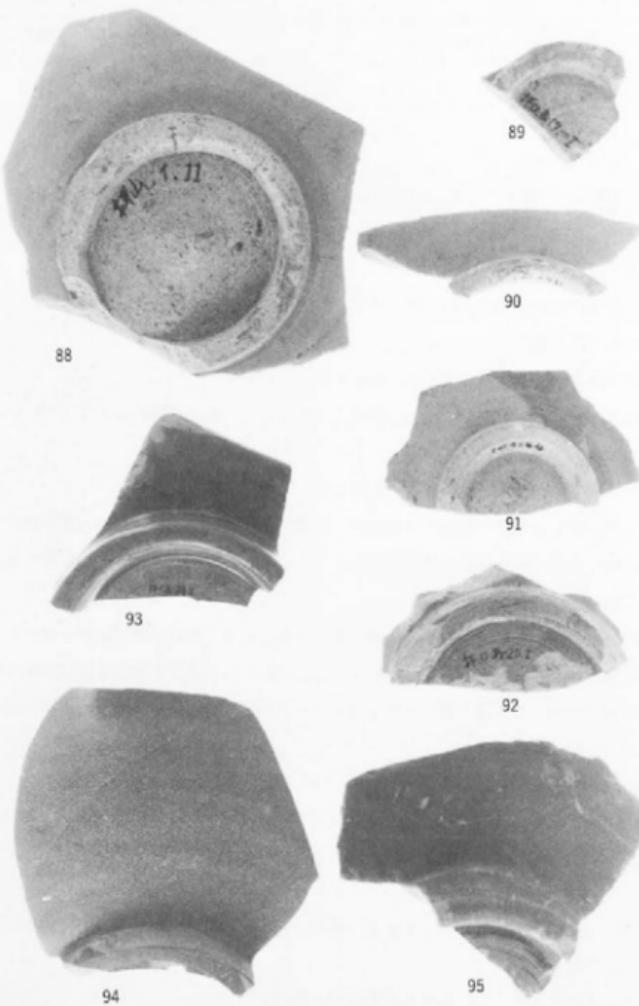


图18 青磁碗底部



图版25 青磁碗底部

図 18-94 図版25-94	III	6.1	0.6	0.8	0.4	0.6	灰青色の釉を施すが、白、茶色の斑点 が細く表面を覆い発色は悪い。内体面 に気泡跡の砂粒程の凹みがある。
図 18-95 図版25-95	IV	7.6	1.1	1.4	0.6	2.2	高台高、底部器厚が出土遺物中最も大 きい大振りの碗。淡緑色の釉を厚く施 す。

B Ⅲ (図19 図版26)

青磁皿の資料は40点が出土した。文様・口縁形態などの特徴で、1 榄搔文皿、2 蓮弁文皿、3 双魚文皿、4 輪花文皿、5 無文皿に分けられる。

1. 榄搔文皿

いわゆる珠先青磁と呼ばれる中国同安窯系の青磁で、櫛状工具に依る施文を特徴とする。資料は8点の出土である。

イ. 腰部から傾斜を持って開上り、そのまま口縁に至る。

96は体部が4mmの均一的な器厚を示し櫛搔文中最も厚い。釉は透明灰青色でやや粗い貫入を両面に有す。

ロ. 脚部下半で小さく内彎し、上位が開上る。

98、99は径が異なるので同一個体ではないが、素地、透明灰青色の釉などから同一窯の作と考えられる。釉は全面に施した後に外底面を搔とり露呈にする。99は内底面に片切彫と櫛搔文が描れる。両面に粗い砂粒が付着する。

97は淡灰緑色の釉を施すが、口唇で全面に剥落する。両面に細かい貫入がみられる。

100は内底面に浅い片切彫とジグザグ条の櫛搔文を描く。外体面の下半には縦位の成形痕を残す。釉は透明の淡緑色の色調を呈し、外体面下半と外底部には施釉しない。底径は5cmを推定する。

101は全体の約1/3を遺存する大型資料で、口径10.1cm、器高2.2cm、底径4.8cmを測定する。内底中央に大きくジグザグの櫛搔文を描く。外体面下半の無釉の部分は縦位の成形痕を残す。釉は失透性灰緑色で、外体面下半と外底は施釉しない。

2. 蓮弁文皿 (図20 図版27)

内面あるいは外面に蓮弁文を有するものである。資料は復元した2点も含め6点が出土した口縁端の形状で更に細分した。

イ. 体部上位を水平方向に屈折させ、端部を垂直に引出す。

102、103は体部が丸味を持ち、内彎ぎみに開上る。体部上位を強く屈折させ端部を垂直に引出す。外面は無文だが見込みを圓線で囲み、内体面に蓮弁を陰刻する。全面に緑色の釉を施した後、疊付だけを拭きとる。102は口径11.9cm、器高3.5cm、底径5cm、103はそれぞれ13.3cm、3.6cm、5.9cmを測定する。

ロ、屈折した体部上位を平坦のままにとどめる。

104は屈折した口縁端部が短く、端部は小さく尖る。外面には片切形の細い蓮弁を描く。釉は緑色で厚く両面に施す。口径 8 cmを推定する。

105は平坦面が前者に比較して長く 1.3 cmを測る。外体面に描かれた蓮弁は丸い膨みを持ち、側線は丁寧で細い片切形である。釉は失透性の緑色を呈し器面はザラッとしている。口径は 12.2 cmを推定する。

ハ、底部 (図20 図版27)

高台部分だけの資料、2点が出土した。

106は外体面に竈による細形蓮弁で見込みを圓線で囲む。釉は淡青色を呈し粗い貫入が両面に見られる。107は所謂葵笛底の資料で内底に唐草の印文と外体面に蓮弁の弁尻を描く緑色の釉を外底の中心を除き施す。

3. 双魚文皿 (図20・21 図版27・28)

内底面に双魚文を有するもので、2個体分 3点が出土した。

108の見込みに貼付された双魚文は一方を欠くが、厚味、立体感があり、魚の細かい部分を丁寧に描く。釉は淡緑色の色調を呈し、全面に施釉した後疊付部分だけ拭きとる。

109、110は同一個体である。外体面に2本線で蓮弁文と圓線、見込みに双魚文を貼付する。魚文はやはり一方を欠くが、前者程立体感はない。釉は透明淡緑色の色調を呈し、外底面を露胎にする。

4. 輪花文皿 (図21 図版28)

口縁端部の数箇所に浅い小さな切込を入れるもので、一点が出土した。

111は体部上位で屈折した口縁端に 1.8 cm間隔で幅 0.8 cm、深さ 2.5 mm の V字の切込を入れる。体部外面には継ぎの凹線を描く。推定口径は 12.7 cmである。釉は灰青色の色調を呈し、全面にやや粗い貫入を有す。

5. 無文皿 (図21 図版28)

イ、体部上位を水平方向に屈折し口縁を作るもの

112は平坦面が幅広い。中間で僅かに凹み端部は水平より上り、切ったように角ばる。平坦面は幅が 1.8 cm、口径 12.2 cmを推定する。釉は淡緑色を呈し、両面に細かい貫入がみられる。113は平坦面が前者より短く、端部は舌状に仕上げる。推定口径は 11.6 cmである。淡青色の釉を施すが、細砂粒が両面に付着する。

ロ、直行口縁が直行するもの。

114は青磁皿で唯一の直行口縁の資料である。内体面には圓線を一条描く。外体面は中位で釉がうすくなり凹む。釉は灰緑色の色調で、両者にやや粗い貫入がみられる。

C 鉢 (図21 図版28)

115は推定口径 12.2 cm の浅鉢と考えられる。

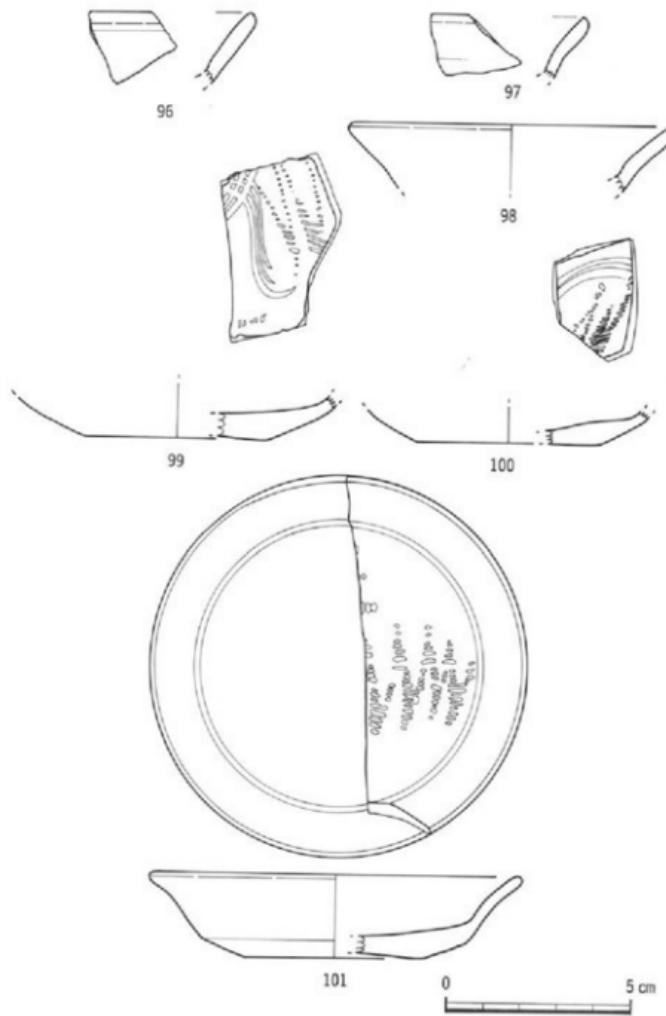


図19 青磁皿



96



97



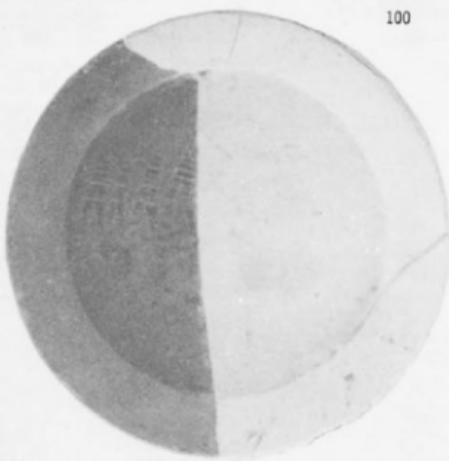
99



98



100



101

図版26 青 磁 盘

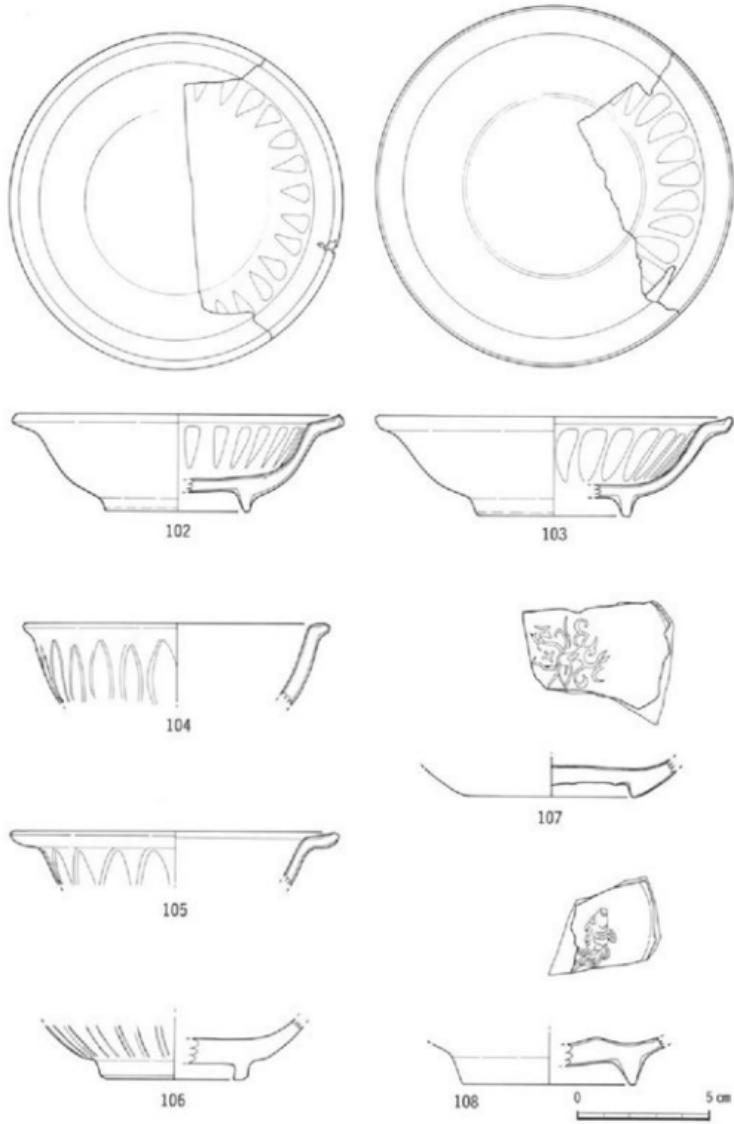
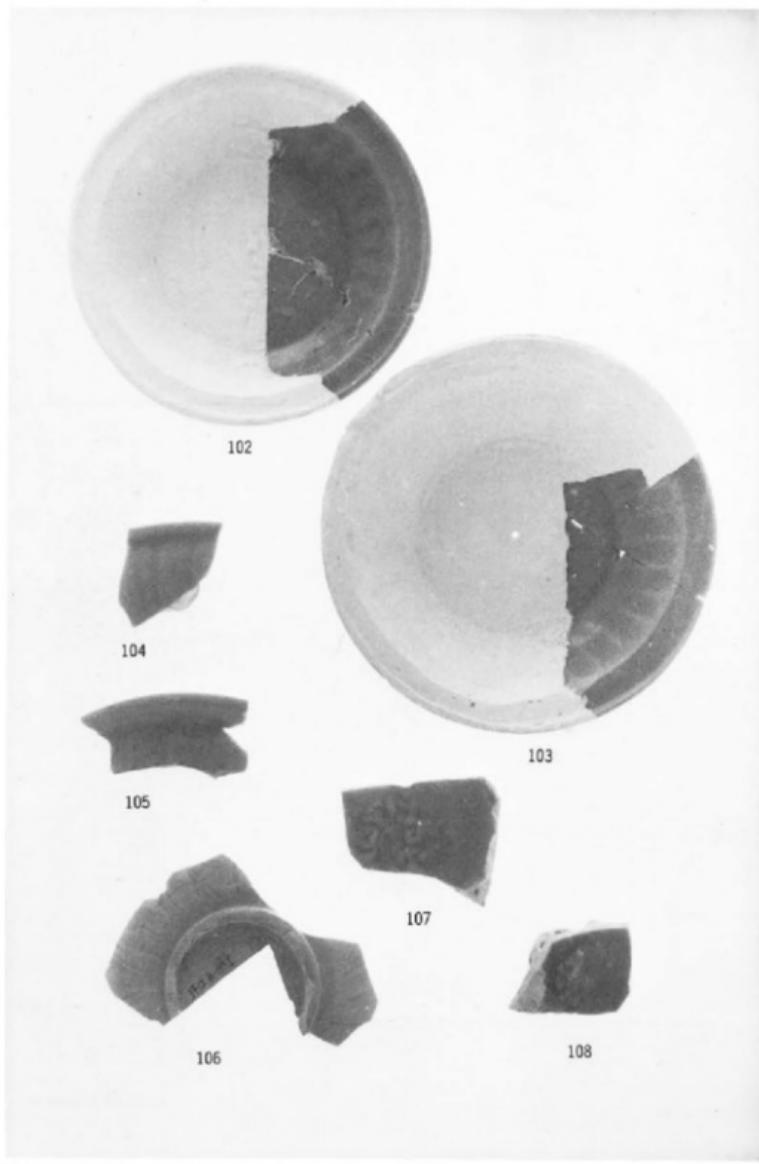


図20 青磁皿



图版27 青 磁 盘

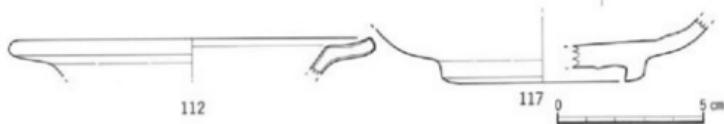
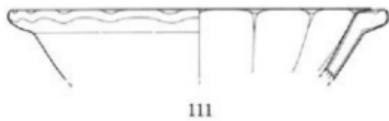
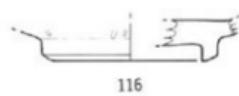
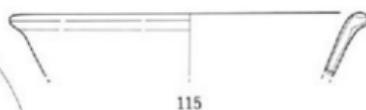
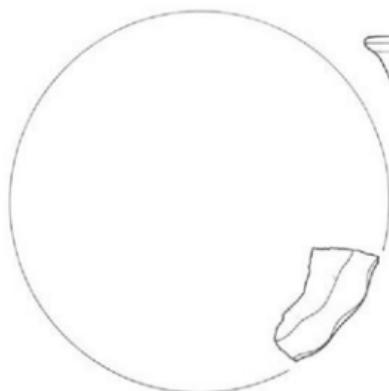
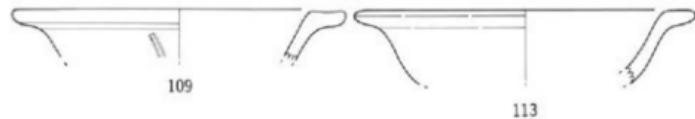
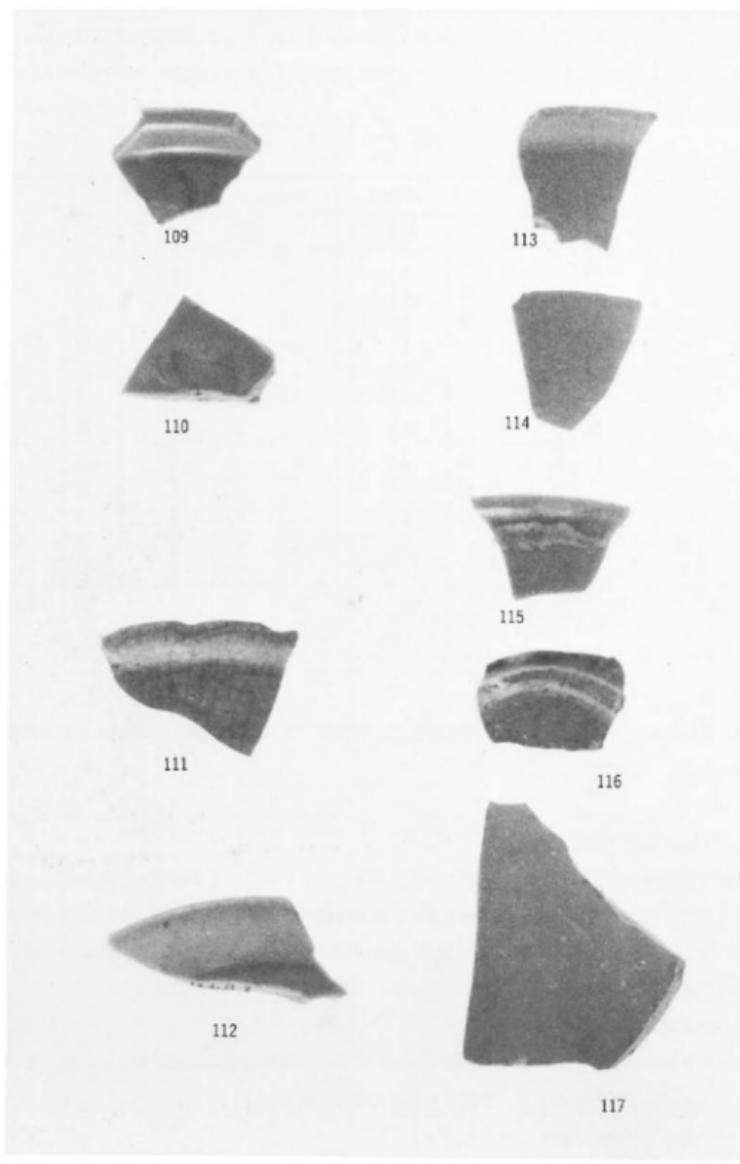


図21 青磁皿



図版28 青 磁 皿

(2) 白磁

本遺跡で得た中国産白磁は、碗38点、皿40点の計78点である。その出土状況は表7で示した。しかし青磁同様細かい資料がほとんどである。皿で1点だけ口縁から底部まで含む資料の復元を試みた。器種は上記した碗と皿である。

表7 白磁地区別出土状況

器種	分類	イ地区		ロ地区		ハ地区		計	
		I	II	I	II	I	II	I	II
碗	玉縁口縁	1						1	
	口禿	3						3	
	直行口縁								
	外反口縁	1						1	
	無文外縁			1				3	
	無文口反底			1	2	4	2	5	4
皿	部			1				1	
	その他	19				1		19	1
	口禿							8	
	印花文底	2	1	6	2			2	1
合計	外反口縁					1		1	
	直行口縁					1		1	
		1				1		2	3
	その他	16	1	5				21	1
		47	6	20	5	0	0	67	11
		53		25		0		78	

A 碗

碗の資料は48点である。文様、口縁形態などの特徴で、1玉縁口縁碗、2口禿碗、3無文碗に分けた。

1. 玉縁口縁碗 (図22 図版30)

口縁部を外面に折返し、断面三角形の玉縁口縁をつくるもので、1点が出土した。

1は玉縁の肥厚が0.9cm、幅が1.3cmを測る。素地は細かい気泡を多く含み、淡灰白色の釉は薄い。玉縁直下では0.9cm程の釉垂れがあり、器面には針先程の気泡跡があり、両面にやや粗い貫入を有す。推定口径13.5cmである。

2. 口禿碗 (図22 図版30)

口縁部を露胎にする。いわゆる口禿碗である。口縁部の資料4点の出土である。口縁の形状からは、イ、直口するもの、ロ、外反するものに分けられる。

イ. 脊部下半から口縁にかけて直行する。

2は口唇と内面が口禿となる。内体面中位に圓線を描く、素地は気泡を多く含み、釉は淡灰白色を呈し、口禿の無釉の部分は赤褐色を呈している。

- 3は口唇と内面、外面が口禿となり、口縁端は尖る。釉は淡青白色を呈す。
- 4は口唇と内面が口禿となり、口縁端は角ばる。内体面中位に圓線を1条描き、外体面には糖鱗の成形痕を残す。釉は淡緑白色を呈す。

ロ、口縁端が外反する

- 5は内面が口禿となり、口縁端が小さく外反する。釉は灰白色の色調を呈し、両面に細かい気泡跡がある。口径12.9cmを推定する。

3. 口縁端が外反するもの（図版30）

無文資料で口縁端が外反を示すものは、3点が出土した。

- 6、7は胴部中央で内彎して、外反を示す資料で口縁端部は尖りぎみに仕上げる。

釉は透明灰白色を呈す。1、6、5は素地に気泡を含む。口径はそれぞれ13.9cm、16.7cmを推定する。

8も緩かに一度内彎を示し、外反した口縁端を丸く仕上げる。釉は透明灰白色を呈し両面にやや粗い貫入を有す。口径は16.1cmを推定する。



図版29 口禿碗出土状況

4. 体部が内彎する（図版31）

胴部から口縁にかけて内彎する資料は7点の出土である。全てピロースクタイプと仮称されているものである。白磁碗の中では最も出土量が多い。

9は器厚が0.6cm、口径13.2cmを推定する。素地は細かい気泡を多く含み、釉は淡青白色を呈し厚い。ロ地区C-18第II層の出土である。

10は推定口径14.5cm、器厚は0.4cmを測る。外体面に糖鱗成形痕を残す。

11は口唇を外面から丸く削る。推定口径16.2cmである。イ地区I-22第II層の出土。

12は素地が茶色を帯び、白釉も茶色ぎみで発色は良くない。全面に細かい貫入がみられ外体面には成形時の糖鱗痕を残す。口径17.7cmを推定する。

13は内体部上位に一条の圓線、外体面には成形時の糖鱗痕を残す。推定口径15cmである。イ地区J-22第II層の出土。

14は素地が細かい気泡を含み、釉は淡青白色を呈す。露胎となる胴部下端は凹凸の成形痕を残し、外底面も削面を整えず、高台の仕上げは雑である。底径5.8cmを推定する。

15は外底面を丁寧に仕上げる。疊付は面取をせず角ばかり逆台形状になる。釉は淡青白色を呈し、両面に粗い貫入がみられる。露胎にする胴部下半は成形痕を残す。

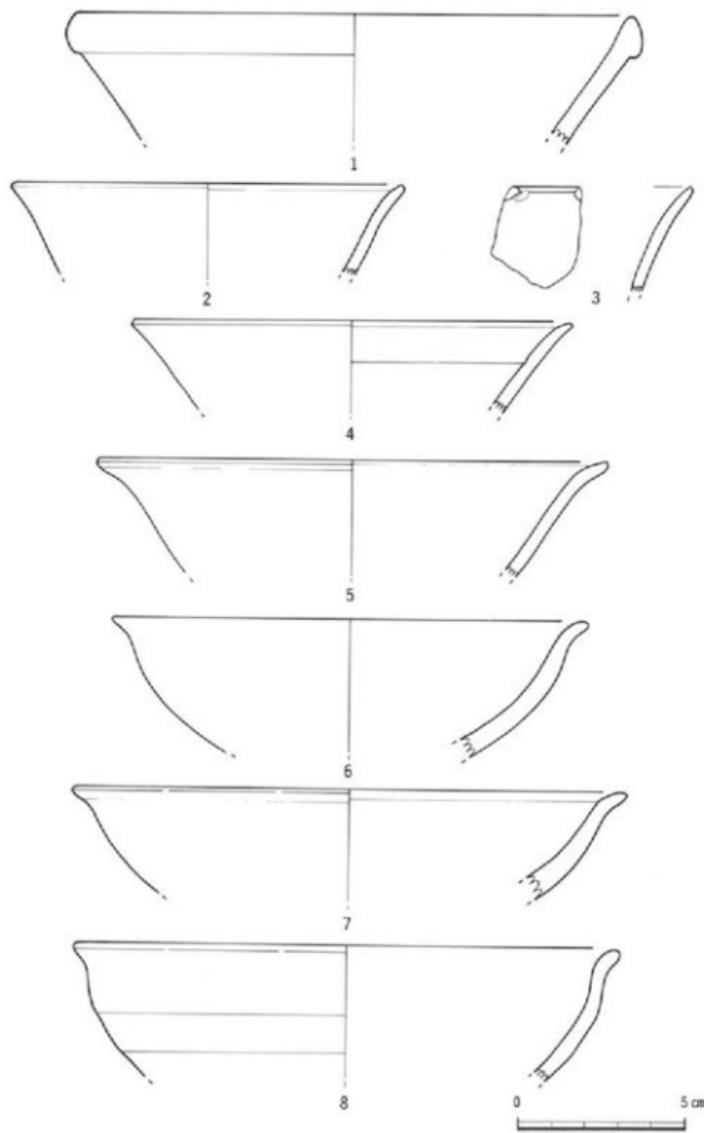


図22 白磁碗



図版30 白磁碗

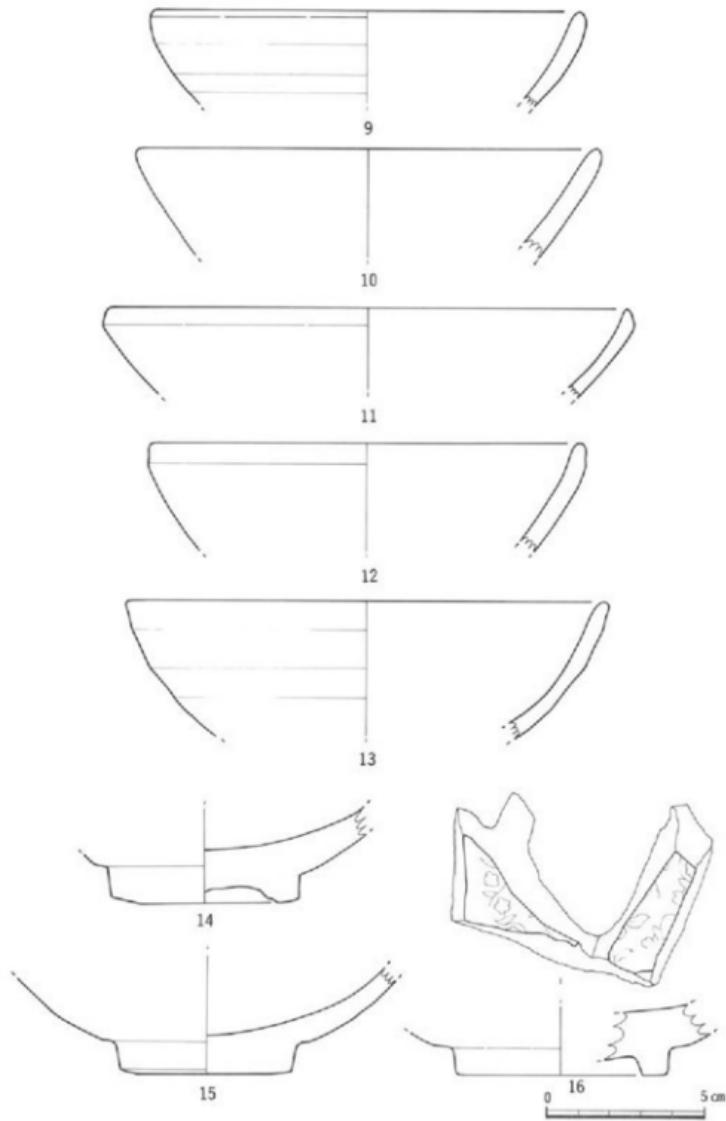
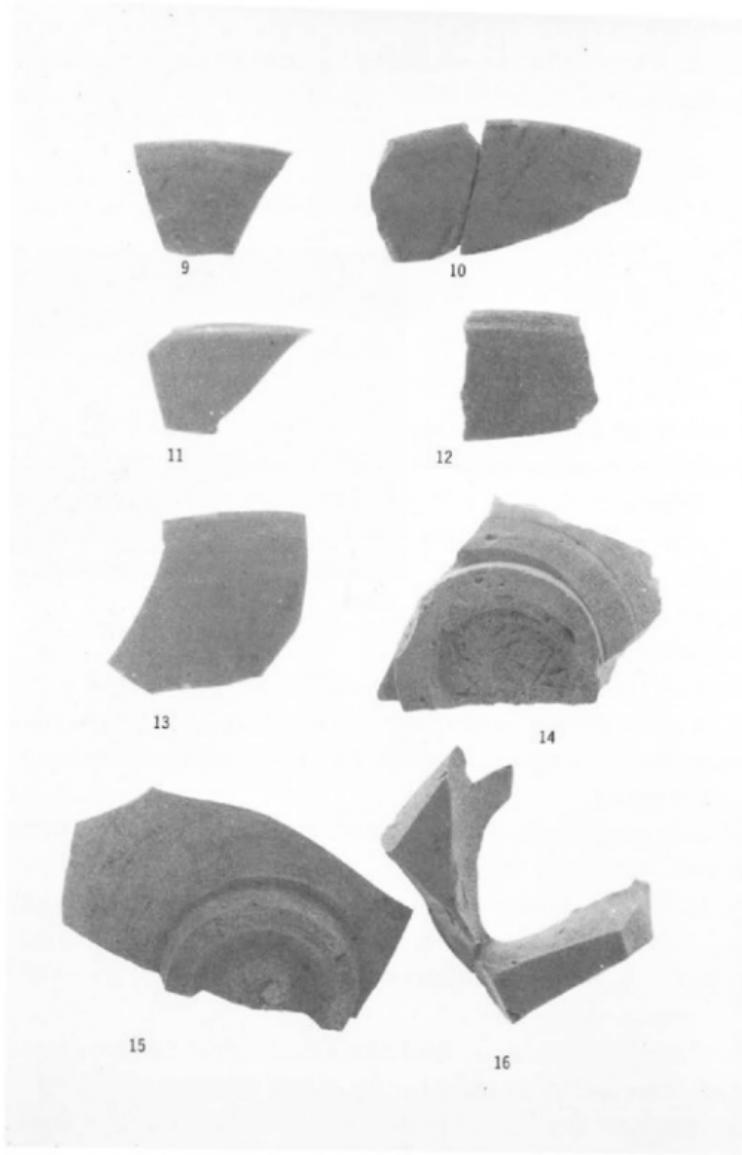


図23 白磁碗



图版31 白 磁 碗

5. 底部

16は内底面に印花文を有す。外体面下半には圓線を一条描く。文様の主要部を欠くため内容は不明。高台は疊付が幅広く1.1cmを測る。又面取りはなく両端とも直をなしており外底面の削出しあつて丁寧である。

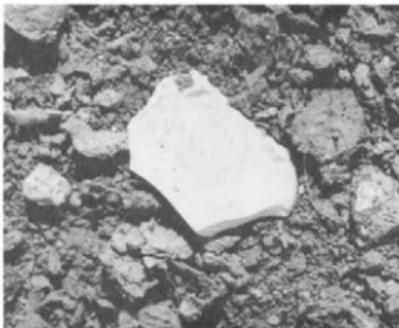
B 皿

白磁皿の資料は42点が出土した。文様、口縁形態などの特徴で、1.口禿皿、2.印花文皿、3.無文皿に分けた。

1. 口禿皿（図24 図33）

口縁部を露胎にするいわゆる口禿皿である。10点の出土である。その内3点は口縁から底部を含む資料で、復元を試みる。釉色は灰白色を呈するが多い。胴部からの立上りで2種に分けた。

イ. 底部から胴部にかけて内窯し、口縁端は小さく外反する。



図版32 白磁皿出土状況

17は推定口径7.8cmの浅い皿である。内面と口唇部分が口禿となり、口縁端は丸味を持つ。

18は内面と口唇が口禿となる。内面の口禿は幅が短く口縁端部は台形状になる。

21、25も内面と口唇が口禿となり、口縁端は台形状になり角ばる。内面の口禿の幅は広い。内面に圓線を描く。21は口径10.4cm、底径6.5cm、器高4cmを推定する。25はそれぞれ12cm、6.8cm、3.6cmを推定する。

20、24の口禿は内面と口唇にみられる。内面の口禿は幅があり、器厚の薄いこともあり口縁端は尖がる。外反は比較的大きい。

23、22は細片のため胴下半は不明だが、口縁端が外反することを以て含めた。外反は比較的大きい。23は内面の口禿が広く、器厚も薄く口縁端は尖がる。口縁は11cmを推定する。24は口縁端が四角になる。釉は不透明の淡灰白色を呈す。

ロ. 底部から口径にかけて直行する

19、27は内面と口唇が口禿となり、端部は四角になる。27は口縁から底部を含む資料で復元を試みた。口径10.6cm、底径6cm、器高3.7cmを測り、外底面は上げ底状に仕上げる。イ地区I-22第II層の出土。

28、29も内面と口唇が口禿の細片資料である。28は内面に圓線を有しイ地区B-22第II層の出土。29はロ地区C-18第II層の出土。

2. 印花文皿

136は見込みの中心部だけの細片資料で、印花文を有す。灰白色の釉が薄く釉調も良好なことから文様は鮮明である。器厚6mmを測る。

137は底部から口縁にかけて体部が直行する器形で、口縁端部を丸く仕上げている。推定口径11.8cmで内面に圓線を一条描く。釉は淡緑白色を呈し、両面に粗い貫入が見られる。

3. 底 部 (図25、図版34)

32～36は、口禿皿の底部資料である。細片資料のため器形は不明。外底面を見ると、32は上げ底状になる。他はそのまま平坦に仕上げる。35、36は体部と底部の器厚が等しく、いずれも3～4mmを測り細い。

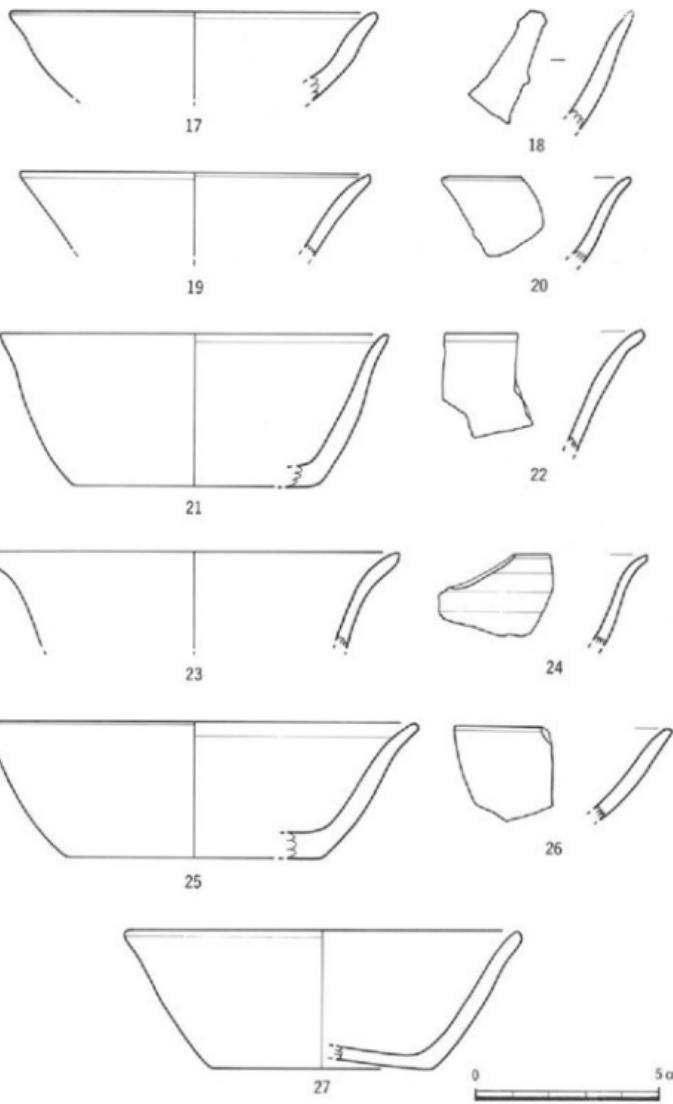
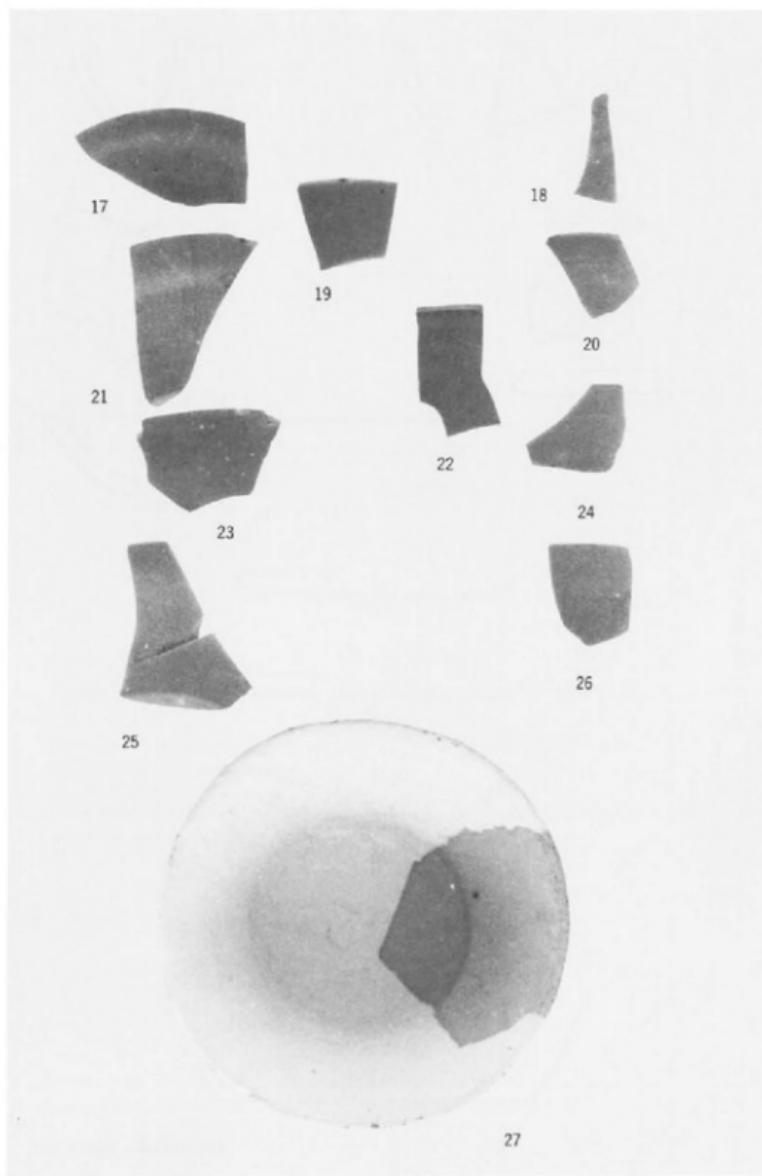


図24 白磁皿



图版33 白 磁 盘

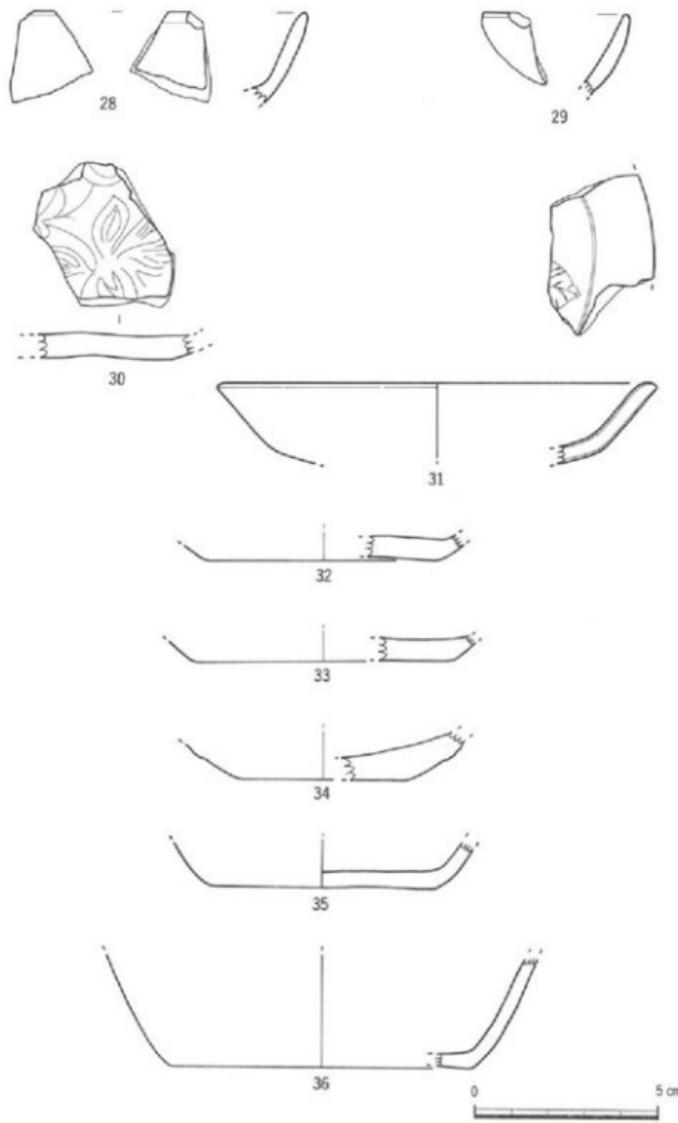
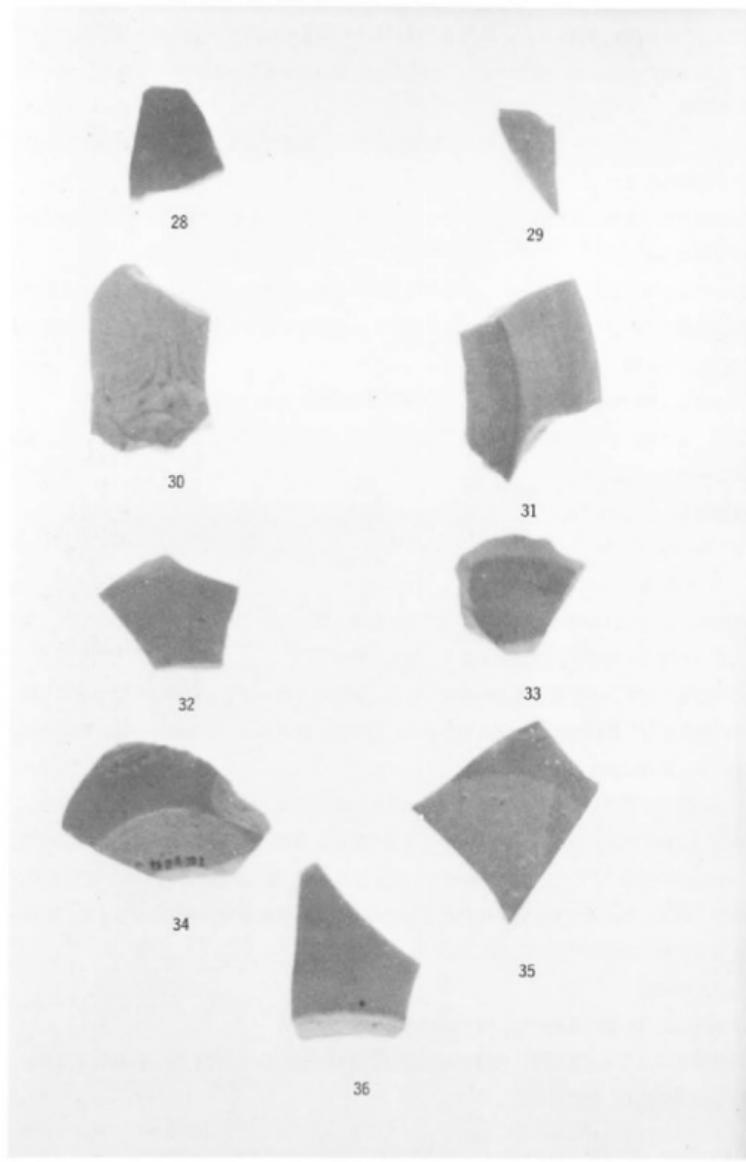


图25 白 磁 皿



図版34 白 磁 皿

(3) 陶 器

沖縄産の陶器44点が出土した。黒褐色土層にともなうものではなく、全て表土層からの出土である。得られた資料には、釉のかかっているものと釉のかからないものがみられる。

無釉陶器

沖縄で、荒焼き（アラヤキ）と呼ぶ、無釉焼き縮めの陶器である。破片27点が出土した。そのうち特徴的な4点について図化した。

1は焼成時の温度の上り過ぎからと思われる気泡が、アバタを呈している。推定口径9.5cmの小型の壺である。

2は内耳を有するが、小破片のため器形は不明である。口唇内と、内耳と体部との接合付近に煤が付着することから、火を起すシチリンのような機能を持つものかも知れない。素地は細かく、金雲母の混入が認められる。

3は焼成、素地が前者に近似する。同一個体の可能性もある。底径8.3cmを測る。

4は8条を単位とする攝目が施される攝鉢である。外面はナデにより丁寧に仕上げる。推定される底径は8.3cmである。

施釉陶器

1. 瓢 類

イ. 白釉碗

素地に白化粧掛けを行った後、透明度の高い白釉を施すものである。9点が出土した。有文もあるが、資料が細片ということもあり一括して扱った。

5は口縁端、6、7、8は底部の資料である。細片のためいずれも器形は不明である。釉は淡黄白色を呈し、疊付を除き全面に施される。内底面の見込みは、重ね焼きの際の釉着を防ぐため、リング状にかきとっている。

9は素地が赤褐色を呈し、器表面も白釉が細かい粒状となり解けきらず焼成は良くない。

10～12は白化粧掛けを行った際、外面に花文を配す。文様は呉須が使用され、径5cmの斑点文から成る円を描く。その中に茶褐色のアメ釉をおさめる。器形は腰部から丸味を帯びて伸び、口縁では小さく外反を示す。13も白化粧の後に呉須による文様がうかがえるが、文様の大部分が欠失するため転写は不明。底径6.5cmを測る。

ロ、鉄釉碗

黒褐色の鉄釉を施したもので、8点が出土した。

14は腰部から丸味を帯びて、内彌ぎみに伸びる器形で低い碗である。釉は緑褐色を呈す。

15は直行口縁で、釉は黒褐色である。

16、17は接合点はないが、同一個体と考えられる。いずれも素地は赤褐色で、釉はつけ掛で胴部下半まで施され、疊付、内底面は露胎する。釉にはぶく発色は悪い。

18は内面に白釉を施し、重ね焼きのため見込みをリング状にかきとる。外面は全面に施釉さ

れる。疊付には薄く石灰が付着する。底径6.5cmを測る。

19は緑色を帯びた黒褐色の釉が、胴部下端まで施される。施釉は稚で器面にもムラがある。内底面は重焼きのため見込みをリング状にふきとる。高台径7cmを測る。

20は高台部を除いて施釉するが、焼成は不良で釉も溶けきてない。内面は白濁する。

21は胴部下半まで施釉され、疊付、内面は露胎である。内底面中央に径1.5cmの斑点模様が描かれる。

2. 壺

外耳を含む口縁部の資料が1片出土した。

22は口唇直下に横位に貼付した外耳を有する。器厚が5mmと薄いことから小型の壺と考えられる。釉は黄褐色を呈し、内唇の折り曲がった部分を除き全面に施釉する。

3. 鉢

23の1片だけの出土である。口縁が口唇直下1cmで「く」字状に開きここには煤が付着している。器厚3mm、推定口径17cmの浅鉢と考えられる。

4. 瓶

口縁、底部がそれぞれ1片ずつ出土した。

24は頸部から小さな傾斜で立上り、端反りの口縁を有す。釉は茶褐色を呈し、口径3cmを推定する。11は肩部から大きく内側に折れ、器厚も1cmを有することから本項に含めた。

25は外面での疊付を除き黒褐色の釉が施される。底径5cmを測る。

5. その他

26は高台高2.5cm、底径11cmで、地元でいう所謂ワンプレーの底部である。外面は疊付を除き透明度の高い黒褐色の釉を施す。内面は白釉を施した後重ね焼きのため、見込みをリング状にかきとる。

(4) 陶質土器 (図30 図版39)

33点が出土した。口縁の実測可能な5点について図30で示した。

口縁部が「く」の字状に外反する。胴部、底部は不明だが、伊良波西遺跡の例を見ると、胴部は丸く脹み、底部は丸底になる。成形にはロクロを使用している。器厚は3~4mmを測り薄手である。釉は施さない。20、26、19は口縁部に横位の把手がつく。

註1. 豊見城村教育委員会 「伊良波西遺跡」『豊見城村文化財調査報告書第1集』 1986年3月

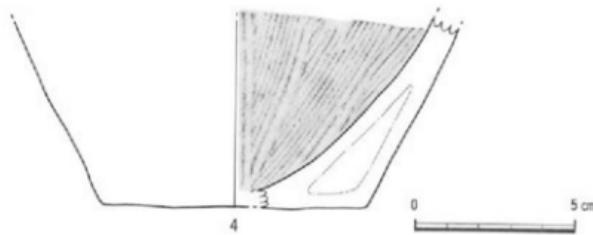
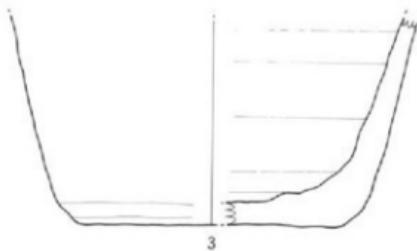
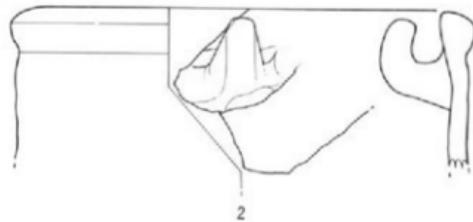
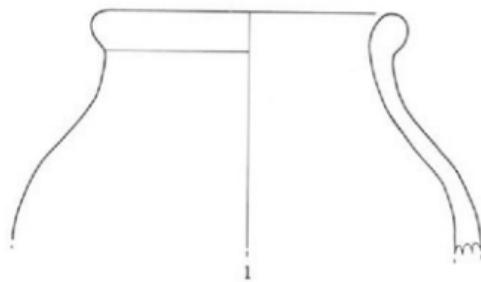
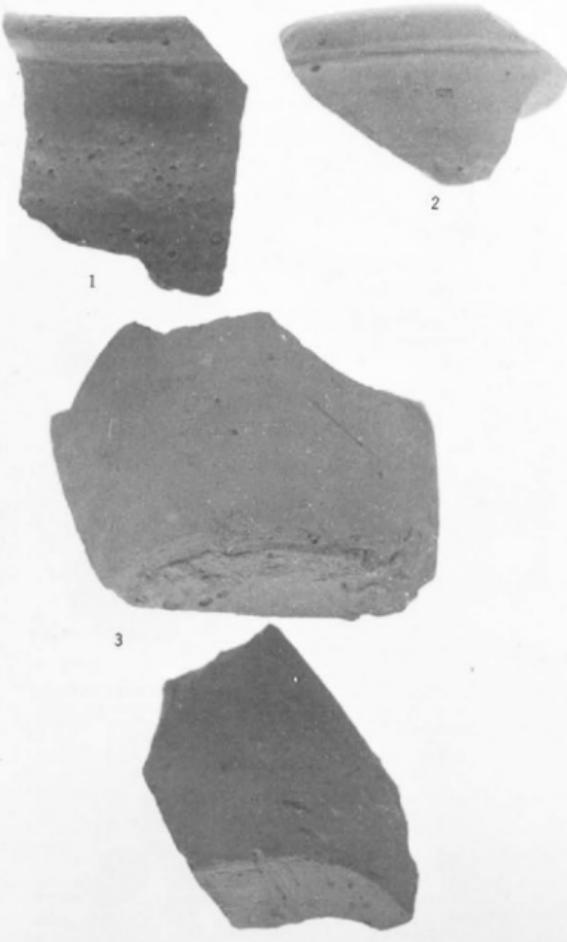


図26 無釉陶器



图版35 無釉陶器

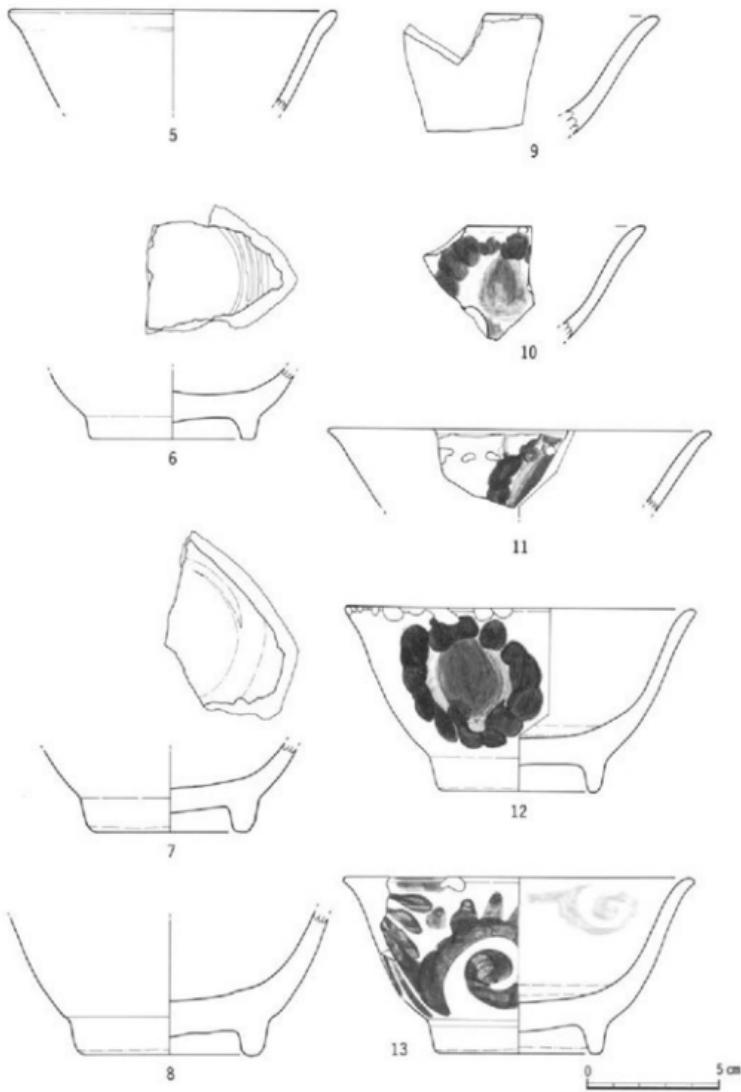
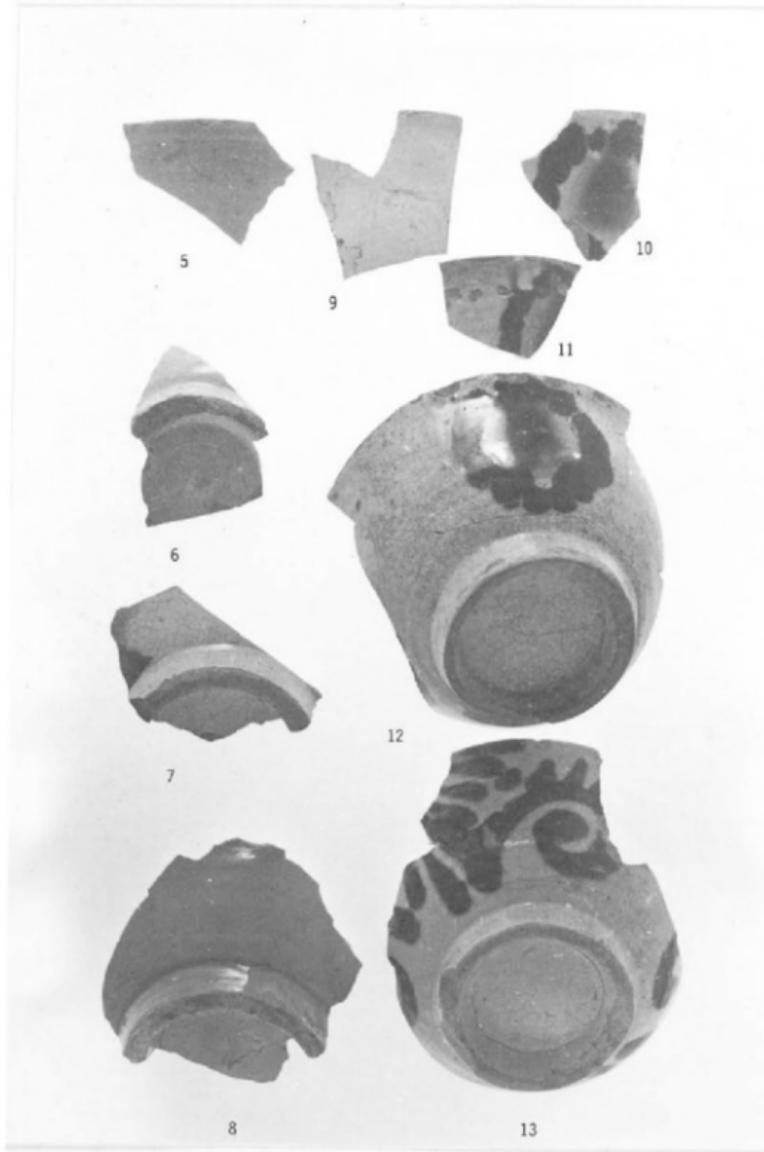


図27 陶器



图版36 陶器

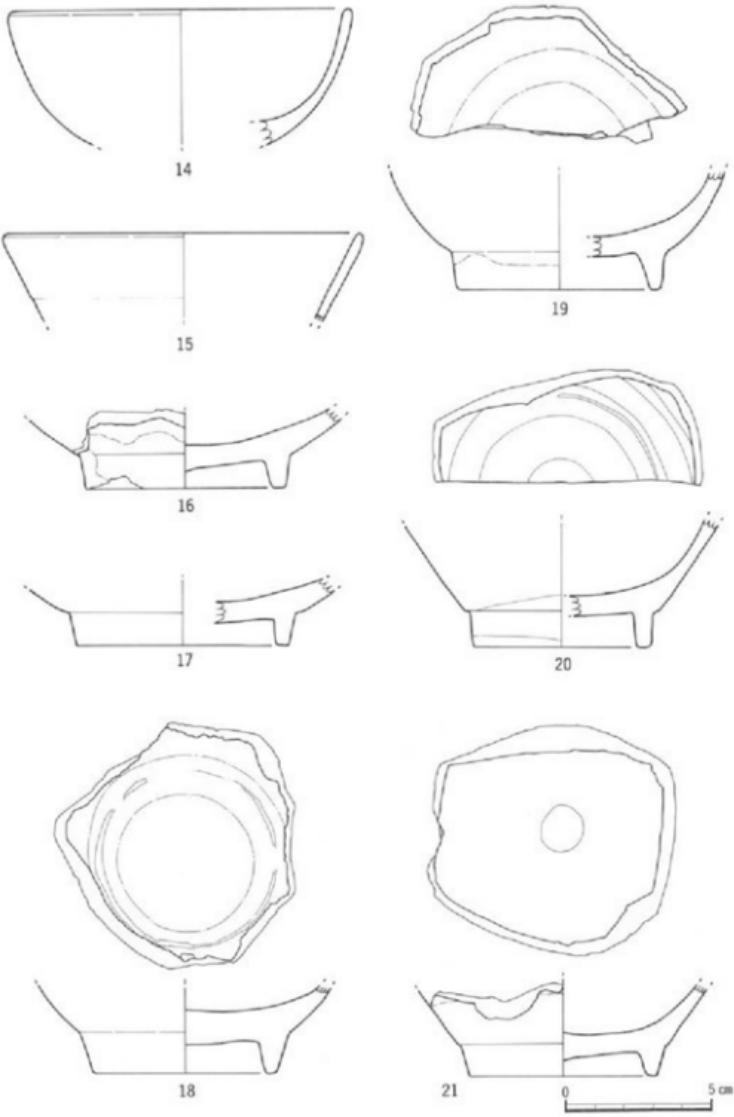
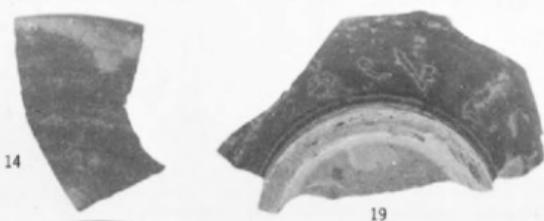
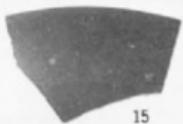


図28 陶 器



14

19



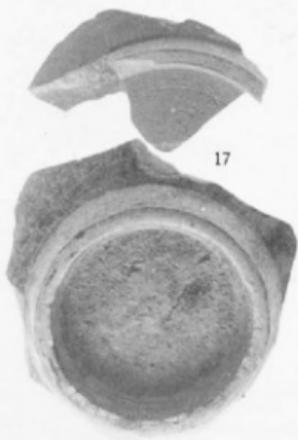
15



16

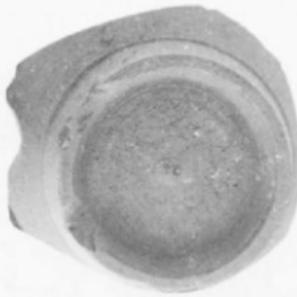


20



17

18



21

図版37 陶器

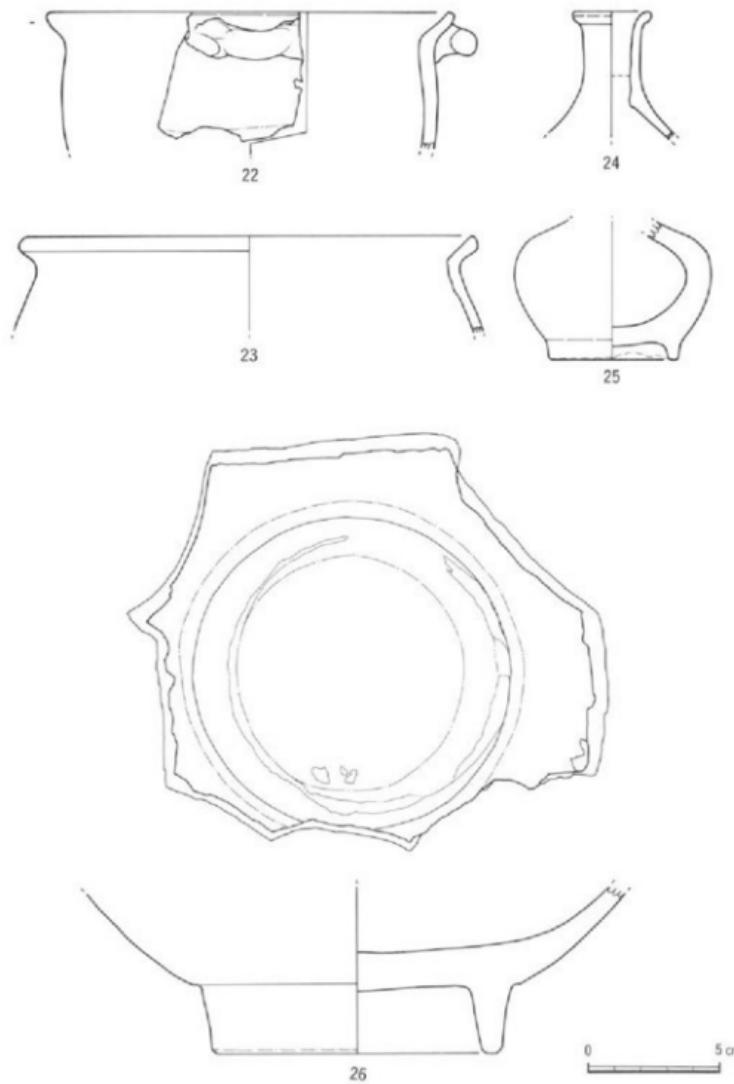
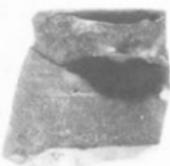


图29 陶器



22



24



23



25



26

図版38 陶 器

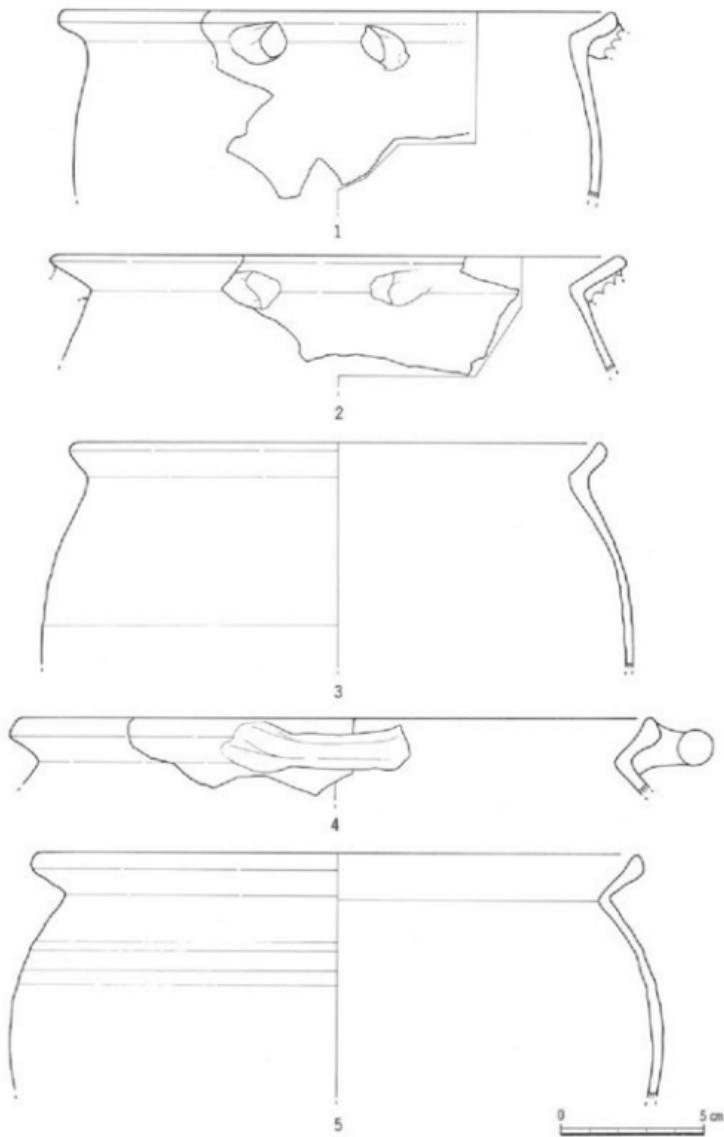
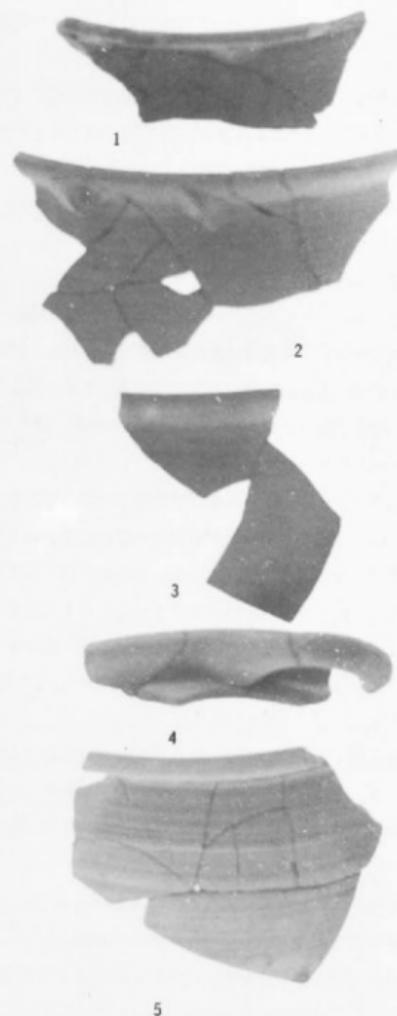


図30 陶質土器



圖版39 陶質土器

(5) 須 恵 器

今回の調査で21点得られ、その中に口縁部が1点、底部が2点含まれる。総て破片の資料で全形の窺えるものはない。ただ、ある程度の大きさの目安として、口縁部、肩、胴部の比較的大きな破片について推定復元を試みた（図31の1～3、図32の7）。

今回の資料は全て表採及び表土層で得られており、時間的な流れの中で把えることは出来なかった。得られた資料の特徴的な面を簡記すれば、①器種はほとんどが壺形に属し、明確にそれ以外の器種を示すものは見受けられない。②叩き目は内面に残るものが多い。③胎土には白色の微砂粒が含まれ、④黒色味の強い色調のものが多く、芯部が茶褐色を呈し断面がサンドウィッチ状になるものがほとんどである。

図31～図33に示した特徴的なものについて、以下に略述する。

口縁部の資料は図31の1に示した1点だけ得られている。口径の推算が可能で約20cmを測る。ゆるやかな弧を描きながら外反し、口唇部は角がとれ丸味を帯びる。肩部へ移行する部分で破損しており以下の形状は不明。外面は比較的丁寧な整形であるが、内面は粘土の翫ぎ目が残り若干の凹凸がみられる。器厚は頭部で厚く約9mmを測り、口唇部、肩部の方へ薄くなっている。
注1類例資料は勝連城跡などから報告されている。

図31の2～図32の10までは肩部の資料である。推定復元を試みた3点（図31の2、3、図32の7）をみると、図31の2、3のように肩部がなだらかで、胴部が膨らむものと、図32の7のように肩部のカーブが急で、胴部があまり膨らまないものの2種の器形がみられる。

前者の器形を有すと考えられる資料は図31の2～6に示した5点である。いずれも口縁部へ立ち上がりっていく部分で破損しているため、口縁部形状は不明。推定復元を試みた2、3をみると口縁部へ立ち上がりっていく部分の径が約16cmと約8cmであり、大きさに若干のバリエーションがあったかと推察される。

器表面はヘラ削りのあと軽くナデているが、4は回転擦痕が顕著にみられる。裏面をみると5点とも叩き目が残り、4、5は比較的明瞭で平行線が方向を異にして重なり合っている。器厚は立ち上がり部が若干薄く6～7mm、下部は8～9mmである。注2稻福遺跡などに類例の報告がみられる。

後者の器形を有すかと考えられる資料は図32の7～10に示した4点である。7は推定復元を試みたもので、肩部の最も膨らみのある箇所の径が約18cmを測る。

4点とも器表面は滑らかであるが、部分的にヘラ状工具による調整痕を若干残す。7～9の3点は内面に叩き目が残る。7は扇状の沈線が部分的に凹部を形成してみられる。8は平行沈線がみられ、部分的に方向を異にして重なり、そこで格子状を呈す。9は梢円状に平行沈線がみられ、その部分で若干の凹部を形成する。7、9は叩き目のあとに数条の横位沈線が廻る。器厚は7、9が8mm前後、8、10が6mm前後を測る。

IIは直線的な肩部の資料で口縁部へ立ち上がる部分を有す。器表面はナデられているが、下部の方では平行線の叩き目が浅く残る。裏面は放射状の雑な沈線が明瞭に残るもの全体の形は知り得ない。叩き縮めた後にさらに調整を行っている。器色は灰色を呈し、器厚は口縁部へ立ち上がっていく部分が若干厚く、叩き縮められている下部は薄くなっている。

図32の12及び図33の13～17に示したものは胴部破片である。6点とも器面の調整はそれほど丁寧ではなく、表面は細かい凹凸がみられ、裏面には粘土の積み跡が明瞭に残る。図32の12、図33の13、14の3点は裏面に叩き目を有す。

図32の12は比較的明瞭に残っており、3～5本を単位とする平行沈線が方向を異にして重なり合い1つの形をつくっている。図33の13は不明瞭で、14は上部に雑な沈線を施す梢円状の凹部がみられる。3点とも粘土の繼ぎ目に当たるように叩き目がみられる。

器色は図33の14は灰色を呈し、芯部も同様な色であるが、他は黒味が強く芯部は茶褐色を呈す。器厚は14、16が10mm前後と厚く、他は5～8mmである。

図33の18、19は底部の資料である。2点とも径は不明。18は底面から胴部へ立ち上がっていく部分の角がとれやや丸味を帯びる。上方では粘土の積み跡も明瞭にみられる。外面はナデされているものの、内面は回転擦痕が顕著に残る。器厚は胴部が約9mm、底面部が約6mm。

19は底面の資料である。外面は軽くナデられ、内面は弧状に回転擦痕がみられる。外面は僅かに内側へカーブしている。器厚は約5mmを測る。

註

註1. 琉球政府 「勝連城跡第2次発掘調査概報」 琉球文化財調査報告書 1966年

註2. 沖縄県教育委員会 「福禄遺跡発掘調査報告書(上御原地区)」

『沖縄県文化財調査報告書第50集』 1983年3月

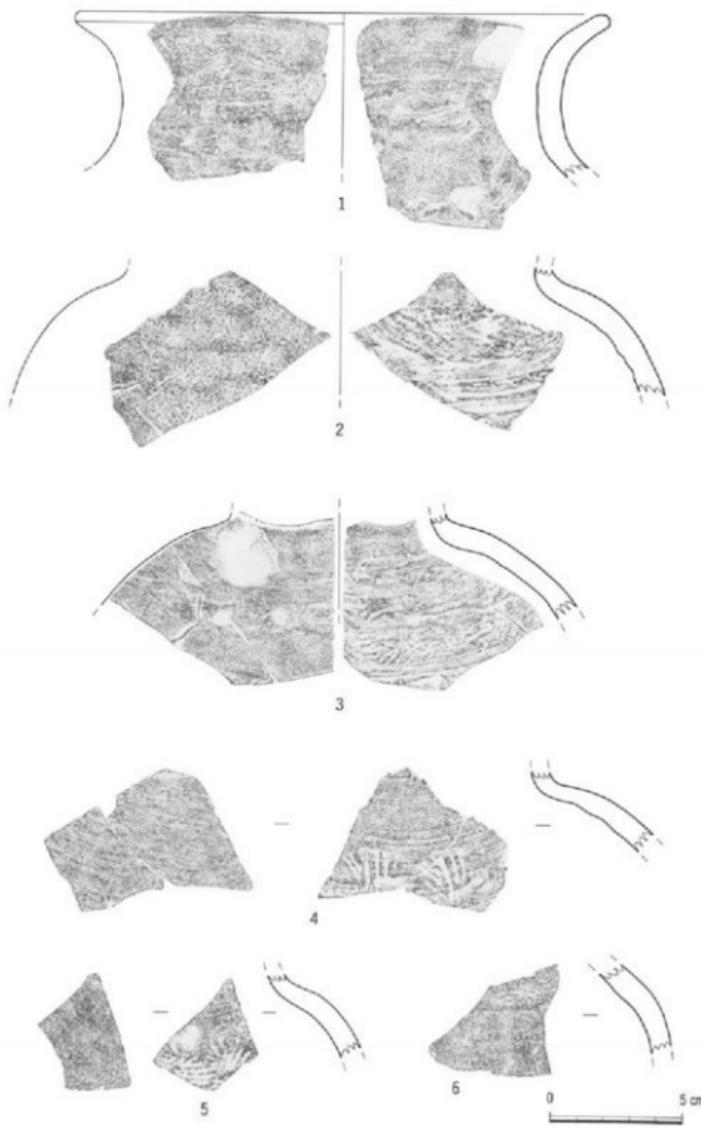
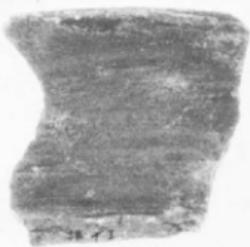


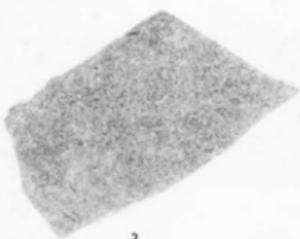
図31 須恵器



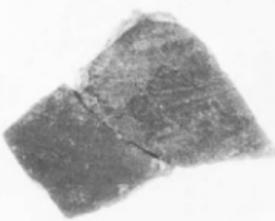
1



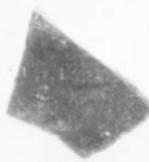
2



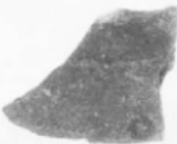
3



4



5

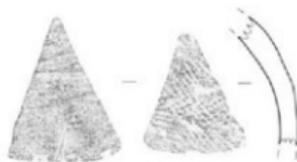


6

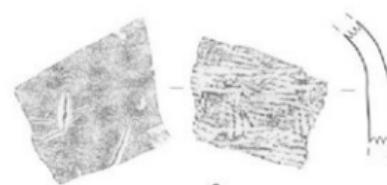
図版40 須 恵 器



7



8



9



10



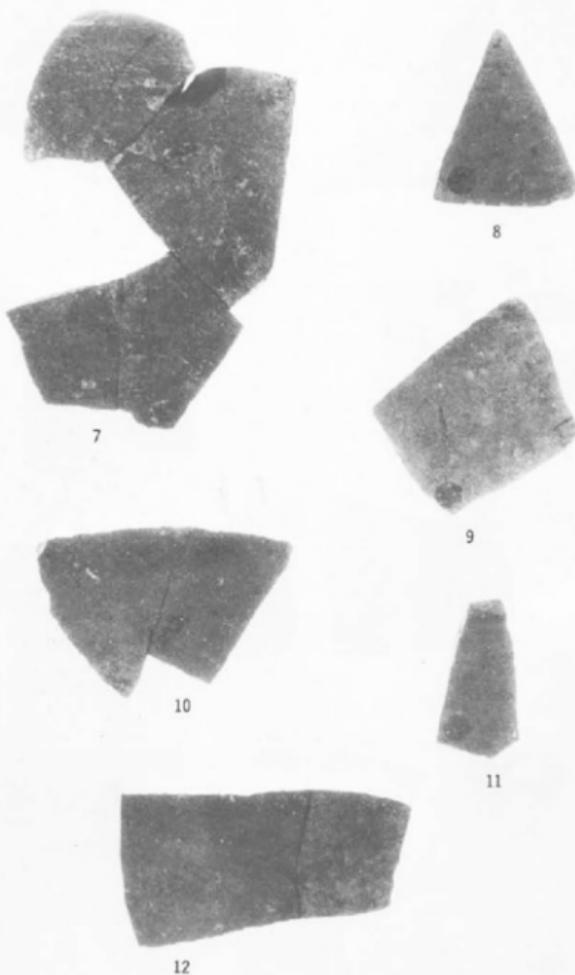
11



12

0 5 cm

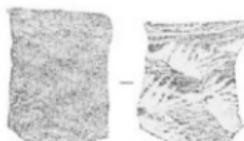
図32 須 惠 器



図版41 須 恵 器



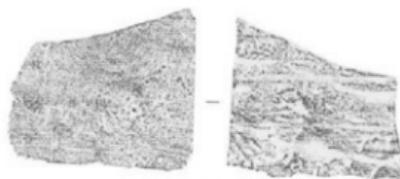
13



14



15



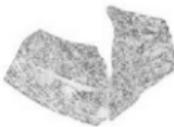
16



19



17



18



図33 須 恵 器



13



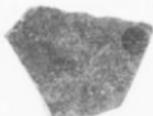
14



15



16



17



18



19

図版42 須恵器

(6) 土器

本遺跡出土の土器はいずれもグスク土器で、他の時期の資料は得られてない。すべて破片で全形を窺うことのできるものはなかった。器種は鉢形、壺形、碗形があり、鉢形が最も多かった。なお、この時期に出土するコブ状の把手がつくものは出土していない。底部はすべて平底である。胎土は泥質と砂質に分けられる。泥質のものは、ほとんどが混入物の種類や量が少なく、脱落して器面がボーラスになっているものもある。砂質のものは、混入物の種類と量が多く、手触りはザラザラしている。以下、略述するが、個々の遺物については表10の観察一覧のとおりである。

表8 口縁部出土状況

地区	鉢 形		壺 形	碗 形	不 明	計
	I	II				
イ	36	8	15	6	19	84
ロ	25	11	11	2	12	61
ハ	1					1
計	62	19	26	8	31	146

イ. 鉢形土器 (図34~40、図版43~49)

口縁部の形態から2種に分類できる。

鉢形 I (図34の1~図38の47)

内彎するもの (1~13、15~36、44) と直口状のもの (14、37~43、45~47) に細分できる。表面は指圧痕や浅い凹凸が残るなど調整は難であるが、裏面は概ね丁寧である。32は瘤状の突起が付く唯一の資料である。33は口唇下約1cmの所で左上から右下へ規則的に指ナデを施した痕が残っている。

鉢形 II (図38の48、図39の49~図40の62)

頸部は締まり、口縁部が外反もしくは直口するもので、肩部が張らない点で壺形と区別した。外反するものは48~54の7点である。48は口縁端部で外へ折れる。表裏面に混入物をひきずった痕が残っている。

直口するものは55~62の8点である。55~58は口唇部が平坦、59~62は舌状になっている。

ロ。壺形土器 (図40~42 図版49~51)

頸部は締まり、口縁部は外反もしくは直口し、肩部は張りだす。

外反するものは63~80の18点である。71は口唇から頸部まで4cm、80は3.5cmと長い。76は薄手である。

直口するものは81~85の5点と少ない。

ハ。碗形土器 (図42、図版51)

直線的に開くもの (88、89) と直口状のもの (90、91) がある。出土量は最も少ない。

ニ。底 部 (図43~51 図版52~60)

立ち上がり部の形態から次の3種に分類した。

a. 底面からの立ち上がりが急なもの。(図43の92~図44の110)

b. 底面から直線的か、ほぼ丸味をもって胴部へ延びるもの。(図45の111~図50の146)

c. 底面からの立ち上がり部が大きく外へ開くもの。(図50の147~154)

立ち上がり部に鏝削りを施すものや121、126、127、140、155、157のように底面に葉の圧痕があるものもある。

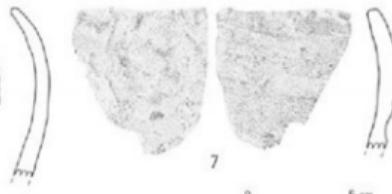
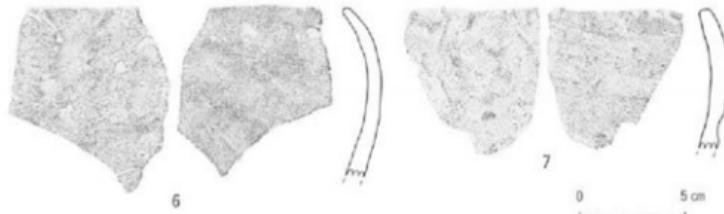
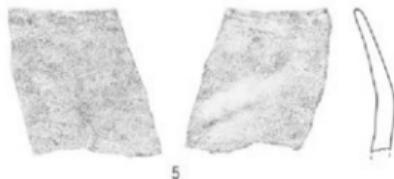
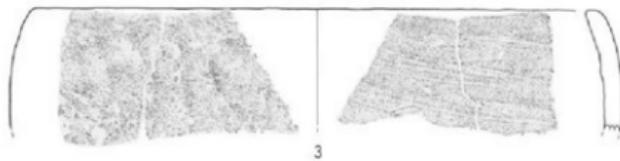
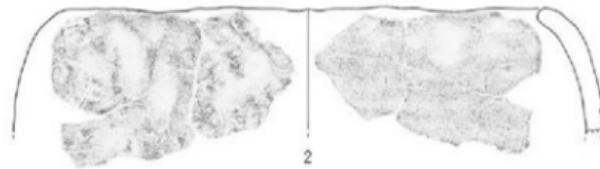
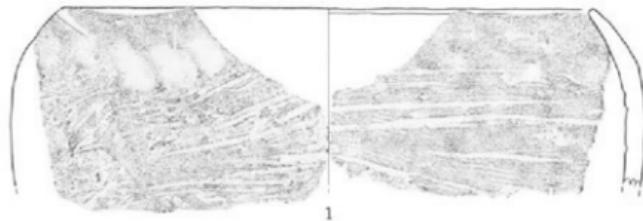
表9 底部出土状況

地区\分類	a	b	c	不明	計
イ	23	30	6	13	72
ロ	24	38	6	19	87
ハ			1		1
計	47	68	13	32	160

表10 土器観察一覧（口縁部）

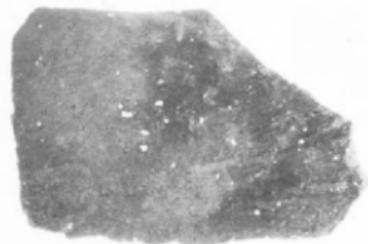
探査番号	遺物番号	分類	口径	成形・調整等の特徴	胎土	混入物	焼成	色調	出土地区	出土地点	層
団	1	鉢形I	25.2	周面とも刷毛目痕と粗い条痕がある。表面の内側する部分は指圧痕が見られる。	泥質	石英、石灰岩細片、砂粒、黒色鉱物、赤色粒	良好	茶褐色	口地区	C-21	
	2	II	23.2	表面は指圧痕が多く残る。裏面はナデ。	砂質	石英、微砂粒、黑色鉱物	普通	茶褐色	口地区	B・C-18	I
	3	II	26.7	表面は指圧痕が見られる。裏面は籠ナデ。	II	II	II	黄褐色 褐色	イ地区	黒褐色土B	
	4	II		周面ともナデ。	II	II	II	黒褐色 淡橙褐色	II		
	5	II		周面ともナデ。	泥質	II	良好	灰褐色 茶褐色	イ地区	C-23	I
	6	II		表面は指圧痕が見られる。表面は籠ナデ、裏面はナデ。	砂質	II	II	茶褐色	口地区		擾乱
	7	II		表面は雑で凹凸が残り、指圧痕も見られる。裏面は指ナデ。	II	II	普通	II	口地区	D-18	I
団	8	II		周面ともナデ。	泥質	石英、微砂粒、黑色鉱物、赤色粒	良好	暗茶褐色	イ地区	黒褐色土C	
	9	II		表面は雑で凹凸が残っている。裏面はナデ。器面はボーラス。	II	脱落して見られない。	II	茶褐色	口地区	C-20	I
	10	II		周面ともナデ。	砂質	石英、微砂粒、黑色鉱物	II	赤褐色 黄褐色	ハ地区	す・せ-16	
	11	II		周面ともナデ。裏面には指圧痕が見られる。	II	II	II	黄褐色	口地区	D-20	I
	12	II		表面には指圧痕が見られる。裏面はナデ。	II	II	II	茶褐色 褐色	口地区	C-20	I
35	13	II		表面はナデ。裏面は籠ナデ。	泥質	砂粒	II	茶褐色 淡橙褐色	口地区		擾乱
	14	II		表面の一部は籠ナデ。裏面はナデ。	砂質	石英、微砂粒、黑色鉱物、赤色粒	II	茶褐色	イ地区	黒褐色土B	
	15	II		表面は雑で凹凸が残っている。裏面はナデ。	泥質	石英、微砂粒、黑色鉱物	II	褐色	口地区	B-20	II

擇図番号	遺物番号	分類	口径	成形・調整等の特徴	胎土	混入物	焼成	色調	出土地点	層
図	16	鉢形 I		表面は雑で凹凸が残っている。裏面は横位の窓ナデ。	砂質	石英、微砂粒、黒色鉱物	良好	灰白色	口地区 A-20	I
	17	〃		表面と裏面の一部は窓ナデ。	泥質	砂粒、赤色粒	〃	茶褐色	イ地区	I
図	18	〃		表面は凹凸が残る。裏面はナデ。	砂質	石英、微砂粒、黒色鉱物	普通	赤褐色	イ地区 黒褐色土B	
	19	〃		両面ともナデ。器面はポーラス。	泥質	石英、砂粒	良好	黄褐色	イ地区 黒褐色土A	
	20	〃		両面ともナデ、表面には指圧痕がある。器面はポーラス。	〃	〃	〃	茶褐色	イ地区 F-23	I
	21	〃		表面は凹凸が残る。裏面はナデ。	〃	石英、微砂粒、黒色鉱物	〃	黑色	口地区 A-20	I
	22	〃		両面ともナデ。器面はポーラス。	〃	石英、砂粒	〃	淡橙褐色	イ地区 F-24	I
	23	〃		表面は指圧痕が残る。裏面は窓ナデ。	〃	石英、微砂粒、黒色鉱物	〃	茶褐色	イ地区 黒褐色土B	
	24	〃		両面とも窓ナデ。	〃	石英、砂粒	〃	茶褐色	イ地区 黒褐色土B	
	25	〃		両面ともナデ。	〃	〃	〃	茶褐色 黄褐色	〃	
図	26	〃		両面ともナデ。表面は雑に調整。	〃	石英、微砂粒、黒色鉱物	〃	暗褐色	イ地区 黒褐色土A	
	27	〃		両面ともナデ。	〃	石英、砂粒	〃	茶褐色	口地区	摸
	28	〃		〃	〃	〃	〃	茶褐色 灰褐色	イ地区 A-21	II
図	29	〃		〃	〃	脱落して見られない。	〃	淡橙褐色	口地区	
	30	〃		表面は指圧痕が見られる。裏面には擦痕がある。	砂質	石英、微砂粒、黒色鉱物、赤色粒	〃	茶褐色	イ地区 黒褐色土C	

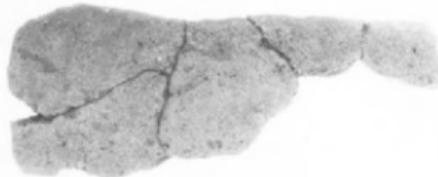


0 5 cm

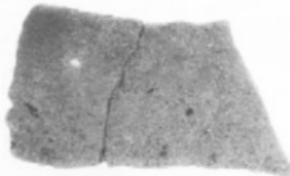
図34 鉢形土器



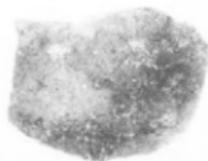
1



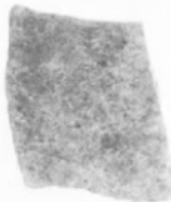
2



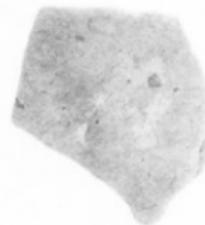
3



4



5



6



7

図版43 鉢形土器

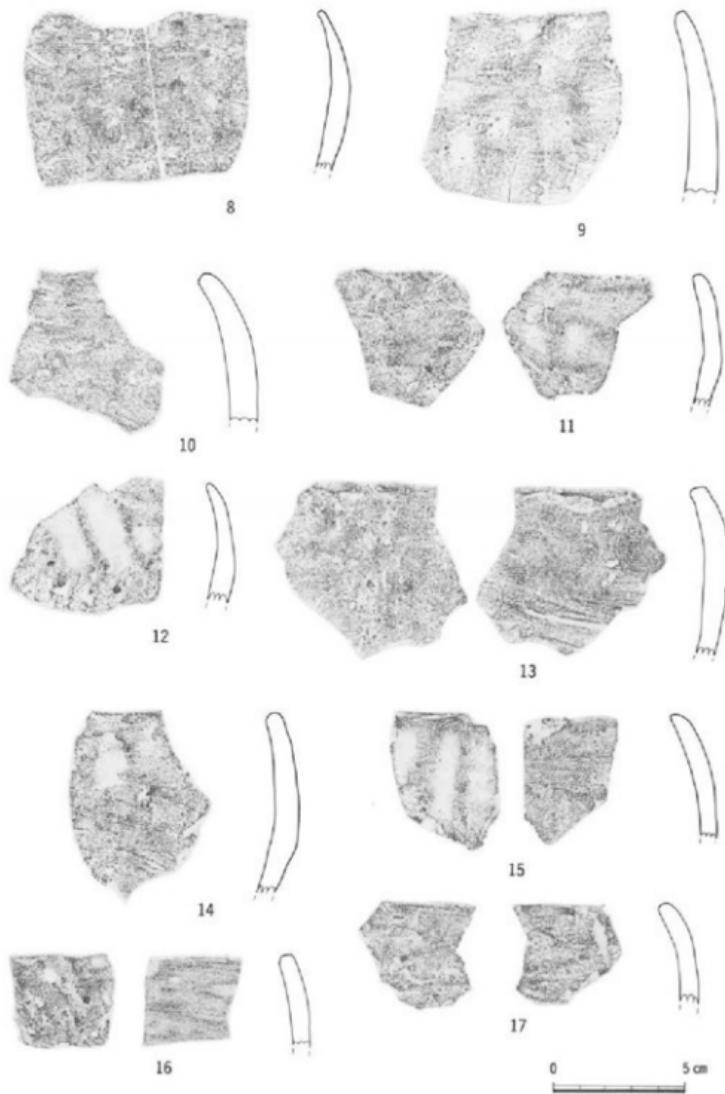
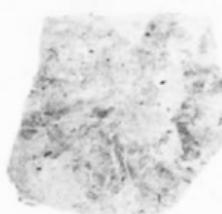


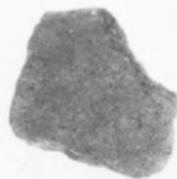
図35 鉢形土器



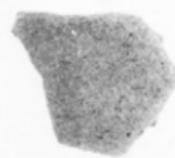
8



9



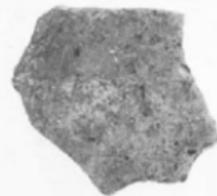
10



11



12



13



14



15

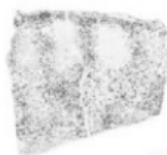


16



17

図版44 鉢形土器



18



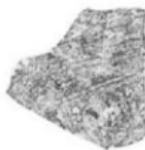
19



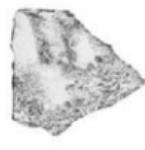
20



21



22



23



24



25



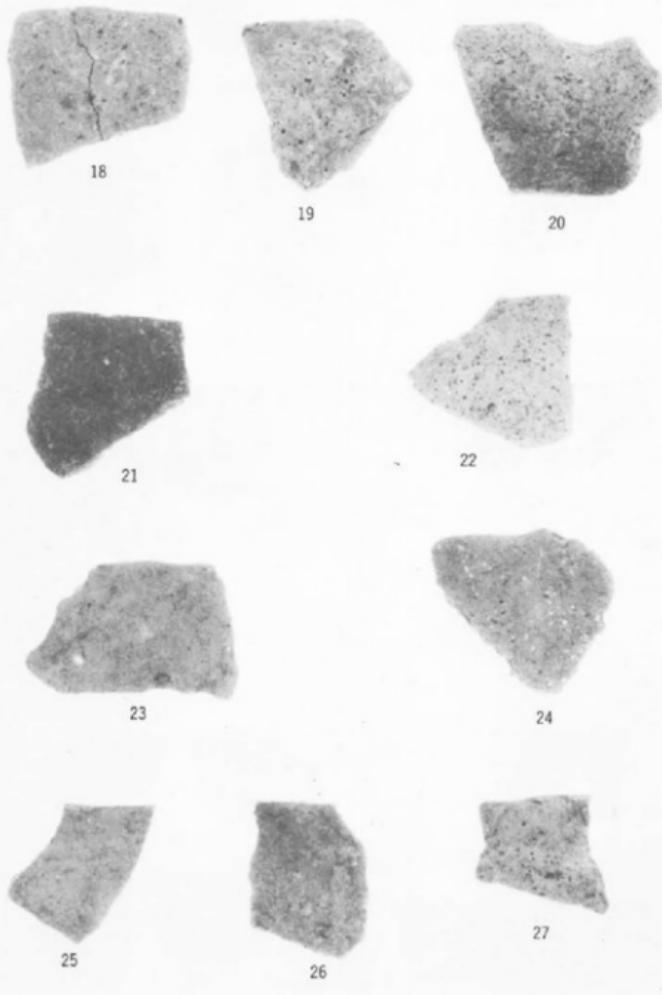
26



27



図36 鉢形土器



図版45 鉢形土器

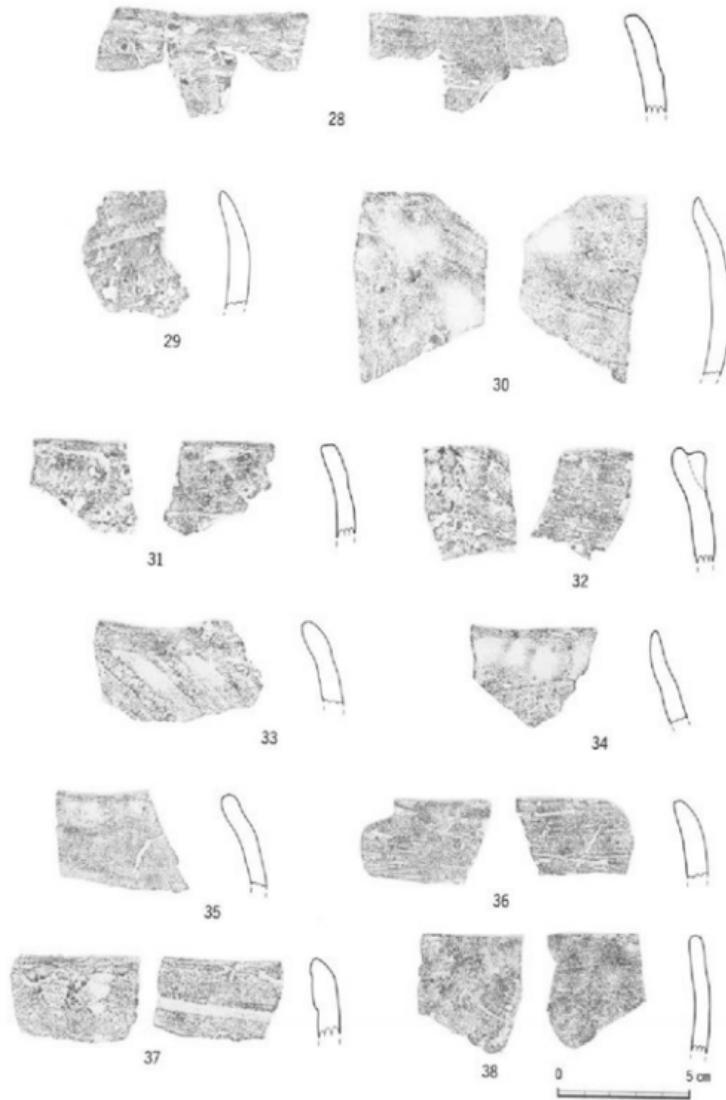
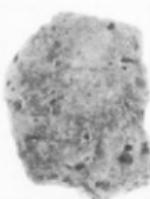


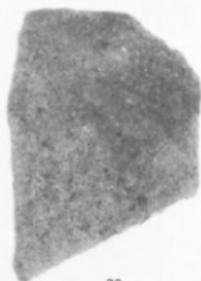
図37 鉢形土器



28



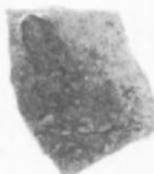
29



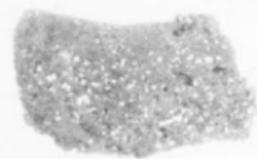
30



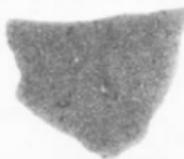
31



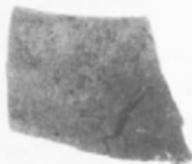
32



33



34



35



36

図版46 鉢形土器

捕獲番号	遺物番号	分類	口径	成形・調整等の特徴	胎土	混入物	焼成	色調	出土地区	出土地点	層
図	31	鉢形 I		表面はナデ。裏面は笠ナデ。	泥質	砂粒	ク	褐色	イ地区 黒褐色土B		
	32	〃		瘤状突起が付く。笠ナデ。	ク	微砂粒、砂粒、 黒色鉱物	ク	黄褐色	ロ地区 C-18	I	
	33	〃		表面は指ナデを上端では横位、 その下は左上から右下へ施す。	ク	砂粒、サンゴ片 を多量に混入。	普通	茶褐色	イ地区 B-24	II	
	34	〃		両面ともナデ。	砂質	石英、黒色鉱物	良好	〃	イ地区 F-23	I	
	35	〃		〃	泥質	〃	〃	褐色	イ地区 あ-23	I	
図	36	〃		両面とも笠ナデ。	ク	砂粒	ク	茶褐色 淡橙褐色	ロ地区 B-18	I	
	37	〃		表面ナデ、裏面は笠ナデ。	砂質	石英、黒色鉱物。	ク	黄褐色	イ地区	I	
	38	〃		両面ともナデ。器面はボーラス。	泥質	砂粒	ク	茶褐色 淡橙褐色	イ地区 黒褐色土B		
	39	〃		両面ともナデ。指圧痕が見られる。	砂質	石英、微砂粒、 黒色鉱物。	ク	灰褐色 茶褐色	イ地区 F-23	I	
	40	〃		両面ともナデ。	ク	〃	ク	黄褐色 淡橙褐色	ロ地区 C-20	I	
図	41	〃		表面は笠削り。裏面はナデ。	泥質	石英、微砂粒、 黒色鉱物、赤色 粒	ク	黄褐色	ロ地区 C-20	I	
	42	〃		両面ともナデ。	ク	石英	ク	灰白色	イ地区 F-23	I	
	43	〃		端部が僅かに外反する。両面ともナデ。	ク	砂粒	ク	淡橙褐色 黒褐色土B	イ地区	I	
	44	〃		波状口縁。端部は直口状になる。 両面ともナデ。	砂質	石英、微砂粒、 黒色鉱物。	ク	茶褐色	イ地区 黒褐色土C		
	45	ク		両面とも笠ナデ。	ク	〃	ク	赤褐色	イ地区 黒褐色土B		

擲団番号	遺物番号	分類	口径	成形・調整等の特徴	胎土	混入物	焼成	色調	出土地区	層
団	46	鉢形I		両面ともナデ。裏面に指圧痕がある。	砂質	石英、微砂粒、黒色鉱物	良好	橙褐色 黄褐色	イ地区	
	47	〃		表面は左上から右下へ刷毛目に入る。裏面はナデ。	〃	〃	〃	茶褐色	ロ地区 B-20	I
	48	鉢形II		両面とも窓ナデ。混入物をひきずった痕がある。	泥質	石灰岩細片	〃	赤褐色 黄褐色	イ地区	I
	49	〃		両面とも窓ナデ。	〃	石英、石灰岩細片	〃	茶褐色	ロ地区 B-20	I
	50	〃		表面は窓ナデ、裏面はナデ。器面はボーラス。	〃	石英、砂粒、赤色粒	〃	黄褐色 橙褐色	ロ地区 B-17	I
	51	〃		両面とも窓ナデ。	〃	石英、微砂粒、黒色鉱物、赤色粒	〃	茶褐色	〃	I
	52	〃		両面ともナデ。	砂質	〃	〃	〃	ロ地区 B-20	I
	53	〃		〃	泥質	〃	〃	〃	イ地区	I
	54	〃		〃	砂質	〃	〃	茶褐色 黄褐色	ロ地区 C-18	I
	55	〃		表面はナデ。裏面は刷毛目。器面はボーラス。	泥質	〃	〃	褐色 茶褐色	イ地区	
	56	〃		両面ともナデ。	〃	石英	〃	灰白色 茶褐色	ロ地区 A-20	I
	57	〃		表面は窓ナデ。裏面はナデ。	砂質	石英、黒色鉱物	〃	茶褐色	イ地区	表採
	58	〃		両面ともナデ。	〃	〃	〃	赤褐色 灰褐色	ロ地区 B-17	I
	59	〃		〃	〃	石英、微砂粒、黒色鉱物	〃	赤褐色 褐色	イ地区	
	60	〃		両面とも窓ナデ。	泥質	石英、微砂粒	〃	茶褐色	イ地区 A-21	II

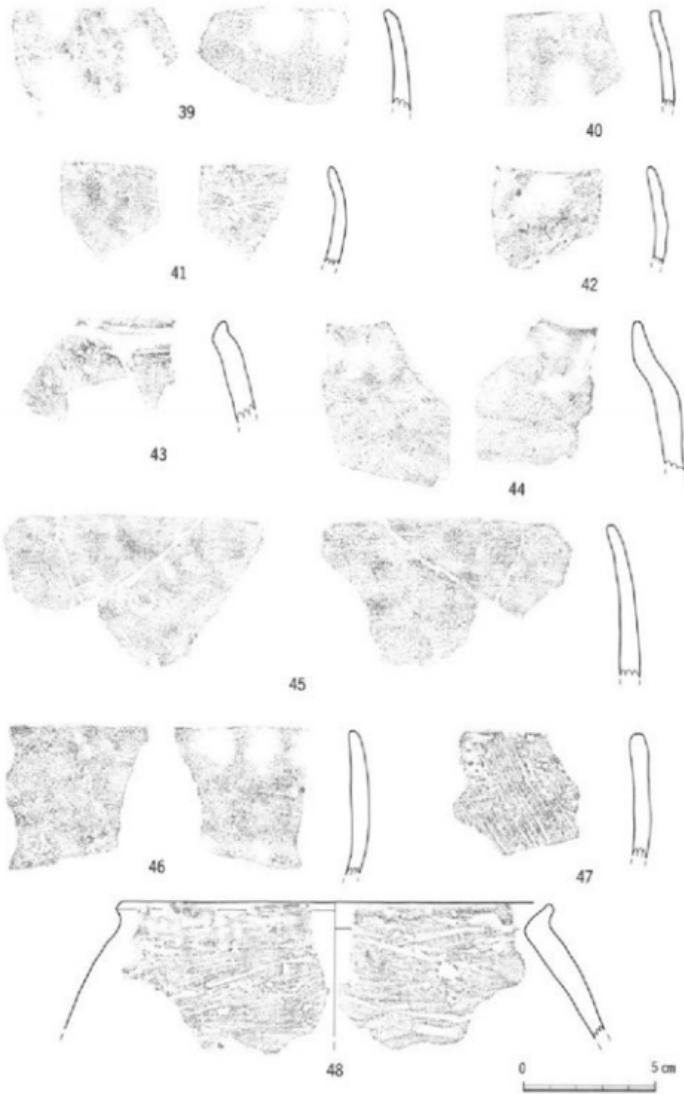
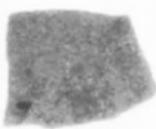


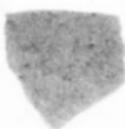
図38 鉢形土器



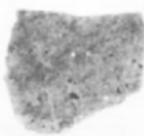
39



40



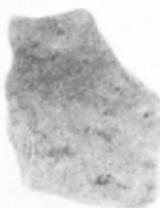
41



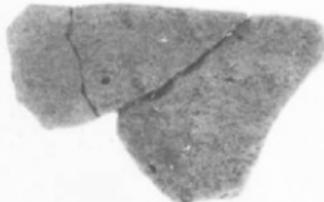
42



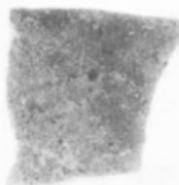
43



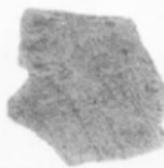
44



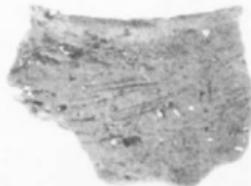
45



46



47



48

図版47 鉢形土器

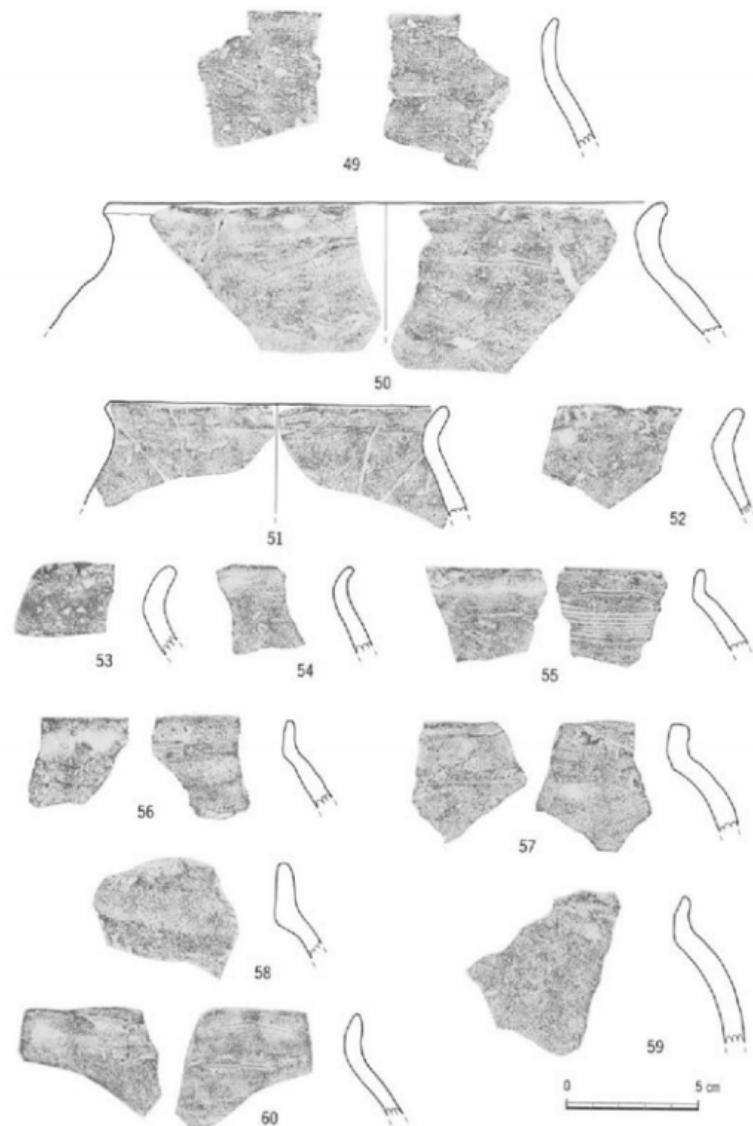
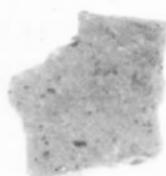
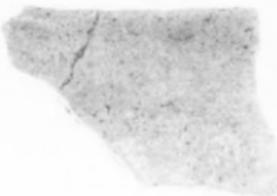


図39 鉢形土器



49



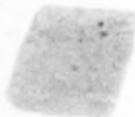
50



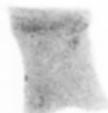
51



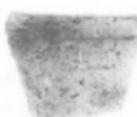
52



53



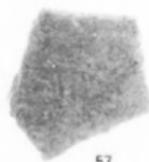
54



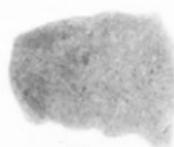
55



56



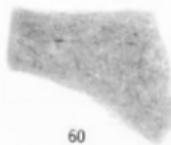
57



58



59



60

圖版48 鉢形土器

捕団 番号	遺物 番号	分類	口径	成形・調整等の特徴	胎土	混入物	焼成	色調	出土地区	出土地点	層
國	61	鉢形II		表面はナデ。裏面は刷毛目。器面はポーラス。	泥質	砂粒、赤色粒	良好	黄褐色	口地区C-20	I	
	62	II		両面ともナデ。	II	石英、砂粒、赤色粒	普通	茶褐色 黄褐色	イ地区 黒褐色土B	I	
	63	壺形	15.6	II	II	砂粒、赤色粒	良好	淡橙褐色	口地区C-18	I	
	64	II	13.4	両面ともナデ。器面はポーラス。	II	石英、砂粒、黒色鉱物	良好	淡橙褐色	イ地区	I	
	65	II		両面ともナデ。	II	石英、微砂粒、黒色鉱物、赤色粒	II	暗茶褐色 淡橙褐色	イ地区		
	66	II		表面はテデ。裏面は窓ナデ。	砂質	石英、微砂粒、黒色鉱物。	II	II	口地区B-20	I	
	67	II		両面ともナデ。	泥質	石英、微砂粒	II	黑褐色 黄褐色	口地区B-16	I	
	68	II		表面はナデと窓削り。裏面はナデ。	II	石英、微砂粒、黒色鉱物、赤色粒	II	茶褐色	口地区 あ・A-21	I	
	69	II		表面は窓ナデ。裏面はナデ。	II	II	II	橙褐色	イ地区A-21	II	
	70	II		両面ともナデ。	II	石英、黒色鉱物。	II	黄褐色	口地区B-16	I	
國	71	II		表面は縦方向の窓削り。裏面はナデ。	砂質	石英、微砂粒	II	黄褐色 橙褐色	口地区B-20	I	
	72	II		両面ともナデ。	II	石英、微砂粒、黒色鉱物	II	茶褐色	イ地区H-22	I	
	73	II		両面とも窓ナデ。	II	II	II	黄褐色 橙褐色	イ地区	I	
	74	II		表面は窓削りと窓ナデ。裏面はナデ。	泥質	石英、黒色鉱物、赤色粒	II	茶褐色 黄褐色	イ地区		
	75	II		両面ともナデ。器面はポーラス。	II	石英、砂粒、黒色鉱物	II	橙褐色	口地区C-18	I	

探査番号	遺物番号	分類	口径	成形・調整等の特徴	胎土	混入物	焼成	色調	出土地区 出土地点	層
図	76	壺 形		両面ともナデ。	砂質	石英、微砂粒、黒色鉱物	良好	茶褐色 黄褐色	イ地区 黒褐色土B	
	77	〃		〃	〃	〃	〃	茶褐色	ロ地区 B-18	I
	78	〃		両面とも笠ナデ。	泥質	砂粒	〃	暗茶褐色 橙褐色	イ地区 黒褐色土B	
41	79	〃	12.0	表面はナデ。裏面は笠削りと笠ナデ。	砂質	石英、微砂粒、黒色鉱物、赤色粒	〃	茶褐色	ロ地区 B-17	I
	80	〃	18.0	表面は縱方向のナデ。裏面は横方向の笠ナデ。	泥質	〃	〃	淡橙褐色	ロ地区 A-20	I
	81	〃	12.6	両面ともナデ。一部笠削り。	砂質	〃	〃	茶褐色 黄褐色	ロ地区 B-18	I
	82	〃	12.1	表面はナデ。裏面は笠ナデ。	〃	〃	〃	茶褐色	ロ地区 B-20	I
	83	〃		表面はナデ。裏面は笠ナデ。	泥質	〃	〃	茶褐色 淡橙褐色	イ地区 B-22	
	84	〃		両面ともナデ。	砂質	石英、微砂粒、黒色鉱物	〃	黄褐色	イ地区 I-22	I
42	85	〃		〃	泥質	〃	〃	赤褐色	イ地区 A-21	II
	86	〃		両面とも笠ナデ。表面の頸部は笠削り。	〃	〃	〃	茶褐色 淡橙褐色	イ地区 I-22	I
	87	〃		表面は笠ナデ。裏面はナデ。器面はボーラス。	〃	砂粒	〃	暗褐色 淡橙褐色	イ地区 黒褐色土C	
	88	碗 形	11.6	両面ともナデ。	砂質	石英、微砂粒、黒色鉱物、赤色粒	〃	淡橙褐色	イ地区 黒褐色土B	
	89	〃		両面とも笠みがき。	泥質	石英、微砂粒、黒色鉱物	〃	褐色	イ地区 黒褐色土A	
	90	〃		両面ともナデ。	砂質	〃	〃	黄褐色	ロ地区 B-18	I
	91	〃		表面は笠ナデ。裏面はナデ。	泥質	石英、砂粒	〃	茶褐色 暗茶褐色	イ地区 黒褐色土C	

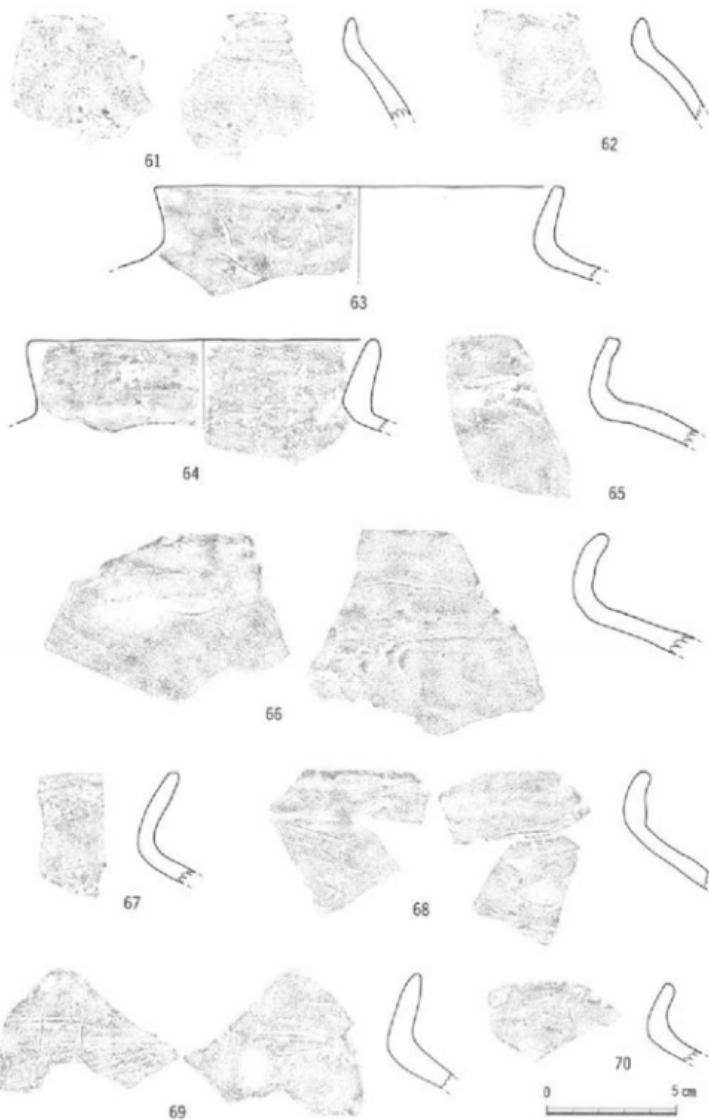
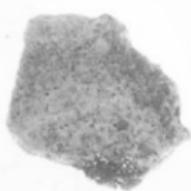
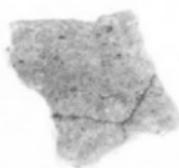


図40 鉢形土器・壺形土器



61



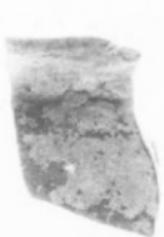
62



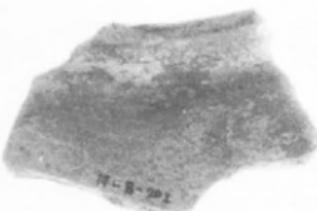
63



64



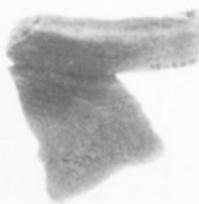
65



66



67



68



69



70

図版49 鉢形土器・壺形土器

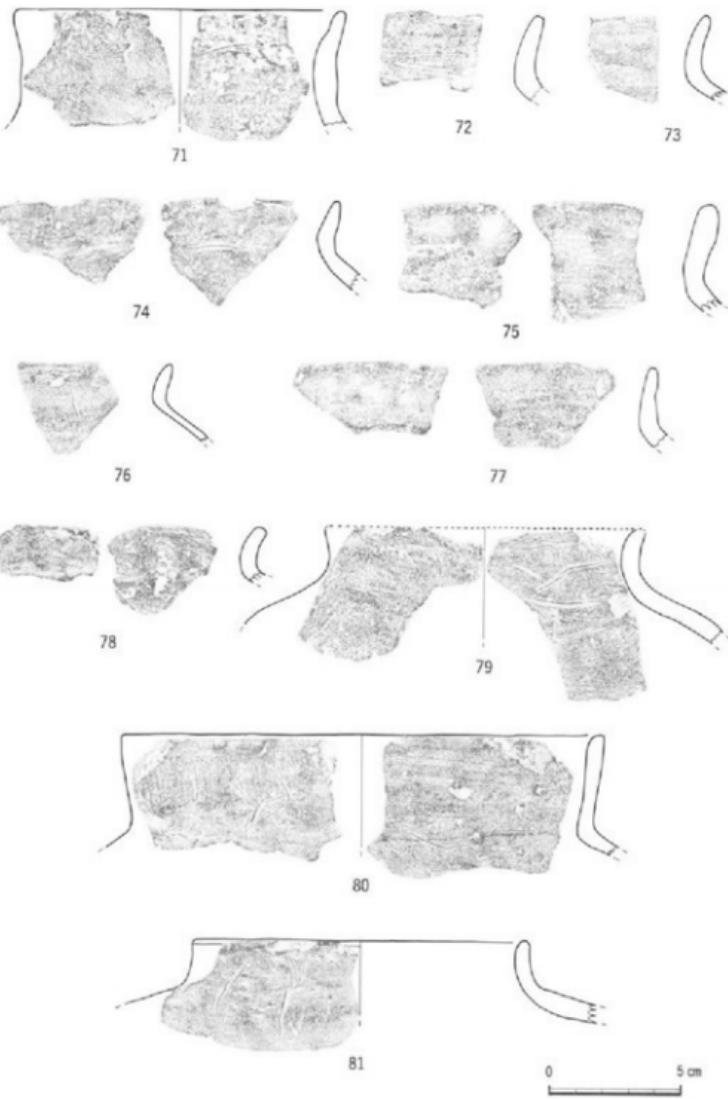
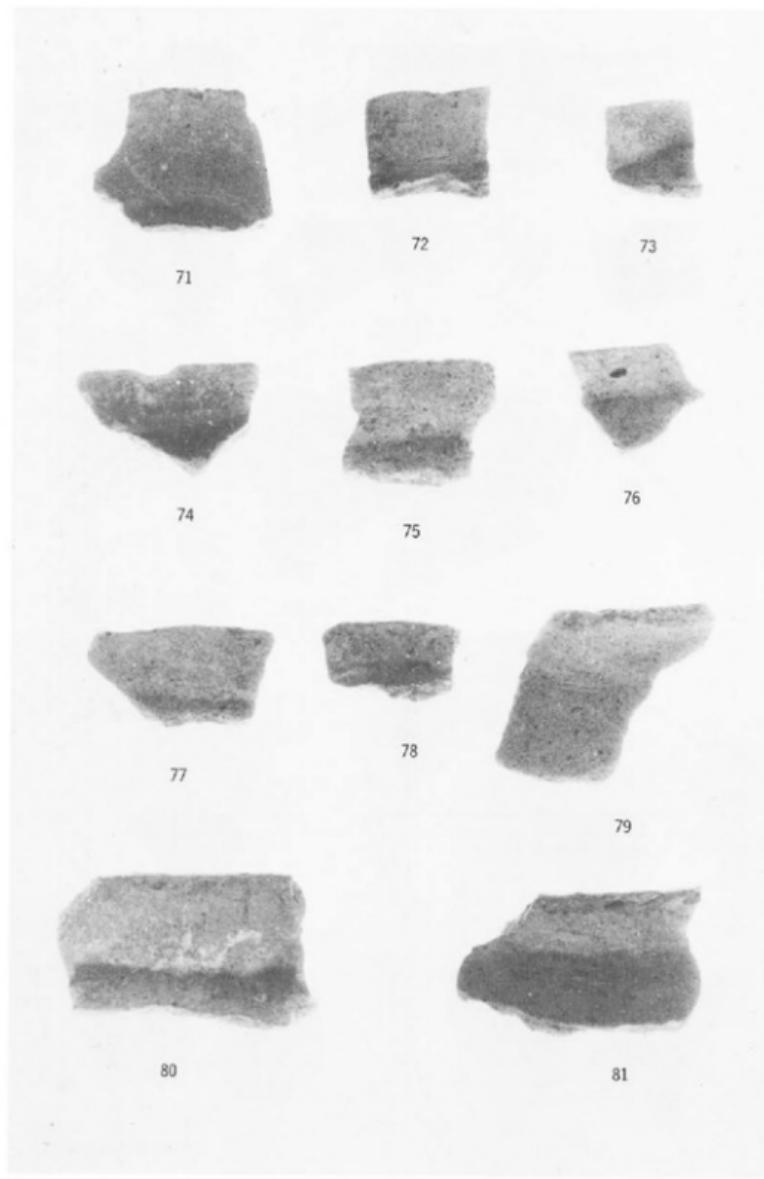


图41 壶形土器



図版50 壺形土器

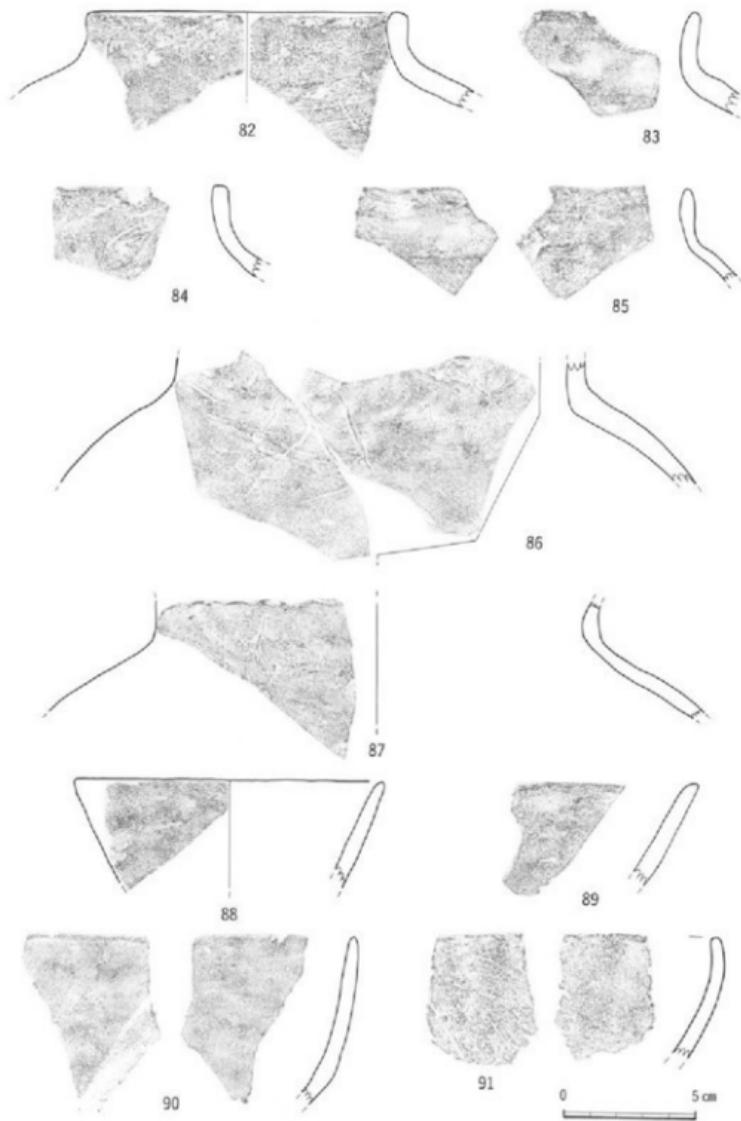
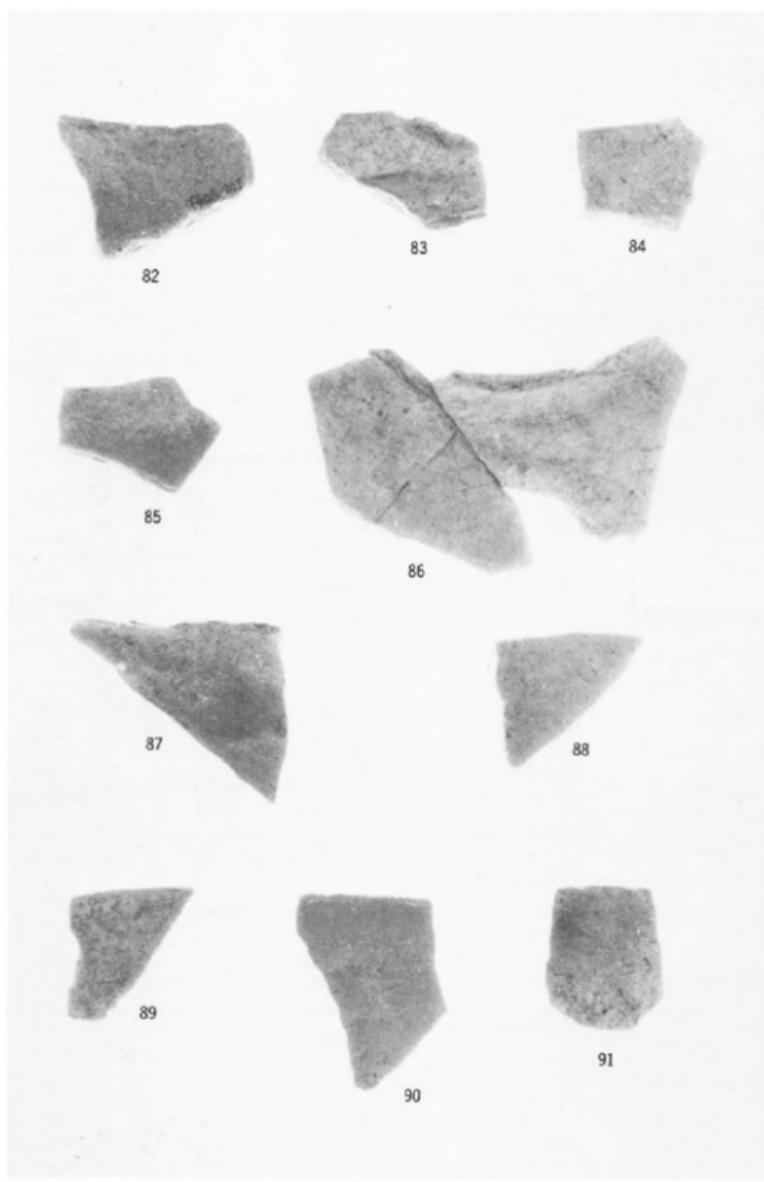


図42 壺形土器・碗形土器



図版51 壺形土器・碗形土器

(底 部)

擇図番号	遺物番号	分類	底種	成形・調整等の特徴	胎土	混入物	焼成	色調	出土地区 出土地点	層
国	92	底部a	18.3	両面ともナデ。表面は浅い凹凸が残っている。	泥質	石英、黒色鉱物、赤色粒	良好	淡橙褐色	イ地区 黒褐色土C	
	93	〃	12.4	両面ともナデ。	〃	石英、黒色鉱物	〃	茶褐色 暗褐色	イ地区 a-22	
	94	〃	17.0	表面の立ち上がり部は縱位の箇割り。裏面はナデ。	〃	石英、微砂粒	〃	灰褐色	ロ地区 D-20	I
	95	〃	13.0	表面は摩滅して不明。裏面はナデ。	砂質	石英、微砂粒、黑色鉱物、赤色粒	普通	茶褐色	ロ地区 B-20	I
	96	〃	11.4	両面ともナデ。表面の立ち上がり部の一部に箇割りが見られる。	〃	〃	〃	赤褐色 灰褐色	イ地区 i-23	I
43	97	〃		両面ともナデ。	泥質	石英、黒色鉱物	良好	茶褐色 黄褐色	ロ地区 B-20	I
	98	〃		両面ともナデ。器面はポーラス。	〃	石英、石灰岩細片	〃	茶褐色	ロ地区 B-20	I
	99	〃	16.8	両面ともナデ。	砂質	石英、微砂粒	〃	橙褐色 灰褐色	イ地区 黒褐色土C	
国	100	〃	15.0	表面立ち上がり部は箇割り。他はナデ。	〃	石英、微砂粒、黒色鉱物	〃	褐色 灰褐色	ロ地区 B-17	I
	101	〃	14.5	表面はナデ。裏面は不明。器面はポーラス。	泥質	石灰岩細片	〃	茶褐色 橙褐色	イ地区 I-22	I
	102	〃	14.3	表面立ち上がり部は箇割り。裏面は刷毛目痕が見られる。	〃	石英、黒色鉱物	〃	茶褐色	イ地区 黒褐色土A	
	103	〃	14.3	表面立ち上がり部は箇割り。他はナデ。	砂質	石英、微砂粒、黒色鉱物	〃	茶褐色 黑褐色	ロ地区 C-20	I
	104	〃	6.8	両面ともナデ。	泥質	石英、黒色鉱物	〃	茶褐色 灰褐色	イ地区 黒褐色土A	
44	105	〃	10.5	両面ともナデ。	砂質	石英、黒色鉱物、微砂粒	〃	茶褐色 黄褐色	ロ地区 B-17	I
	106	〃	11.8	表面は不明。裏面は刷毛目痕が見られる。	泥質	石英、微砂粒	〃	灰白色 茶褐色	ロ地区 B-17	I
	107	〃	8.0	立ち上がり部の整形が難で、くぼみがある。両面ともナデ。器面はポーラス。	〃	海滨の砂	〃	橙褐色 褐色	イ地区 黒褐色土C	

括弧番号	遺物番号	分類	底径	成形・調整等の特徴	胎土	混入物	焼成	色調	出土地区 出土地点	層
図	108	底部a	6.7	表面は雑で凹凸が残っている。裏面はナデ。	泥質	石英、黒色鉱物	良好	茶褐色 黄褐色	イ地区 I-22	I
	109	〃	5.7	両面ともナデ。	〃	石英、微砂粒	〃	赤褐色 橙褐色	口地区	擾乱
	44	110	〃	7.1	表面立ち上がり部は鋸削り。他はナデ。	〃	〃	〃	茶褐色	口地区 B-17
図	111	底部b	15.4	両面とも窓ナデ。	〃	石英、砂粒	〃	赤褐色 茶褐色	口地区 B-17	I
	112	〃	17.4	表面立ち上がり部は鋸削り。裏面は不明。	〃	石英	〃	黒褐色 黄褐色	イ地区 黒褐色土B	
	113	〃	17.8	両面ともナデ。	砂質	石英、微砂粒、黒色鉱物	普通	赤褐色 黄褐色	イ地区 H-22	I
	114	〃	12.6	表面立ち上がり部は鋸削り。胴部は窓ナデ。裏面はナデ。器面はボーラス。	泥質 片	石英、石灰岩細 石英、微砂粒、黒色鉱物	良好	茶褐色	口地区 C-21	I
45	115	〃	14.8	両面ともナデ。器面はボーラス。	〃	石英、微砂粒、赤色粒	〃	〃	口地区 C-18	I
	116	〃	12.0	両面ともナデ。	砂質	石英、微砂粒、黒色鉱物	普通	茶褐色 褐色	イ地区 い-24	I
図	117	〃	13.0	表面立ち上がり部は鋸削り。胴部はナデ。成形は雑で凹みがある。裏面は横位の窓ナデ。	泥質	石英、微砂粒、黒色鉱物	良好	茶褐色 黄褐色	イ地区 黒褐色土B 口地区	
	118	〃	14.2	両面ともナデ。	砂質	石英、微砂粒、黒色鉱物、赤色粒	〃	黄褐色	口地区 C-20	I
	119	〃	12.5	表面窓ナデ。	泥質	石英、微砂粒、赤色粒	〃	赤褐色 橙褐色	口地区 A-19	I
46	120	〃	11.0	両面ともナデ。	砂質	石英、微砂粒、黒色鉱物	〃	褐色 茶褐色	口地区 D-20	I
	121	〃	9.4	表面はナデ。裏面は指ナデの痕が残る。底面に葉の圧痕がある。	〃	〃	〃	茶褐色 黒褐色	口地区 C-20	I
	122	〃	15.2	表面は摩滅しているため不明。裏面はナデ。	〃	石英、微砂粒、黒色鉱物	〃	茶褐色 橙褐色	口地区	擾乱
	123	〃	16.2	立ち上がり部の整形は雑。両面ともナデ。	泥質	石英、黒色鉱物	〃	茶褐色	口地区 A-17	I
	124	〃	10.0	立ち上がり部の一部に鋸削りを施す。両面ともナデ。	砂質	石英、微砂粒、黒色鉱物、赤色粒	〃	灰褐色 茶褐色	イ地区 黒褐色土C	

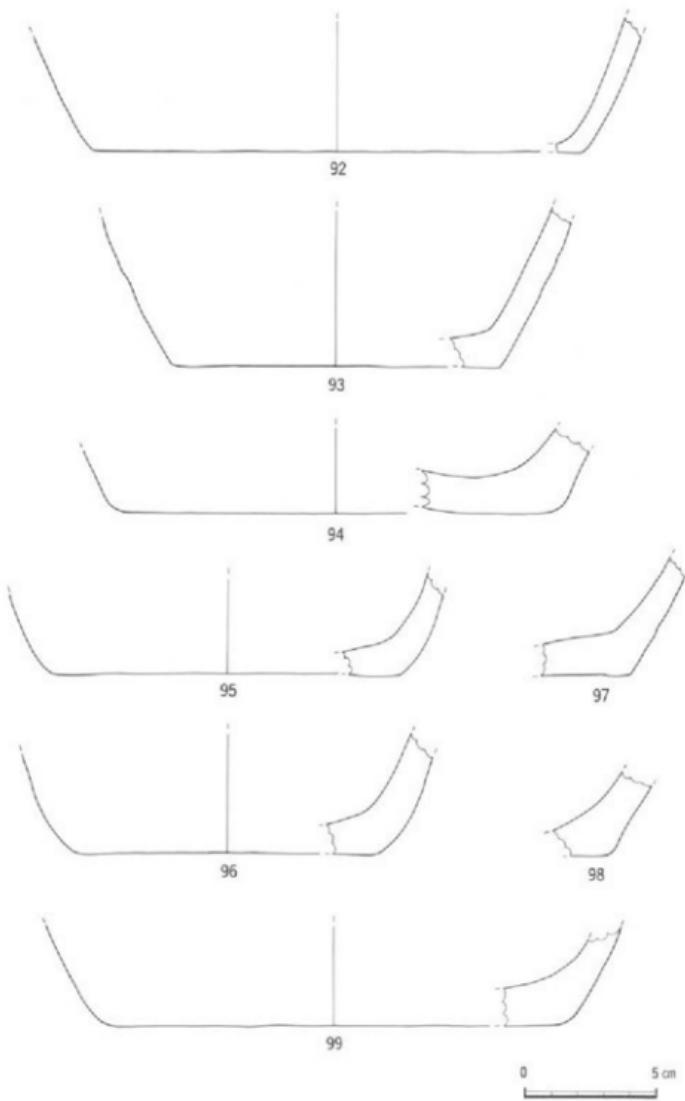
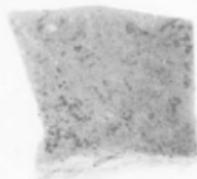
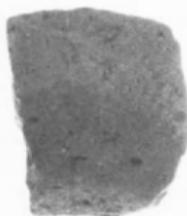


図43 土器底部



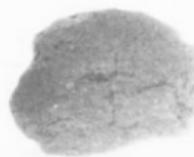
92



93



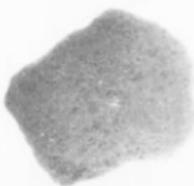
94



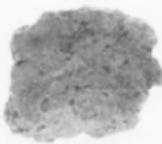
95



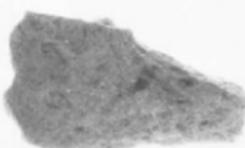
97



96



98



99

図版52 土器底部

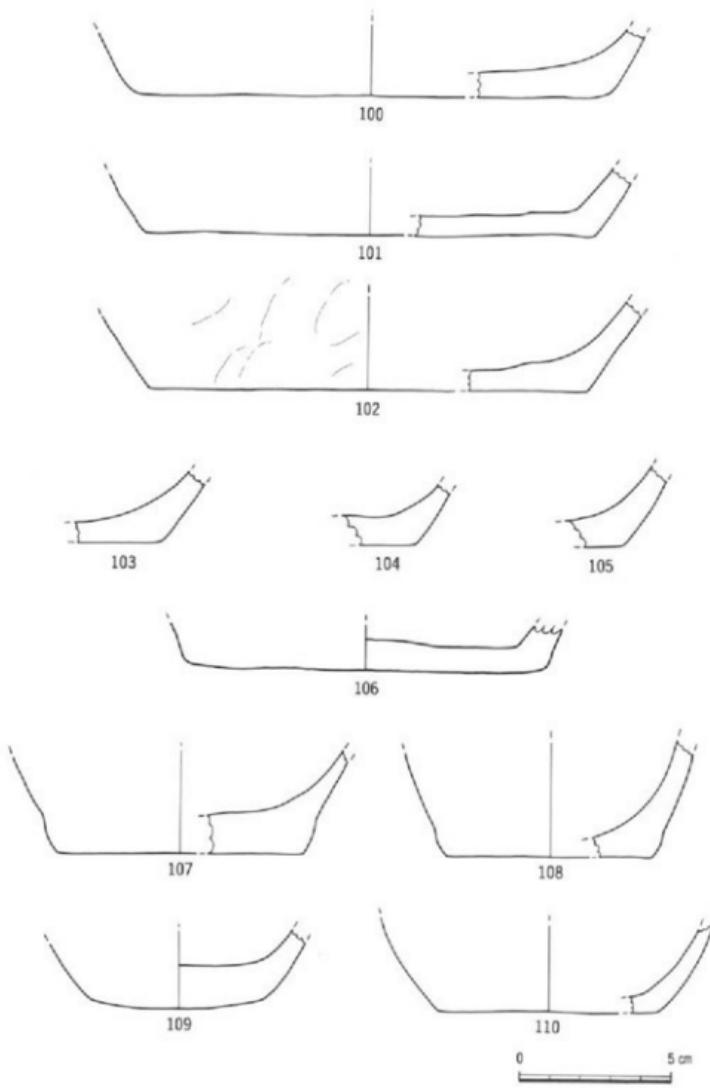
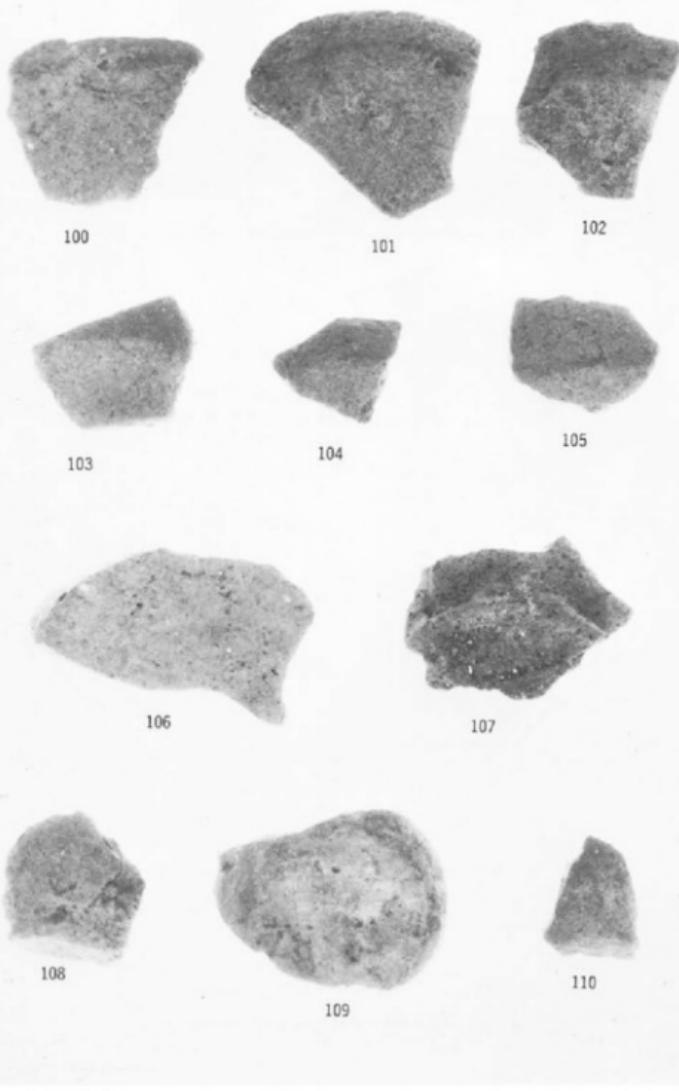


図44 土器底部



図版53 土器底部

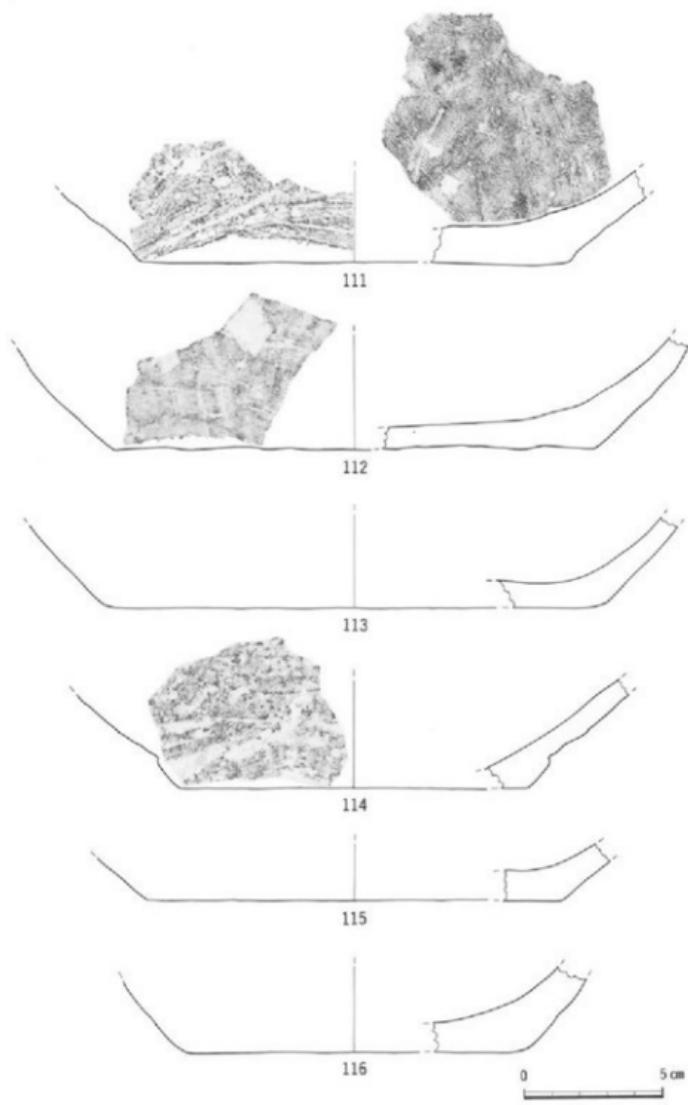
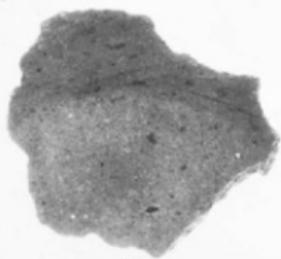


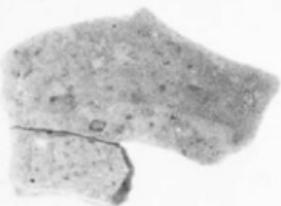
図45 土器底部



111



112



113



114



115



116

图版54 土器底部

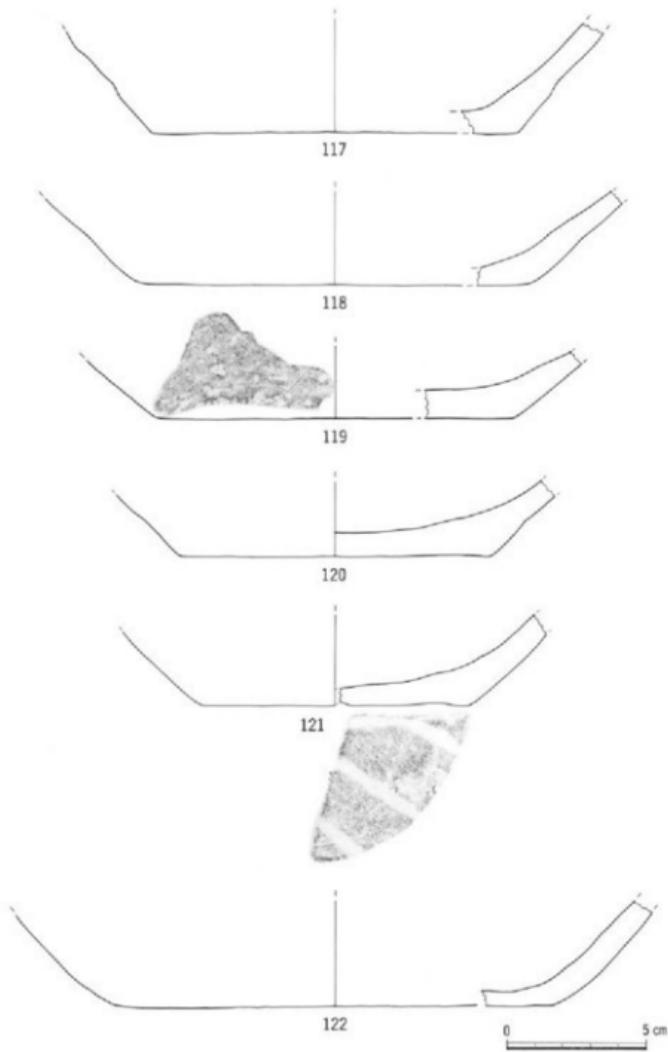
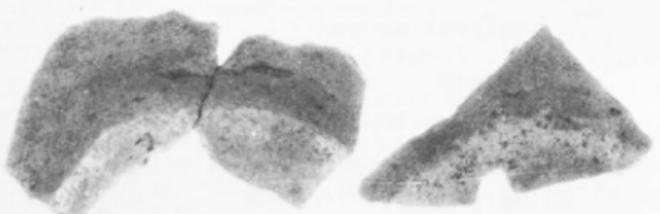
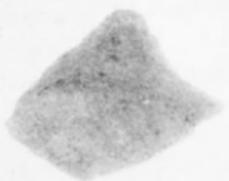


図46 土器底部

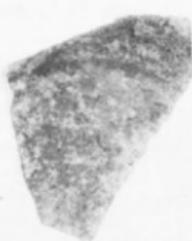


117

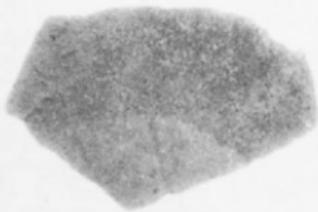
118



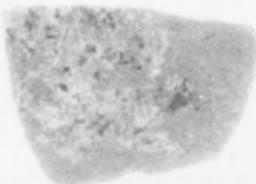
119



120



121



122

図版55 土器底部

標図 番号	遺物 番号	分類	底径	成形・調整等の特徴	胎土	混入物	焼成	色調	出土地区 出土地点	層
図	125	底部b	16.4	両面ともナデ。	泥質	石英	良好	赤褐色 黄褐色	イ地区	
	126	〃	7.1	両面とも籠ナデ。表面では混入物をひきずった痕がある。底面には葉の圧痕がある。	〃	石英	〃	赤褐色 灰褐色	ロ地区 B-17	I
47	127	〃	10.3	両面とも籠ナデ。底面に葉の圧痕がある。	〃	石英、微砂粒、 黒色鉱物	〃	褐色 茶褐色	イ地区 C-21	
	128	〃	8.8	両面ともナデ。表面はポーラス。	〃	砂粒	〃	茶褐色 黄灰色	ロ地区 D-20	I
図	129	〃	9.2	両面ともナデ。	砂質	石英、微砂粒、 黒色鉱物	〃	茶褐色	ロ地区 B-20	I
	130	〃	11.0	両面ともナデ。器面はポーラス。	泥質	石英、砂粒。	〃	茶褐色 橙褐色	イ地区	
48	131	〃	7.8	表面は刷毛目仕上げ。裏面はナデ。	〃	石英、黒色鉱物	〃	黒褐色 褐色	ロ地区 搅乱	
	132	〃	13.0	両面ともナデ。	〃	〃	〃	茶褐色 灰褐色	ロ地区 搅乱	
図	133	〃	15.6	表面は窪削り。立ち上がり部は削りが深い。裏面はナデ。	砂質	石英、微砂粒、 黒色鉱物	〃	黒褐色 灰白色	イ地区 H-22	
	134	〃	20.0	両面ともナデ。	〃	石英、微砂粒、 黒色鉱物	普通	赤褐色 黄褐色	イ地区 I-22	I
49	135	〃	11.4	両面とも籠ナデ。	泥質	石英、微砂粒、 黒色鉱物	〃	茶褐色	ロ地区 B-17	I
	136	〃	12.0	表面は籠ナデ。裏面はナデ。	〃	石英、砂粒	〃	褐色	イ地区 黑褐色土B	
49	137	〃	8.0	表面の底面と立ち上がり部は窪削り。	〃	石英、微砂粒、 黒色鉱物	〃	褐色	ロ地区 I-20	I
	138	〃	11.2	両面ともナデ。	砂質	石英、微砂粒、 黒色鉱物	〃	灰褐色 褐色	ロ地区 B-20	I
49	139	〃	7.2	底面は摩滅しているため不明。 裏面はナデ。	〃	石英、微砂粒、黒色鉱物、赤色粒	良好	赤褐色 褐色	ロ地区 C-21	
	140	〃	5.7	底面は摩滅して不明。裏面はナデによって丁寧に仕上げる。底面に葉の圧痕がある。	泥質	石英、微砂粒、 黒色鉱物	〃	褐色 茶褐色	イ地区 黑褐色土B	

捕獲番号	遺物番号	分類	底径	成形・調整等の特徴	胎土	混入物	焼成	色調	出土地区 出土地点	層
団	141	底部b	7.6	立ち上がり部と底面に窓削りを施す。裏面はナデ。	泥質	石英、黒色鉱物	良好	茶褐色	イ地区 あ-23	I
	142	〃	7.8	立ち上がり部は窓削り。裏面はナデ。	〃	〃	〃	灰褐色 黄褐色	ロ地区 B-20	I
団	143	〃	18.9	立ち上がり部は窓削り。刷毛目仕上げ。	砂質	石英、微砂粒、 黒色鉱物	〃	赤褐色	ロ地区 B・C-21	
	144	〃	16.2	両面ともナデ。	〃	〃	〃	茶褐色 灰褐色	イ地区	
団	145	ク	8.5	表面は立ち上がり部から胴部まで窓削り。裏面は窓ナデ。	〃	石英、微砂粒、 黒色鉱物	〃	茶褐色	イ地区	
	146	〃	12.5	立ち上がり部は窓削り。他はナデ。	泥質	石英、黒色鉱物	〃	褐色 黄褐色	イ地区 黑褐色土B	
50	147	底部c	14.0	立ち上がり部から胴部まで窓削り。裏面はナデ。	〃	石英、黒色鉱物	〃	灰褐色 黄褐色	ロ地区 B-20	I
	148	〃	12.0	立ち上がり部は窓削りもしくは窓みがき。裏面は刷毛目仕上げ。	〃	〃	〃	茶褐色 黄褐色	ロ地区 A-19	
団	149	〃	12.0	立ち上がり部は窓みがき。裏面は不明。	砂質	石英、微砂粒、 黒色鉱物	〃	灰褐色 茶褐色	イ地区 G-22	I
	150	〃	13.5	立ち上がり部と底面の一部に窓削りを施す。裏面はナデ。器面はボーラス。	泥質	砂粒、石英	〃	褐色 黄褐色	イ地区 黑褐色土B	
団	151	〃	8.9	両面ともナデ。	砂質	石英、微砂粒、 黒色鉱物	〃	赤褐色 茶褐色	ロ地区 B-17	I
	152	〃	10.2	両面ともナデ。	〃	石英、微砂粒、 黒色鉱物	〃	灰褐色 褐色	ロ地区 B-18	I
51	153	〃	〃	器面はボーラス。	泥質	石英、砂粒	〃	黒褐色 褐色	イ地区 黑褐色土A	
	154	ク	〃	両面ともナデ。	〃	石英、黒色鉱物	〃	黒褐色 黄褐色	イ地区 C-21	
51	155	不 明	11.5	表面はナデ。裏面は壁面が剥離しているため不明。底面に葉の圧痕がある。	〃	石英、微砂粒	〃	赤褐色	イ地区 黑褐色土B	
	156	〃	6.5	両面ともナデ。	砂質	石英、微砂粒、 黒色鉱物	〃	茶褐色 灰褐色	ロ地区 B-16・17	I
	157	〃	10.1	立ち上がり部は窓ナデ。裏面はナデ。底面に葉の圧痕がある。	泥質	石英、黒色鉱物、 赤色粒	〃	茶褐色	ロ地区 B-20	I

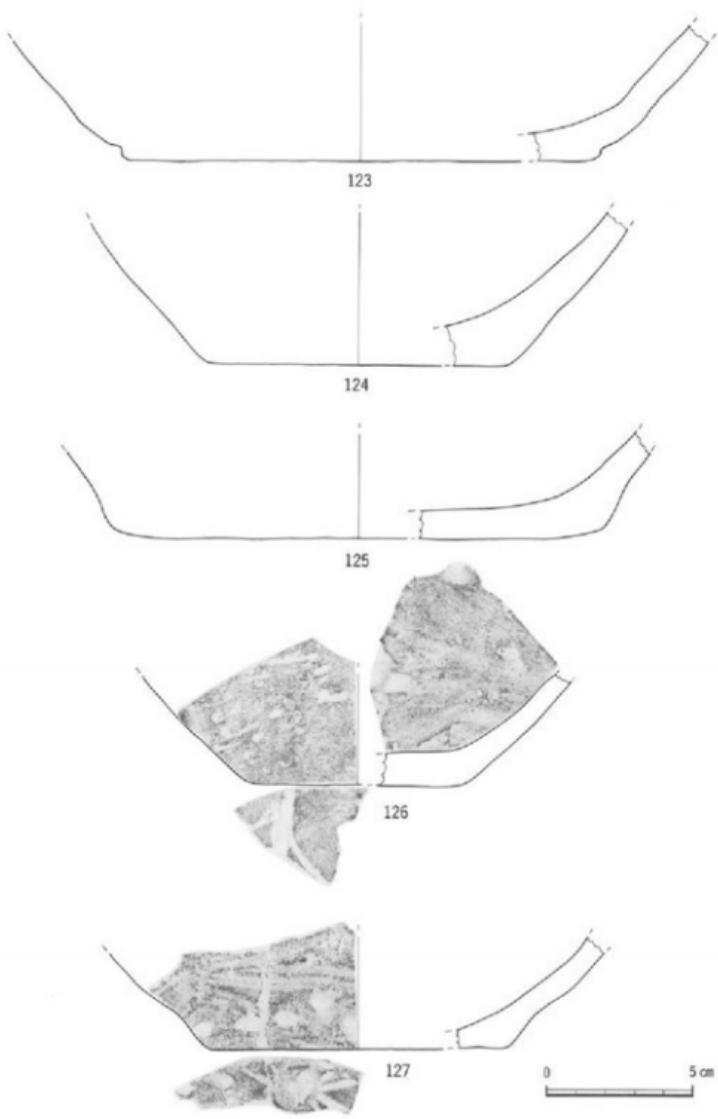
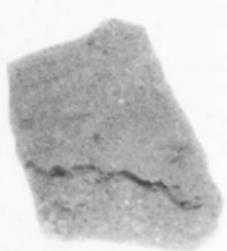
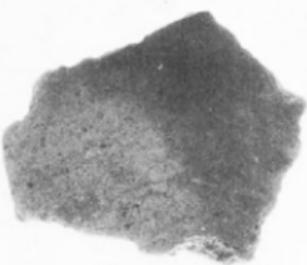


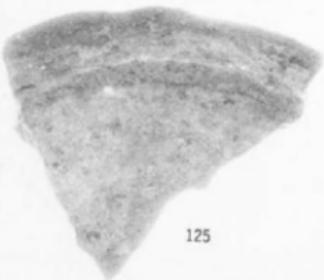
図47 土器底部



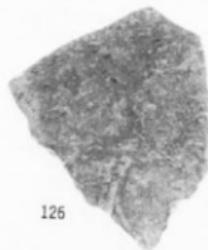
123



124



125



126



127

图版56 土器底部

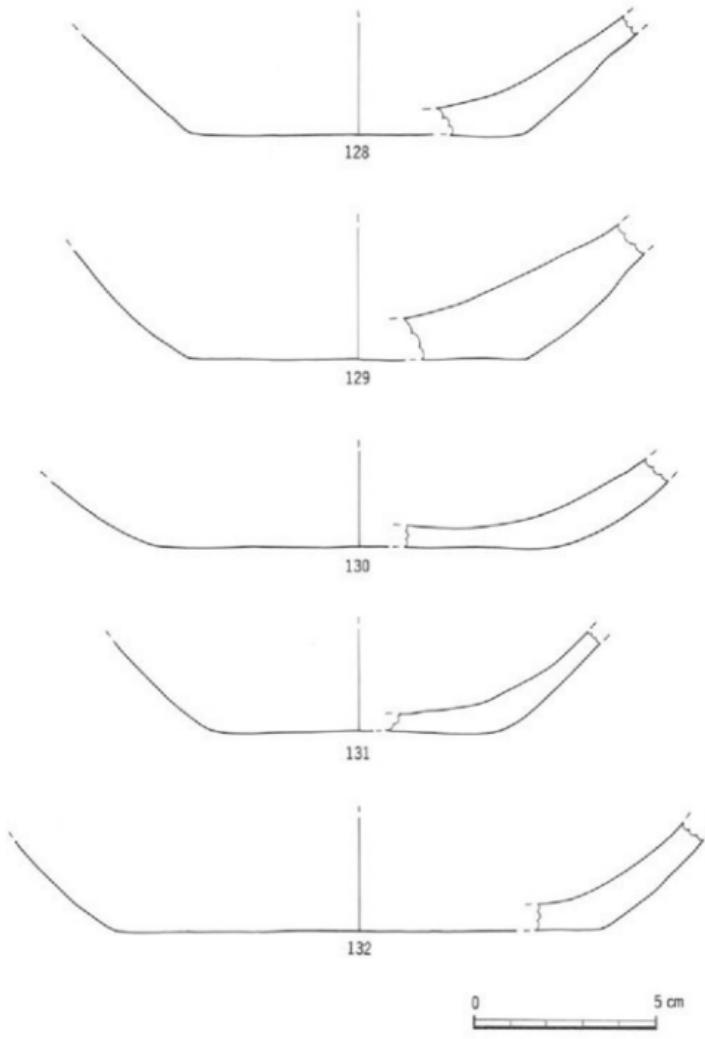
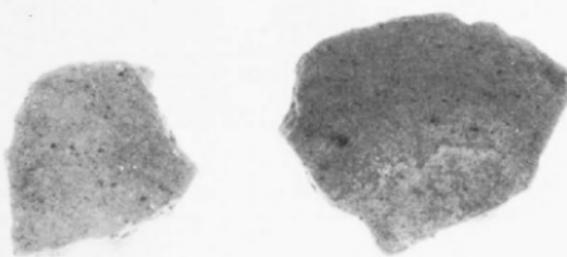
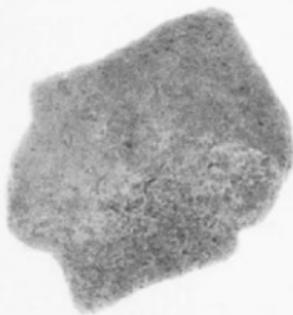


図48 土器底部



128

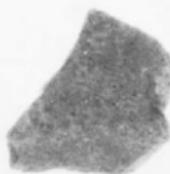
129



130



131



132

図版57 土器底部

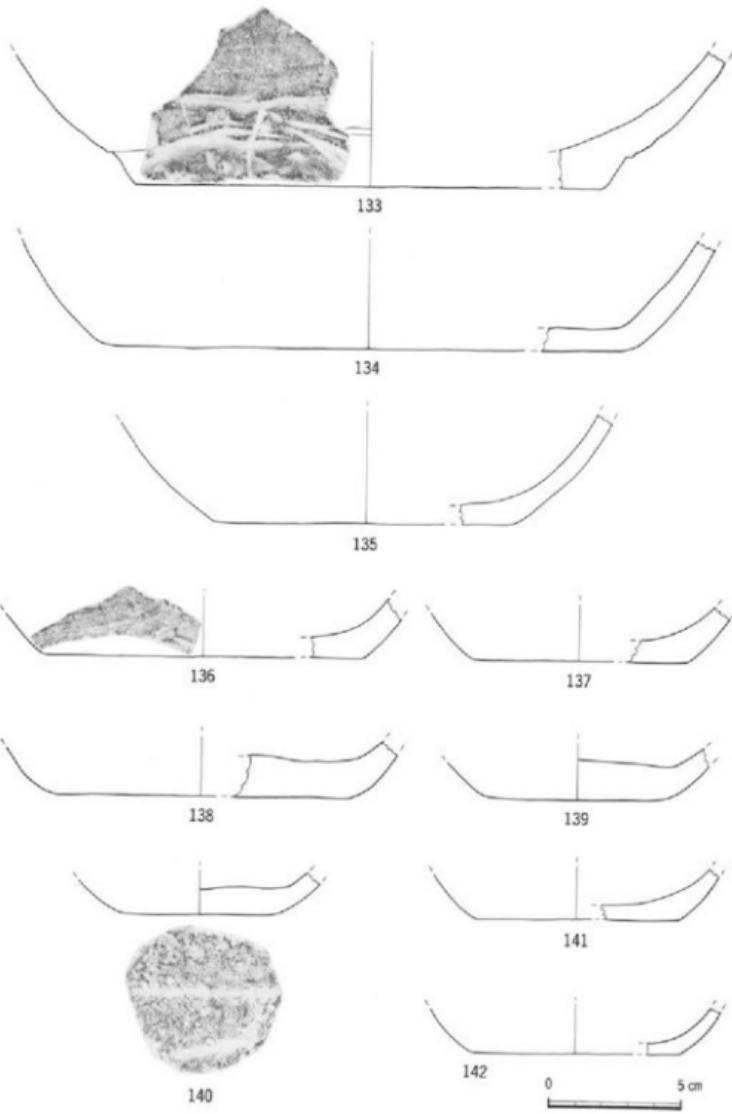
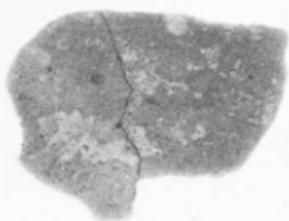


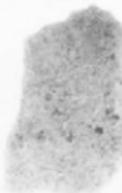
図49 土器底部



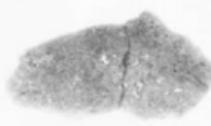
133



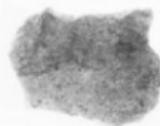
134



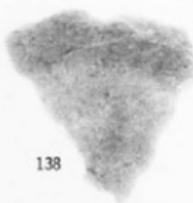
135



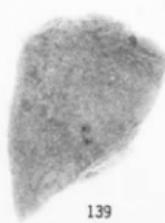
136



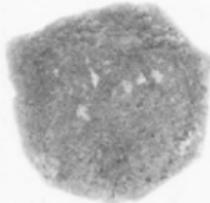
137



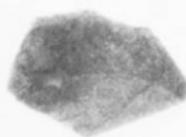
138



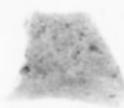
139



140



141



142

図版58 土器底部

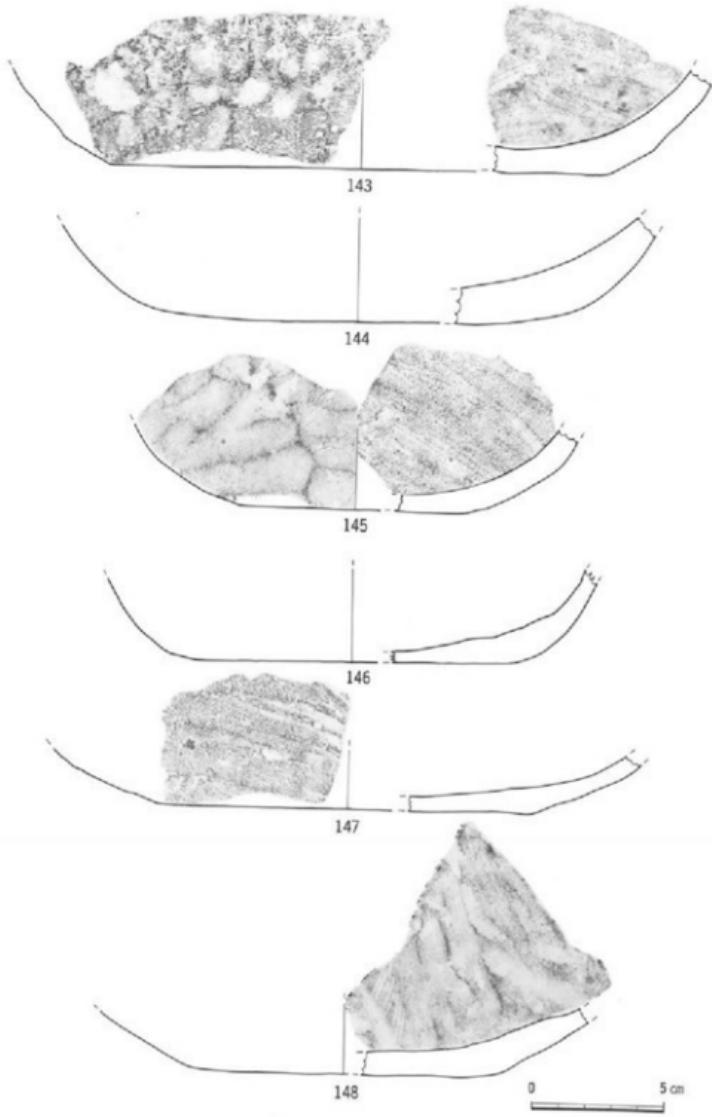
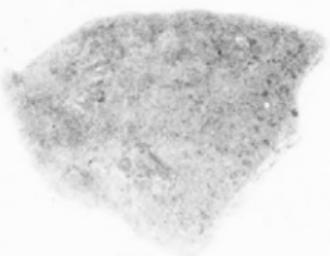
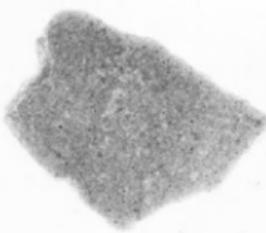


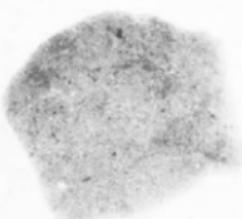
図50 土器底部



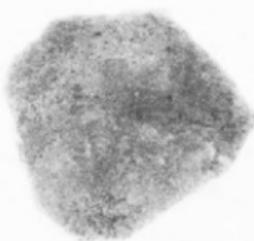
143



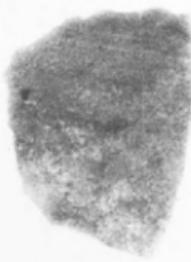
144



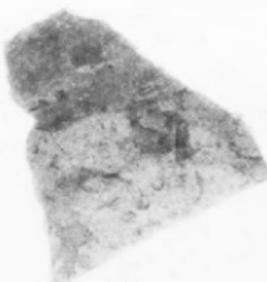
145



146



147



148

図版59 土器底部

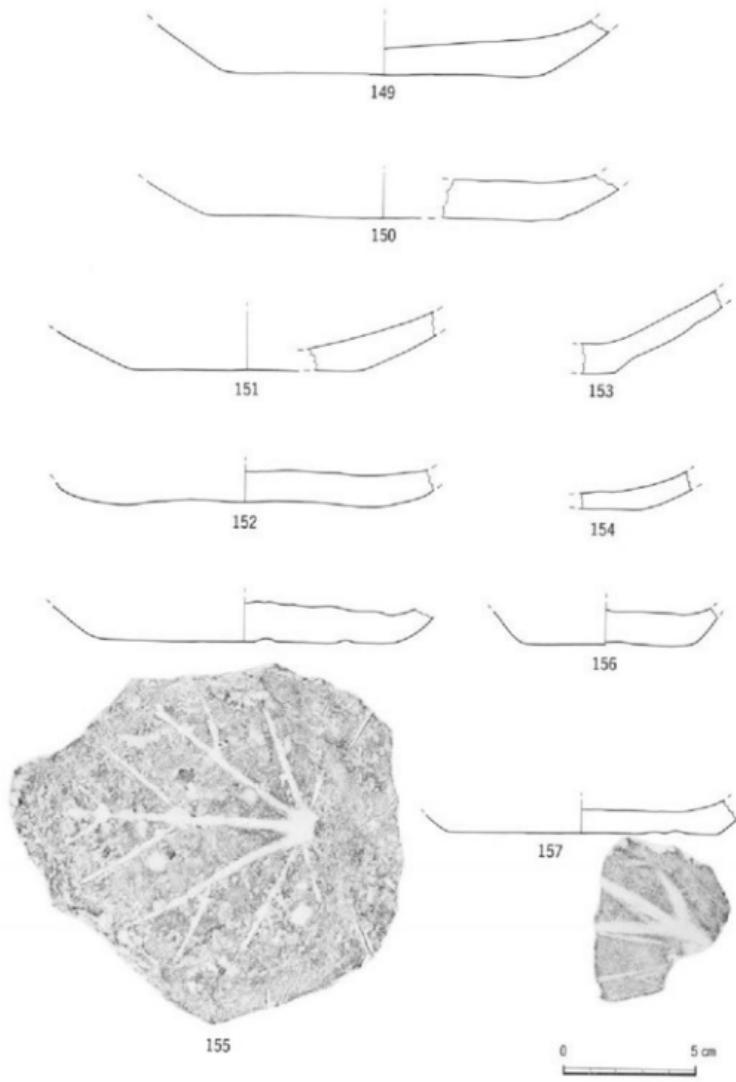
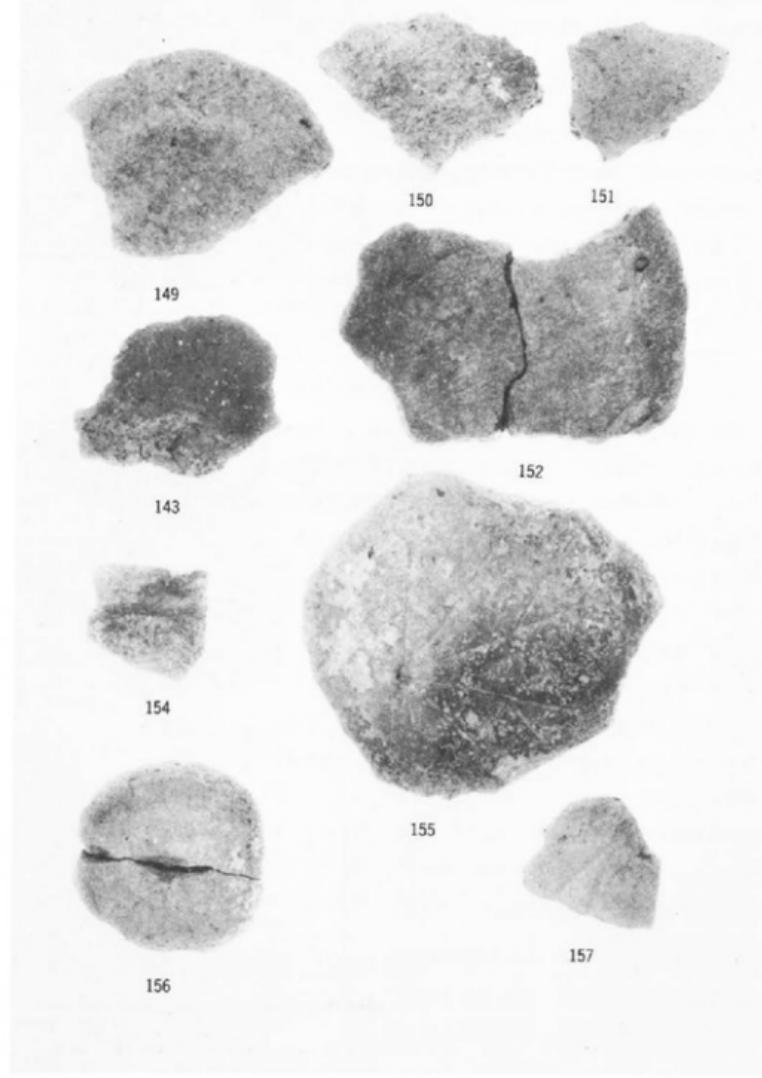


図51 土器底部



图版60 土器底部

(7) 貝製品

貝製品と考えられるものは19点で、これらは形態的に分類し、一応記述のために実用品を装飾品、その他に分けた。出土状況をみると実用品14点、装飾品3点、その他2点で、地区別には、イ地区9点、ロ地区8点、表探2点である。

a. 実用品

① 卷貝製匙 (図52 図版62)

ゴホウラの体層を用いたものであるが、明確な加工痕はない。最大長6.3cm、幅3.0cm、重さ14.7gを計る。ロ地区20g^{注1}リッド土層の出土である。未製品と考えられるが、キガ浜貝塚^{注2}、伊武部貝塚^{注3}、百名第二貝塚等の貝塚時代前期の遺跡で出土しているのでここで報告しておく。

② 二枚貝有孔製品 (貝錘) (図55 図版61)

二枚貝の殻頂及びその近くに粗孔を有するもので網の錘あるいはその他の用途 (装飾品) とする説が与えられている。二枚貝の粗孔は殻頂及びその近くは貝の成長線が集中して割れやすくなっているため、自然 (食用、発掘時) に穿孔される場合も少なくない。そのため、ここでは下記の項目のどれかを満たすものを製品として扱った。

1. 孔に数回の打削調整を有すること
2. 孔が複孔であること
3. 復縁に調整痕 (あるいは使用痕) があること

これによると、本遺跡ではリュウキュウサルボウ10点、カワラガイ、ハイガイ、ナガザルガイがそれぞれ1点ずつの計13点が得られた。

図53に殻高と重量の分布を示した。これによる
とリュウキュウサルボウは10~30g間に分布し、
平均20.7gである。他の貝種は10g以下である。
日本品は漁網錘とするならば、熊本県洗切遺跡の
土錘の重量分布を参考にした場合、10~30g台の
グループと10g以下のグループに分けられ、前述の遺跡の「中」と「小」に分類が可能と考える。

表11 貝製品出土状況

製品	実用品					合計
	貝	二枚貝	粗孔製品	貝	その他	
匙	リュウキュウサルボウ	ハイガイ	カワラガイ	ナガザルガイ	1	14
出土地	I	1	1	1	1	4
イ地区	不	3	1		1	5
ロ地区	I	6		1	1	8
表探	1				1	2
合計	1	10	1	1	3	19

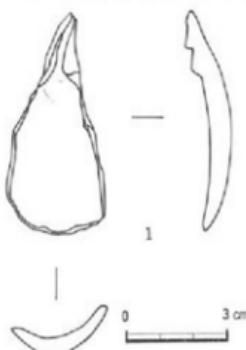


図52 貝匙

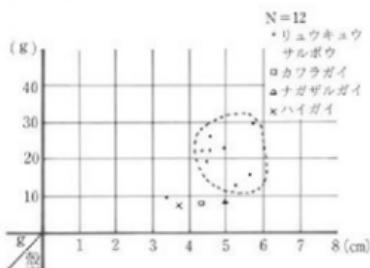


図53 殻高・重量の分布

(注・完形のみ。但し、ナガザルガイ、カワラガイは若干破損している。)

表12 二枚貝有孔製品（貝錘）出土一覧

単位：mm、g

No.	地区	グリッド	層	貝種	完破	R/L	法量		孔徑		孔の状況			備考	図番号	
							殻高	殻長	重量	たて	よこ	形状	位置	穿孔		
1	イ	-	I	ハイガイ	完		31.0	38.0	8.3	9.8	12.8	a < b	殻頂	内	×	55-16
2	ロ	B-22	-	リュウキュウサルボウ	破	L	57.0	69.0	15.5	12.3	13.3	a = b	外	外	若干風化切味	8-13
3	ロ	T-22	I	タガ	破	R	50.0	62.0	23.5	8.4	13.9	a < b	外	前・後	前背縫に自然の剥離	8-7
4	ロ	10 東	-	タガ	破	R	44.0	70.0	22.0	14.4	19.0	不定形	外	外	孔は自然の感を受ける。	8-8
5	ロ	11 西	-	タガ	破	L	54.0	59.0	12.5	9.2	15.8	a < b	外	後	孔の周縁も風化	8-6
6	ロ	11 -	-	ナガザルガイ	破	R	50.0	-	8.6	6.0	7.0	方形	上・中	内	不明 半欠	8-17
7	ロ	A-20 I	カワラガイ	破	L	-	42.0	8.3	4.8	3.4	a < b	殻頂	前・中		8-15	
8	ロ	A-20 I	リュウキュウサルボウ	完	R	58.0	66.0	0.29.0	22.2	24.0	不定形	中・中	外	×	孔は自然	8-9
9	ロ	B-17 I	タガ	破	L	46.0	-	26.1	14.8	18.4	z	殻頂	全縫	殻縫の前は自然？	8-5	
10	ロ	B-18 I	タガ	完	R	45.0	60.0	19.2	8.2	7.2	a < b	上・後	後		8-10	
11	ロ	B-20 I	タガ	破	R	46.0	-	22.7	7.2	14.0	a > b	殻頂	外	孔は風化によるもの	8-12	
12	ロ	B-20 I	タガ	完	L	34.0	49.0	9.5	5.4	9.6	不定形	外	×		8-14	
13	ロ	20 I	タガ	完	R	44.0	69.0	27.2	7.6	12.4	z	殻頂	外	若干アバタあり	8-11	

b. 装飾品

① ピード(図54 図版62)

一般にイモガイ科の螺塔を円盤状に切り取り、殻頂及び体層面を研磨調整し、平らにしたものであるが、本遺跡では3点得られた。3個ともマガキガイを用い、研磨調整は明瞭である。表13に観察事項を示した。同時期遺跡として勝連城跡本丸に報告例がある。^{註6}

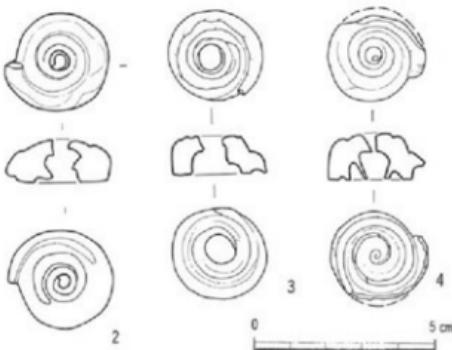


図54 ピード

表13 ピード観察表

単位：mm・g

No.	出土地		貝種	完破	殻径		厚さ	重量	孔径		備考	図番号
	地区	グリッド			長径	短径			長径	短径		
1	表 採	-	マガキガイ	完	27.0	26.0	11.0	9.8	4.3	-	体層及び殻頂に研磨痕	54-2
2	イ い - 23	I	タガ	破	26.2	24.6	10.5	5.3	6.7	5.7	風化切味	8-3
3	ロ I - 20	I	タガ	破	24.2	23.0	12.7	7.4	3.4	-	とくに体層の研磨顕著	8-4

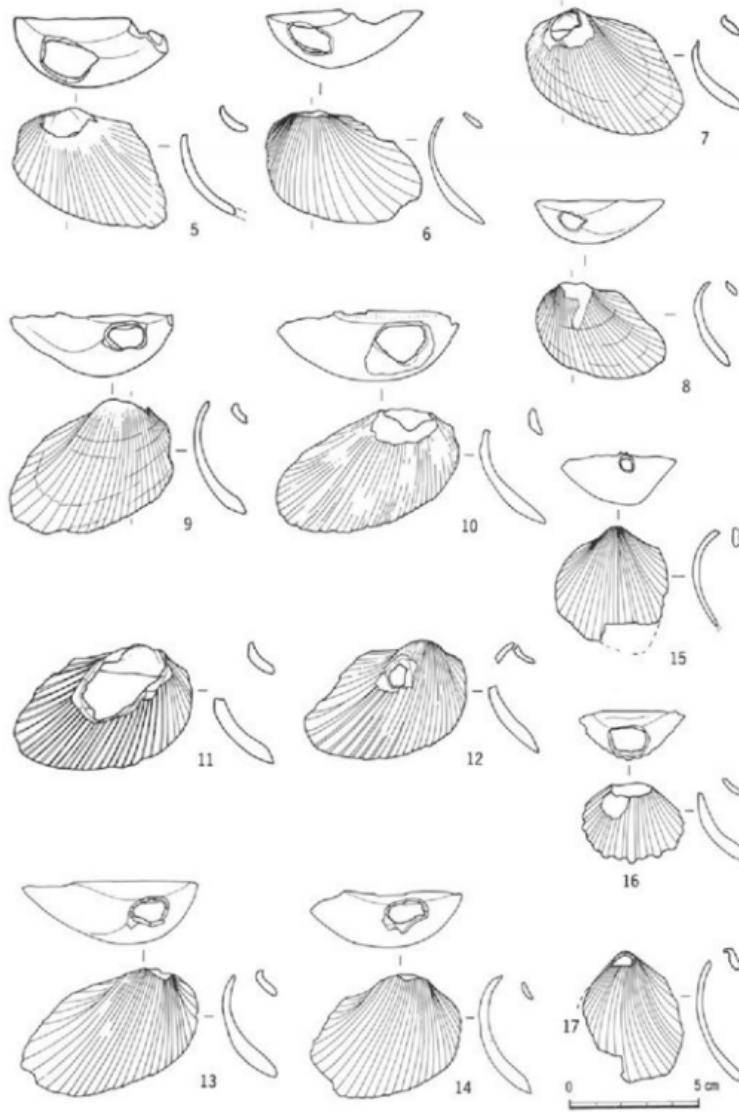
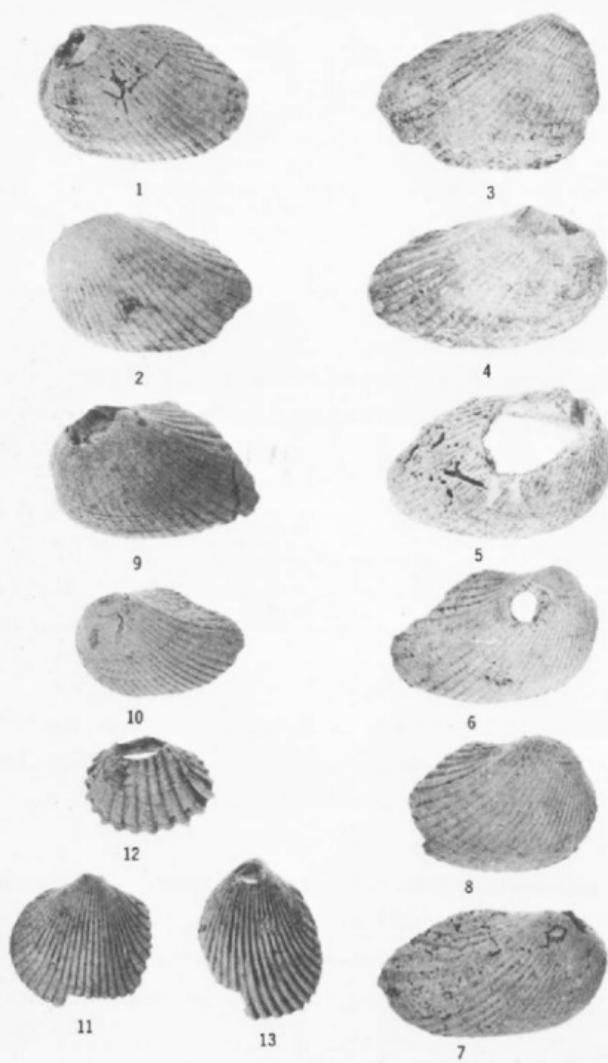


図55 二枚貝具孔製品（貝鍼）



図版61 二枚具有孔製品

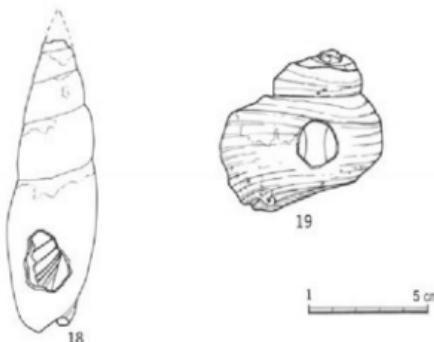


図56 卷貝有孔品

c. その他 (図56 図版62)

巻貝の外唇近くの体層に穿孔するもので製品かどうか、検討を要する資料である。チョウセイサザエの穿孔例はキガ浜貝塚でも数個みられた。チョウセンフデガイは前IV・V期から出土する製品とは穿孔の位置、方法が異なることから、食するために穿孔したと考えられる。

表14 卷貝有孔品観察表

No.	出 土 地		貝 種	完 成 度		法 量		孔 様		備 考	図番号			
	地区	グリッド		殻径	殻長	重量	長径	短径						
1	イ	あ - 22	I	6.2	6.2	80.8	16.5	15.5	体層に穿孔、風化し真珠層が露出	56-19				
2	イ	10 東		3.5	12.0	80.1	22.8	17.2	外唇側の体層に穿孔	〃-18				

小 結

以上、貝製品について記述した。製品の出土量が少ないので、この時期の特徴である。二枚貝有孔製品（貝鍤）については、漁網鍤とした場合、対象物とする魚骨は少なく、海岸からかなり離れていることから、問題も残り、今後の資料の追加を俟って検討していきたい。

註

註1. 沖縄県教育委員会 「津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書」『沖縄県文化財調査報告書第17集』

1978年月

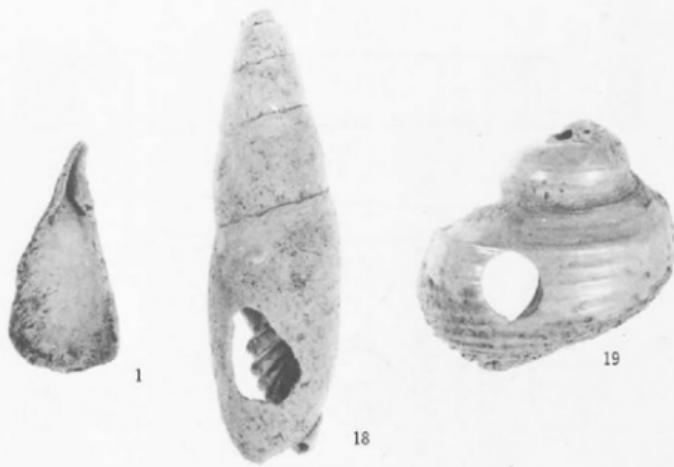
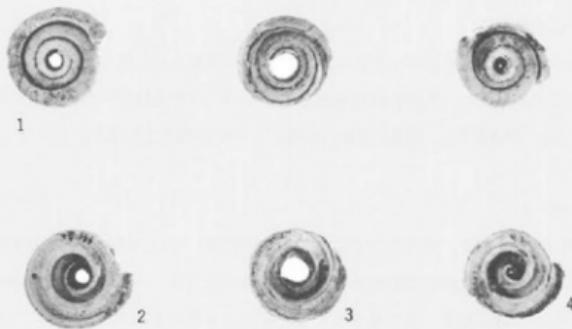
註2. 沖縄県教育委員会 「伊武部貝塚発掘調査報告書」『沖縄県文化財調査報告書第51集』1983年3月

註3. 沖縄県教育委員会 「沖縄県玉城村百名第二貝塚の試掘調査」『沖縄県文化財調査報告書第38集』

1981年3月

註4. 洗切遺跡調査団 「洗切遺跡調査報告」 1982年 熊本県

註5. 勝連町教育委員会 「勝連城跡」『勝連町の文化財第5集』 1983年3月沖縄県



図版62 貝製品（上：ビード、下：貝匙及びその他）

(8) 骨製品 (図57、図版63)

ア. おはじき状製品

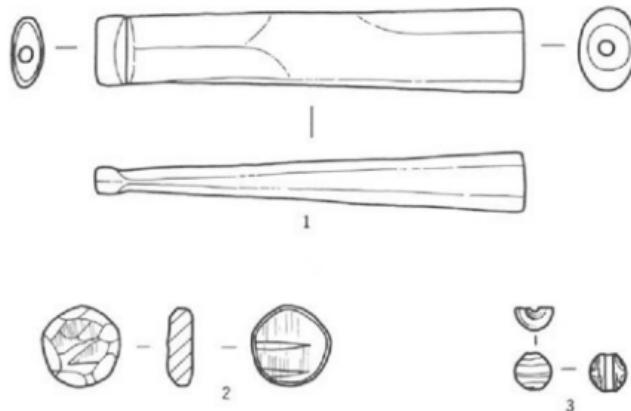
1は海獣類の骨を利用しておはじき状に加工したものである。上面は丸く、底面は平坦に仕上げる。刃物によって削り、その後研磨を施しているが、刃物痕は深いため完全には消えていない。直径1.4cm、厚さ4.5mm、重量1.0g。イ地区 9号黒褐色土の出土。

イ. 煙管

2はキセルの吸口である。完形品であるが、単独で使用したのか羅字と雁首を接続して使用したのかは不明である。横断面は先端部で梢円形、吸口側ではレンズ状になる。縦断面で見ると先端部から吸口へ薄くなり、端で段をつくる。穿孔は非常に精巧で、全体的に丁寧に研磨を施す。鯨骨を利用している。長さ7.6cm、最大幅1.4cm、最大厚1.0cm、重量8.1g。イ地区 I-22 I層出土。沖縄に煙草が入ってきたのは後のことで、本遺跡の時期とは一致しない。

(9) 玉 (図57、図版63)

3は半分程度が欠損している。人造ガラス製で螺旋状の筋が明瞭である。青色を呈する。径0.6cm、高さ0.6cm、孔径0.2cm、重量200mg。ロ地区 B-20 I層出土。



第57図 骨製品・玉

(原寸)



1



2



3



1 a



2 a



3 a

図版63 骨製品・玉 上：表 下：裏

10 石 器

石器は、完形、小破片も含めて17点出土した。それらのうち器種の判明するものは、くぼみ石、砥石、たたき石の3種である。完形や欠損の少ないもの14点を図58～60に示した。なお、個々の石器について出土地点、法量、石質、特徴等は石器観察一覧に記述した。以下、概略を述べる。なお、本遺跡の石器はすべてI層からの出土である。

(a) くぼみ石

4点出土した。本遺跡から出土したくぼみ石は、次の特徴がみられる。①くぼみを両面に持つものと片面のみに持つもの。②くぼみ石に使用されている石質において、硬質のもの及び硬砂岩で製作したものと、俗にニービと呼ばれる軟質の砂岩を使用したもの。これらの要素を組み合わせると、くぼみ石について何らかの分類が可能かと思われる。しかし、4点のみの出土では確定なものがない。又、目的に応じた礫の選択という事についてもまだ検討の余地があるようと思われる。ここでは以上のような特徴がみられたことのみ記しておく。

(b) 砥 石

図59の5点は砥石として扱ったものである。図59の1は、出土した他の砥石と異なった性質を持つように思われる。形態からすると、知花遺跡群、稻福遺跡、今帰仁城跡などから出土している石製品や護符などに類似する。用途を同じくしながらも目的の違う磨刀石と呼ぶ見解もある。図59の2と4は同じ石質で2点とも完形品ではない。全体の形状は不明であるが残った破片をみると形態的に同じもののように推測される。

(c) たたき石

3点の出土である。完形のものではなく、欠損したものをみる限り3点とも形態に統一性がない。図60の2は磨り石とたたき石の両方の用途に利用している。欠損した後、さらに側面に研磨を施してあることからもそのことが窺える。図60の1と3は、自然礫をそのままの状態で使用したもののようにある。

(d) 不 明

不明として扱ったものは5点である。本遺跡出土の石器は、くぼみ石、砥石、たたき石の3種であるが、そのどれにも含まれない。使用痕についても確定的なものはない為、不明とした。

表15 石質別形態一覧

器種 石質	くぼみ石	砥石	たたき石	不明	計
緑色片岩	1		1		2
安山岩			1		1
玢岩		2			2
頁岩		1			1
硬砂岩	1		1	3	5
砂岩 (ニービ)	2	2		2	6
計	4	5	3	5	17

表16 石質における产地一覧

产地 石質	名護層	嘉陽・ 名護層	島尻層	久米島 産	計
緑色片岩	2				2
安山岩				1	1
玢岩		2			2
頁岩		1			1
硬砂岩		5			5
砂岩 (ニービ)		1	5		6
計	2	9	5	1	17

表17 石器観察一覧

器種	挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	法 量				石質	観 察 事 項
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)		
く ぼ み 石	58-1 64-1	表面探集	9.5	9.3	5.7	825	緑色片岩	大きさのわりに重量感がある。形態は円形を呈し、両面からくぼみが施されている。くぼみの深さは両者同様ではなく、片面が特に深い。器面は細かい調整痕や打欠痕であばた状の面を呈す。
	58-2 64-2	口地区 F-20 I層	9.7	7.7	6.7	580	硬砂岩	半分程欠損しており、裏面の状態は不明。表面のくぼみは深く、側面に研磨痕や潰れの痕が多くみられる。
	58-3 64-3	口地区 D-20 I層	10.2	9.2	5.0	640	砂岩 (ニービ)	くぼみは表面の片側のみ施されている。 裏面は自然面を呈す。 石質は図60-1・2のくぼみが堅固であるのに対し、このくぼみ石は砂岩製の軟らかい石を用いている。
	58-4 64-4	口地区 B-20 I層	12.8	9.1	5.1	670	砂岩 (ニービ)	このくぼみ石は調整や研磨で形を整えたものではない。砂岩製の自然石をそのまま利用してくぼみを加えたものである。 くぼみは両面に施されているが、裏面よりも表面のくぼみが深く、より明確である。

器種	挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	法 量				石質	観 察 事 項
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)		
磁	59-1 65-1	口地区 D-18 I層	4.3	2.9	0.3		頁岩	一見すると石製品のようにもみられるが、一種の磁石的なものと思われる。 厚みもなく、スレート状に薄い。 表面には稜線がみられ、細かい擦痕が観察できる。裏面にも幾つもの擦痕が走っており、明確である。
	59-2 65-2	イ地区 F-22 I層	6.8	4.7	3.8	110	玢岩	磁石の破片であるが表裏面、両側面ともに使用痕がはっきりしている。 基部の上下端が折れしており、長さがどの程度あったのかわからない。
	59-3 65-3	出土地区 不明	9.7	5.5	6.7	360	砂岩 (ニーピ)	中央部あたりと思われる箇所に浅くなだらかな面が施されている。 破片なので、完形の場合の大きさや形態が推定できない。
	59-4 65-4	口地区 B-16 I層	4.5	4.4	2.9	60	玢岩	小型の磁石で表裏面、両側面に反った面や稜線などの使用痕がみられる。 裏面には打割がいくつかみられ、上下端は折れしており、長さの判断がつかない。
	59-5 65-5	口地区 C-20 I層	9.5	12.9	3.9	655	砂岩 (ニーピ)	形態的には上部が欠損している為、わかりにくい。 表面は全体的に研磨されており、浅く反りかえっている。置き磁石の一種であろうか。 側面、両面とも自然面を呈す。砂岩製である。
	60-1 66-1	口地区 D-20	10.0	12.7	6.1	1,230	安山岩	かなり大きな石器で重量も 1 kg をこえている。 上部半分は折れて欠損している。 側面と下端部にはかなりはっきりした打痕がうかがえる。

器種	挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	法 量				石質	観 察 事 項
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)		
た た き 石	60-2	口地区 C-20 I層					緑色 片 岩	硬質の石器で破損している。 表面は石質の硬いこともあり、光沢のある研磨が施されている。 中央部に潰れがかすかにみられる。 横側面と左側面に研磨がみられるが、打欠した後、さらに研磨を加えたものであろう。
	66-2		6.2	9.8	7.3	755		
	60-3	口地区 B-20 I層	11.5	5.1	2.3	185	硬 砂 岩	右側面に擦られたようなくぼみが両側に2箇所みられる。 その他表裏面とも自然面を呈し、両端の打欠も使用痕かと思われる。
	66-3							
用 途 不 明	60-4	口地区 E-20 I層	15.3	13.2	5.2	1,260	砂岩 (ニーピ)	大きめのもので指を広げた手の大きさほどあり、重量感もある。 使用痕の有無で不明な点が多い為、用途不明とした。
	66-4							
	60-5	口地区 D-20 I層	11.3	17.6	6.0	1,445	砂岩 (ニーピ)	表面はなだらかで起伏がない。 磨られているようにもみられるが砂岩製の石質でもあり、使用痕を確認するには少々無理が生じる。 現在のところ用途不明に含めておく。
	66-5							
	なし	口地区 B-16	4.8	4.4	3.9	93	硬 砂 岩	4cm角の大きさで自然面を呈す。 破片があまりにも小さいので大きさや形態、又、石器になるのかどうか判断できない。
	なし	口地区 D-20 I層	8.0	7.6	2.3	215	硬 砂 岩	形態的には三角形を呈し、扁平。 上下端は欠損し、割れ面が新しい。 表裏面はなめらかで、ほとんど自然面を呈し使用痕がみられない。 石材の可能性が大きい。
	なし	口地区 B-16 I層	7.8	4.2	2.6	110	硬 砂 岩	長方形の柱状を呈し、横断面からみると四角形を呈す。 上下端は折れて欠損している。 表裏面とも自然面を呈し、使用痕がみられないでこれも石材に含めたい。

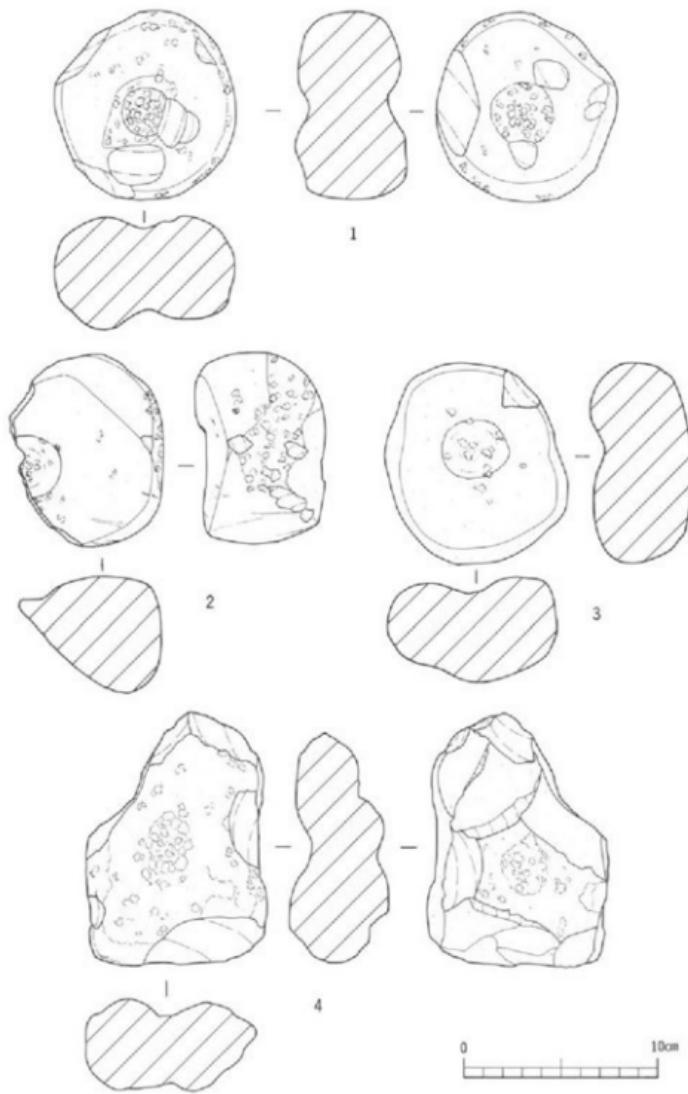


図58 石器 くぼみ石



図版64 石 器

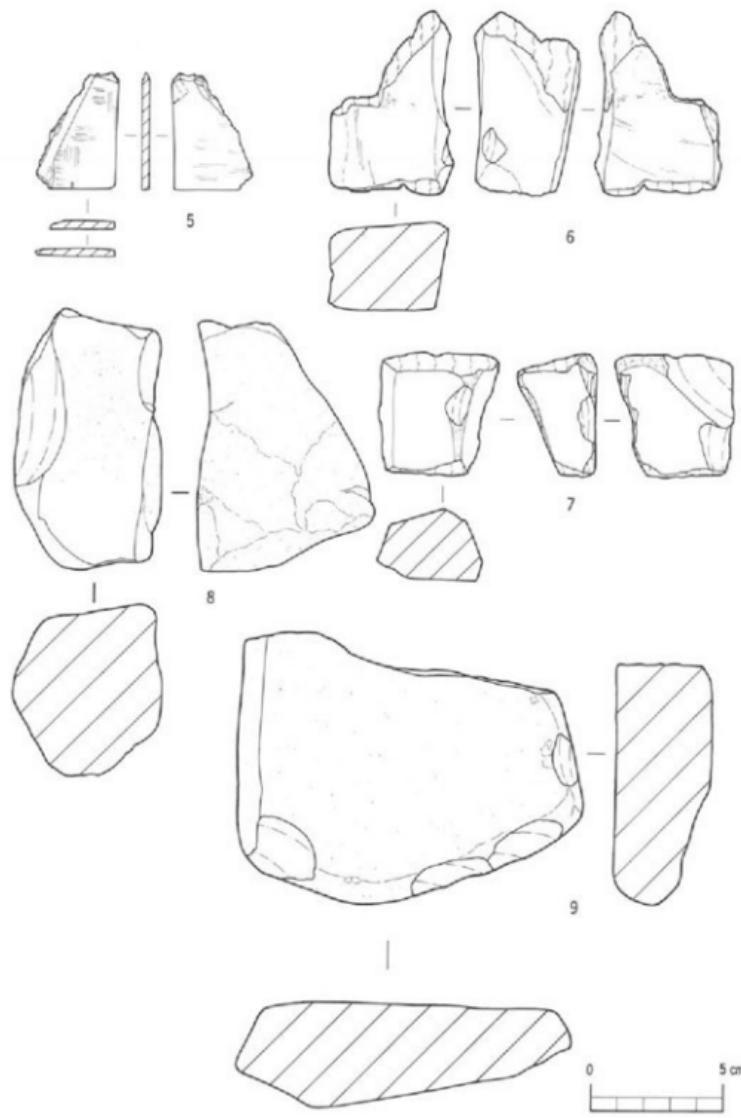


図59 石器 磚石



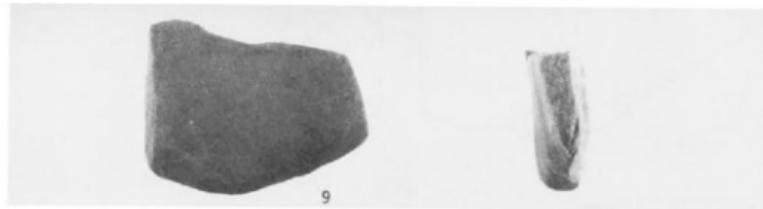
5

6



7

8



9

图版65 石 器

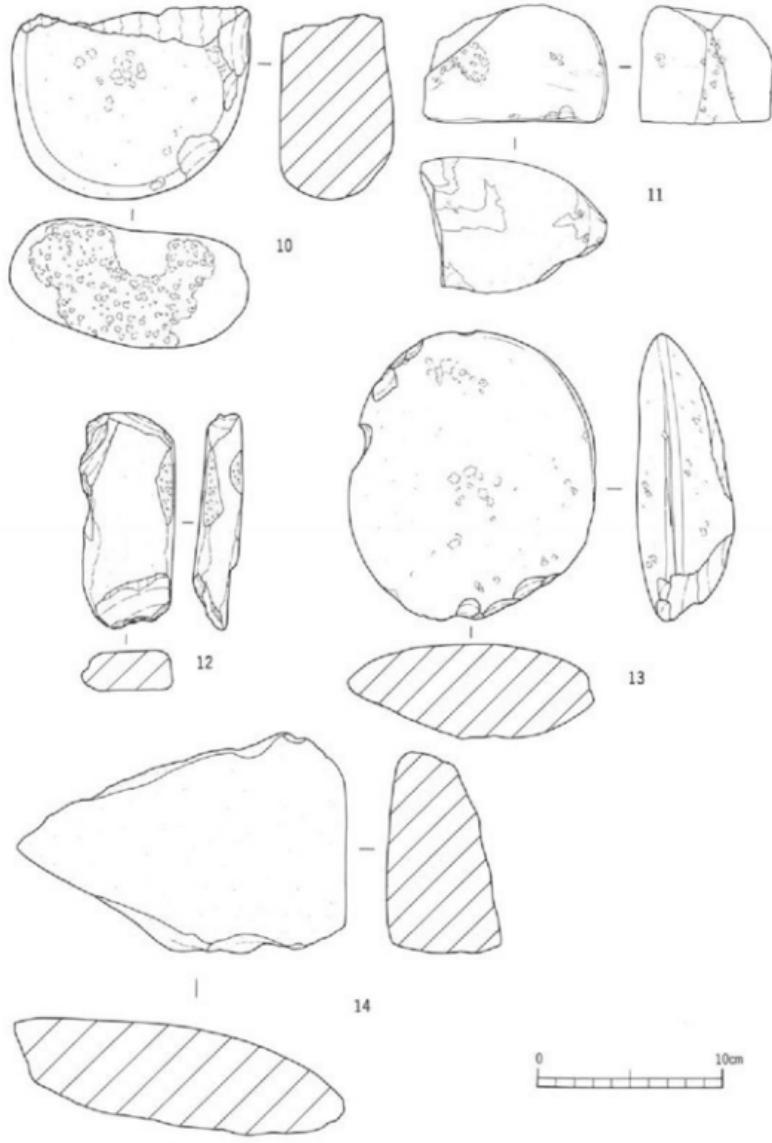
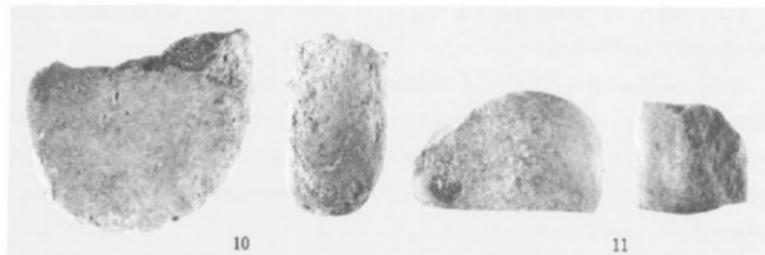


図60 石器 たたき石・不明

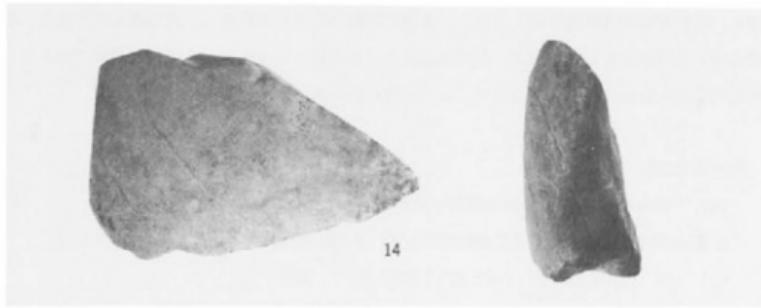


10

11

12

13



14

図版66 石 器

小 結

以上、石器について簡単に特徴を述べた。ここでは前述のまとめとして石器の産地及び石質について若干ふれてみたい。

本遺跡は丘陵地の斜面に立地し、その基盤は泥岩（クチャ）の上に琉球石灰岩がのるという地質構造を呈する。石質においては表15に示すように、綠色片岩、安山岩、玢岩、頁岩、砂岩などのが得られた。そのうち砂岩は質的な要素から硬砂岩（粗粒のもの）とニービと呼ばれる軟質の砂岩の2種がみられる。石器に使用されている石質の中では砂岩が最も多く11点の出土で硬砂岩が5点、ニービが6点の出土である。

表16は石質と出土産地についての構成である。そのほとんどが嘉陽・名護層に含まれている。ニービは、島尻層からの出土である。特に気がついた点は、久米島産の安山岩が1点出土していることである。図60の1のたたき石がそれである。同安山岩は神谷厚昭氏によると「沖縄本島のもの」と違い、その特徴や岩石中に含まれる鉱物などから一見して久米島産のものだと判断がつく」という事である。何故、本遺跡で久米島産の安山岩が出土したのか。沖縄本島北部の地層と慶良間諸島の地層は地質的にみて同一のものだといわれている。本遺跡は本島のほぼ中央部あたりに位置するが、嘉陽・名護層というのは読谷から金武を結ぶ線上と天願、嘉手納、砂辺あたりの地域にもみられるという。又、ニービが採集される島尻層も遺跡近くに分布している。はたして北部まで足を運んで石材を確保することもなく、先に述べた遺跡に近い周辺地域あたりで採取されたものかもしれない。

本遺跡はグスク時代の遺跡かと思われるが、石器の器種においては石斧の出土は全くなくくぼみ石、たたき石等の敲打器類が主であった。そのことは時代的なことからも石斧にとって替わる鉄製品の出現と関わりがあるよう思う。本遺跡でも鉄製品が出土していることからもそのことが窺える。そうすると慶良間諸島まで出向いて行くのも、又、運ばれてくるのも何ら難かしい事ではない。すると、安山岩の出土はおそらく持ち込まれたものかと思われる。なぜなら、石材を得る為に海を渡るのなら、多量に石器が出土しても良いはずである。しかし、石器の出土は17点と少ない。以上、疑問点ばかりのまとめとなつたが、わずかな資料ではあまり体系的なことを追求するに至らなかつた。今後の資料増加にその意義を委ねたい。

註・参考文献

註1. 沖縄県教育委員会 「知花遺跡群」「沖縄県文化財調査報告書第16集」 1978.3

註2. 沖縄県教育委員会 「福原遺跡発掘報告書」「沖縄県文化財調査報告書第50集」 1983.3

註3. 今帰仁村教育委員会 「今帰仁城跡発掘報告Ⅰ」 1983.3

註4. 安里嗣淳 「磨刀石」「南島考古だより」第33号 沖縄考古学会 1985.9

II 鉄・青銅製品

a. 鉄製品 (図61、図版67)

ア. 鉄 簪

1は鏽ぶくれが少なく、保存状態の良好な資料である。刃部は平坦で葉状になる。身部と茎部の境目に抉りを有する。茎部は棒状に仕上げている。長さ6.9cm、重量8.5g。イ地区 A-21 I層出土。2は刃先部が欠損し、身部に鏽ぶくれがある。身部と茎部の境目に抉りを有する。長さ4.6cm、重量4.6g。ロ地区 B-18 I層出土。

イ. 鉄 鉤

3は横断面が四角形をなすが、一部に鏽ぶくれが見られる。欠損品のため長さは不明。現存長4.1cm、重量3.4g。ロ地区 あ-20 I層出土。

ウ. 用途不明品

4は扁平状の製品であるが、上部が欠損しているため全体の形は不明である。下端部は幅が小さく、そこから僅かに幅広くなり、中間程でくびれて開く。現存長3.3cm、重量2.5g。イ地区出土。

エ. 簪

5は下半部が欠損し、一部鏽ぶくれが見られる。頭部は細いスプーン状をなし、竿の横断面は円形状である。現存長6.9cm、重量3.2g。イ地区 あ-22 I層出土。

b. 青銅製品 (図61、図版67)

ア. 簪

6は完形品であるが首の部分が大きく曲がっている。頭部は細いスプーン状をなす。竿の横断面は六角形で先端は尖る。重量7.2g。ロ地区 H-20 I層出土。

イ. 古 錢

2点得られた。7は寛永通寶(初鋳年代1636年)、8は破損品で「永」と「寶」の文字が確認できる。7はロ地区 D-20 I層出土。8はハ地区 C-15 I層出土。

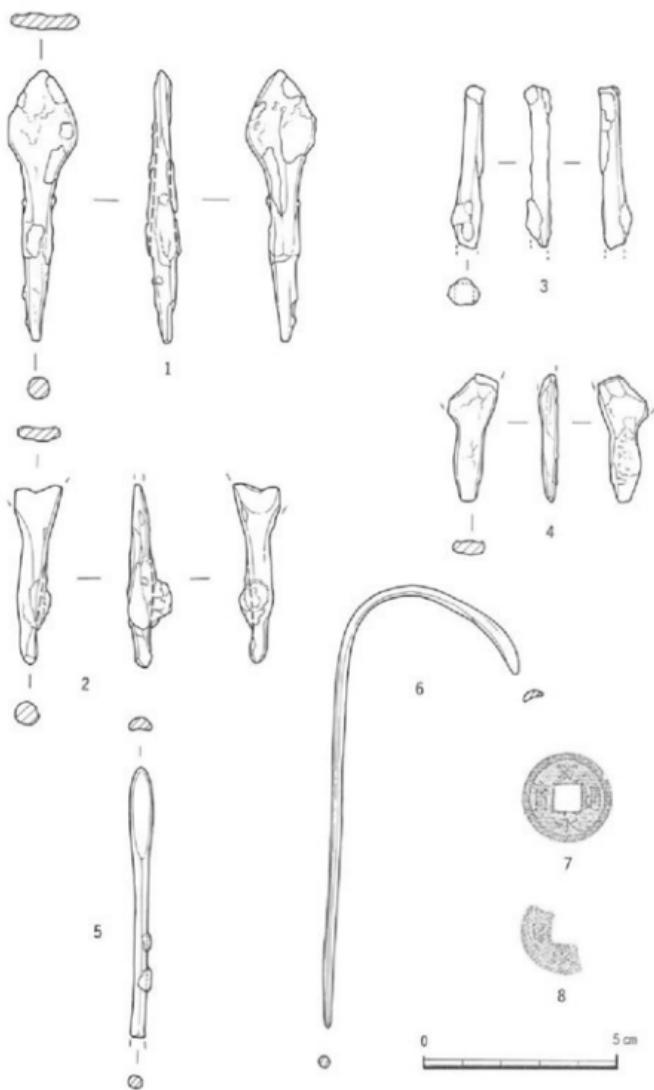


図61 鉄・青銅製品



圖版67 鐵・青銅製品

B. 自然遺物

(1) 貝類遺存体

本遺跡から35科93種の貝が出土した。

出土貝は各グリッド別、層別に集計し、最終的には地区ごとに層でまとめた。分類は科別にまとめ、棲息地を記号で示した。

計測については、完形貝と殻頂を有する貝を最少推定個体数とした。二枚貝は左殻・右殻に分けその多い方を最少推定個体数とし、リュウテンサザエ科の貝については殻と蓋の個数を示して、その多い方を最少推定個体数（以下、最少推定を略する）とした。

出土量の目安になる重量は、殻頂部を欠損した貝も含めた重量を示した。

以下、出土状況を記述する。

貝はイ地区のⅠ層から870個体、Ⅱ層から1,931個体、ロ地区のⅠ層から1,455個体、Ⅱ層から103個体、ハ地区のⅠ層から43個体の4,402個体が出土した。

イ地区のⅡ層から最も多く出土しており、次いでロ地区のⅠ層が多く、ハ地区からの出土は非常に少ない。

本遺跡から出土した主体貝の構成比較を示したのが表18である。

イ地区では、アラスジケマンガイがⅠ層・Ⅱ層とも多く出土している。次いでⅠ層ではマガキガイ、Ⅱ層ではカンギク、マガキガイとなっている。

ロ地区では、Ⅰ層でアラスジケマンガイに次いでマガキガイが多く、Ⅱ層では出土量は少ないがマガキガイの占める割合が最も多く、次いでアラスジケマンガイとなっており、出土比率

表18 主体貝の構成比較

貝種名	イ地区				ロ地区				ハ地区				棲息地	
	Ⅰ層		Ⅱ層		Ⅰ層		Ⅱ層		Ⅰ層		Ⅱ層			
	頭位	個体数	比率%	頭位	個体数	比率%	頭位	個体数	比率%	頭位	個体数	比率%		
アラスジケマンガイ	1	321	36.9	1	732	37.9	1	440	30.2	2	16	15.5	E-d	
マガキガイ	2	170	19.5	3	263	13.6	2	370	25.4	1	32	31.1	D-F-m-d+e	
カンギク	3	65	7.5	2	289	14.5	3	70	4.8	1	1	1.0	E-g	
スダレハマグリ	4	53	6.1	4	112	5.8	4	67	4.6	5	3	2.9	E-d	
オキナワヤマタニシ		17	2.0	5	109	5.2	5	54	3.7	3	12	11.7	A	
ホソスジイナミガイ	5	32	3.7	6	71	3.7	4	43	3.0	2	1	1.9	E-d	
カワニナ	2	0.2		5	0.3		6	0.4	4	3.9	3	4	B	
オニツツノガイ	6	23	2.6		24	1.2	6	52	3.6		2	1.9	G-e+r	
個体数・総数比率		870	19.8		1,931	43.9		1,455	33.6		103	2.3		
											43	1.0	4,402	
													100.0	

*棲息地の記号は、表20と同一

の順位は逆転している。しかし、いずれにしてもマガキガイの占める割合は、イ地区と比較すると高い。

I層ではこの2種の貝に次いでカンギク、スダレハマグリが多く、II層ではオキナワヤマタニシが3位、カワニナが4位で、海以外に棲息する貝の出土が目立つ。

ハ地区の貝の出土量は43個体で、全出土数のわずか1%と非常に少ない。オキナワヤマタニシの出土が最も多く、マガキガイ、カワニナとつづき、ロ地区のII層と出土状況が似ている。

各地区・各層から出土した貝の出土量と、棲息地別の構成比較を示した。

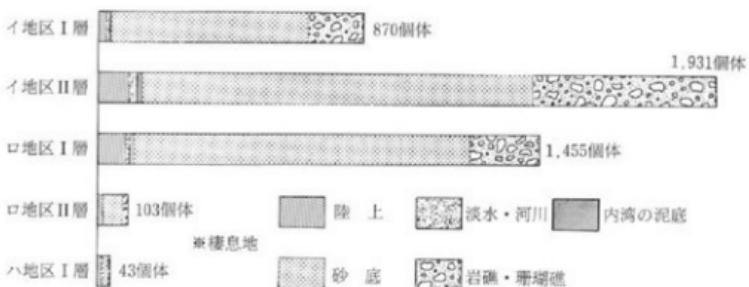


図62 棲息地別出土比較

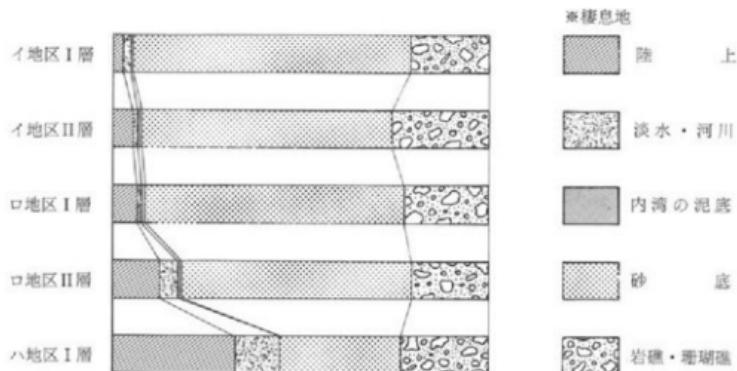


図63 棲息地別構成比較

出土貝の棲息地をみると、砂地に棲息する貝の出土が多い。

イ地区のI層では、砂地に棲息する貝が多く74.1%を占める。陸上に棲息する貝が2.9%、岩礁・珊瑚礁に棲息する貝が20.9%の比率である。

II層では陸上に棲息する貝が5.3%で、I層よりも多くなっている。砂地に棲息する貝の個体数は他の層に比べると最も多いが、出土数の多いII層では66.6%の比率である。岩礁・珊瑚礁に棲息する貝は25.9%を占める。

ロ地区のI層では、陸産貝が6.3%、砂地に棲息する貝が69.1%、岩礁・珊瑚礁に棲息する貝が22.5%を占める。

II層では陸産貝が12.6%を占め、淡水・河川等に棲息する貝が4.9%、砂地に棲息する貝が61.2%、岩礁・珊瑚礁に棲息する貝が20.4%で、I層に比べ陸産貝や淡水・河川等に棲息する貝の出土が目立つ。

ハ地区では、陸産貝と砂地に棲息する貝の個体数が同数で、32.6%を占め、淡水・河川等に棲息する貝が11.6%、岩礁・珊瑚礁に棲息する貝が23.3%である。出土量が非常に少なく、その中の分類なので、他の地区と比較に無理があるかも知れないが、この地区では陸産貝と淡水・河川に棲息する貝の占める比率が高く、砂地に棲息する貝の出土は他に比べて少ない。

今回、本遺跡の貝の出土状況から、砂地に棲息する貝の出土が多い。また、岩礁・珊瑚礁に棲息する貝は少ないが、多量に出土したマガキガイ等は岩礁の間の砂底に棲息していることが多く、ほとんど近くに岩礁がある。これらのことから、当時の貝採集の海岸線を想定できる。それから察すると、海岸を利用した可能性が高い。

主貝をみると、容易に採集できる貝が多いので、貝への依存度はそれほど高くはなかったと思われる。

表19 ハ地区貝類出土状況

(棲息地の記号は表20と同じ)

科 名	種 名	番 号	面 形 左/右	有 頂 破 片	最 小 推 定	重 量(g)	棲 息 地
リュウテンサザエ科	ヤコウガイ	5		2	1	4	H-硬い穴
II	カニギク	8	1		1	2	E-g
ヤマタニシ科	オホナワヤマタニシ	13	4	6	10	8	A
カニニチ科	カニニチ	14	2	2	4	5	B
オニノツノガイ科	カスリカニモリガイ	17		2	2	8	D-h+g
II	オニノツノガイ	19		1	1	2	G-e+g
ソザガイ科	マガキガイ	20	1	6	7	50	D~F-e-d+e
II	クモガイ	25			1	15	H-d
オニコブシガイ科	コオニコブシ	39	1		1	12	G-e
イモガイ科	ハナワイモガイ	44	1		1	5	E-g
II	ヒラマキイモガイ	54	1	1	2	21	E-d
アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ	59	1		1	6	A
チンパンマイマイ科	ヤンバルマイマイ	60	3		3	6	A
ソネガイ科	リュウキュウサルボウガイ	63			1	7	E-d
シジミガイ科	シレナシシジミガイ	71		/1	1	4	B
シャコガイ科	シラナミ	73			1	4	G-g+h
II	ヒメジャコ	75			1	1	D~F-i-k+h
マルスダレガイ科	スダレハマグリ	81		/1	1	2	E-d
II	ヌメガイ	85		/1	1	5	E-d
II	アラスジケマンガイ	89		/1	1	1	E-d
計					43	179	

表20 イ地区貝類出土状況

科名	種名	I層				II層				棲息地
		個体数	重量	個体数	重量	有孔虫	有孔虫	有孔虫	有孔虫	
ニシキウズガイ科	ニシキウズガイ	1		1	10		3	3	19	G-k
II	サラサバガイ	2	2	150	4	6	10	221	F1/5-g+h	
II	ギンタカハマガイ	3	1	11		2	2	41	F2/10-g	
II	オキナワイシダタミ	4				1	2		E-g	
リュウテンザザエ科	ヤコウガイ／蓋	5		1	465		1	203	H-深い穴	
II	チョウセンザザエ	6	2/	2	5	/1	1	5	F2/20-g+h	
II	コシダカザザエ	7	1	4	1	1	2	7	E-g	
II	カングク／蓋	8	28/	65	182	137/1	143/	280	716	E-g
II	オオペスガガイ	9	1	1	7		7		D-f+g	
アマオブネガイ科	アマオブネガイ	10	1	1	6	4	10	11	D-f	
II	マキミゾアマオブネ	11				1	1	8	D-g	
II	ベニツケアマガイ	12				2	2	2	D-g	
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	13	19	8	17	51	79	21	160	A
カワニナ科	カワニナ	14	2	2	3	3	2	5	5	B
ゴマフニナ科	ゴマフニナ	15					1	2		D-g
オニツメガイ科	タクノミカニモリガイ	16	2	2	4	8	5	8	13	E-g
II	カスリカニモリ	17	5	11	16	30	16	28	34	107 D-h+g
II	カニモリガイ	18	1	1	2	3	8	11	84	D-F20-d
II	オニツメノガイ	19		23	532	3	21	24	538	G-e+g
ゾデガイ科	マガキガイ	20	3	167	170	1,495	12	251	2,457	D-F20-d+e
-	ネジマガキガイ	21		1	1	6	1	2	3	G-H-d+f
II	オハブロガイ	22					2	2	6	D-e
II	スイシロウガイ	23				1	1	28	G-d	
II	イボソダガイ	24				1	1	35	G-d	
II	タモガイ	25	1	6	7	413	1	7	8	H-d
タマガイ科	キハダトミガイ	26	1		11	1	1	2	20	E-d
II	ホウシユノタマガイ	27				1	1	<1		E-d
タカラガイ科	ハテビラタカラガイ	28	2	1	3	8	2	1	3	D-f+g+h
II	シボリダカラガイ	29	1		11		1	2		D-f
II	ホシグカラガイ	30		1						G-g+h
II	ホシキヌタガイ	31								E-g
II	ヤクシマタカラガイ	32		1	1	29		2	2	E-g
フジツガイ科	アラレボラ	33		1	1	3		1	18	G-g
アカキガイ科	ガングビキボラ	34	1		1	3		2	15	E-g
II	ヨウラクレイシガイ	35								D-g
II	アカイガレイシガイ	36				1	1	2	48	E-g
エゾバイ科	シマベッコウバイ	37	1		1	4		1	1	D-h
イトマキボラ科	イトマキボラ	38	2		2	198	1	1	2	G-g
オニコブシガイ科	コニコブシガイ	39	1	4	5	46	1	5	6	80 G-g
フデガイ科	チヨウセンフデガイ	40			1	61				E-d
イモガイ科	マダライモガイ	41	1		1	8	1	1	12	E-g
II	セガガイモガイ	42	1		1	2	1	3	4	D-g
II	クロミナシガイ	43	1	1	2	7		3	15	E-d+g
II	ハナワイモガイ	44								E-g
II	イボシマイモガイ	45				1	2	3	24	E-g
II	キヌカツガイモガイ	46		4	4	48	2	1	3	25 E-g
II	ゴマフィモガイ	47					2	2	67	E-d
II	ヤナギシボリイモガイ	48		4	4	42	5	5	82	E-g
II	アンボンフロザメガイ	49		3	3		2	2	122	E-d
II	クロフモドキ	50			1	105				E-d
II	ニシキミナシガイ	51								G
II	イボカバイモガイ	52	1	4	5	82	2	2	13	E-g
II	サラサミナシガイ	53		2	2	59	2	2	39	E-g
II	ヒラマキイモガイ	54	1		1	10	1	1	9	E-d
II	アカシマミナシガイ	55		2	2	61		1	13	G-d

科名	種名	I層				II層				棲息地
		個体数	重量	個体数	重量					
号	完形	有齶片	最小標準 (g)	完形	有齶片	最小標準 (g)				
タケノコガイ科	ウシノツノガイ 56					1	1	10	E-d	
ナツメガイ科	ナツメガイ 57		3	1		1	5	E-g		
不 明 各 貝										
キセルガイ科	ツヤギセル 58	6	6	3	1	1	<1	A		
アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ 59			1	1				A	
ナンバンマイマイ科	サンバルマイマイ 60			1	3	1	1	1	A	
ヨコ	タンチャンマイマイ 61								A	
ワホガイ科	ベニエガイ 62	2/3	5/2	7	16	6/13	10/12	25	99 D-f	
	リュウキュウサルボウガイ 63	7/8	3/5	13	5/8	13/5	1/1	14	569 E-d	
クダイスガイ科	アコヤガイ 64					1/	1	2	D~F10-g	
イタヤガイ科	チララガイ 65			1	1	1/	1/	2	E-g+h	
ヨコ	ヒオウガガイ 66			1	5			1	9 D~F10-g	
ヨコ	キンチャクガイ 67				4/		4	15	D~F50-f	
ウミギク科	メンガイ 68	2/	1/	3	78	6/2	1/2	8	126 E-h	
イタボガキ科	オハグロガイ 69		/1	1	8		/1	5	D-g	
ヨコ	イタボガイ 70			1	18				C+E-f	
レジミガイ科	レナシジミガイ 71	1/2	11/6	11	218	4/2	17/5	21	376 B	
キクザルガイ科	シロザルガイ 72	1/	/1	1	3				E-k	
シャコガイ科	シラナミガイ 73			1	40		1/	1	113 G-k+h	
ヨコ	(幼) 74	/1	/1	2	26	4/4	3/3	7	104 ヨ	
ヨコ	ヒメジヤコ 75	2/5	8/4	10	325	6/6	3/4	10	287 D~F-s+g+h	
シャコガイ科	ヒレジャヤコガイ 76		/1	1	442	1/	1/	2	105 G-h	
ヨコ	(幼) 77					/1	/1	2	13 ヨ	
ヨコ	シャゴウ(幼) 78			1	36	1/	3/	4	29 E-d+h	
ザルガイ科	リュウキュウザルガイ		1	2					E-d	
ヨコ	カワラガイ 80	1/1	/1	2	17		/1	1	7 E-d	
マルスダレガイ科	マルスダレハマグリ 81	14/11	39/36	53	321	44/41	68/68	112	828 E-d	
ヨコ	アサリ 82	/1		1	4	/1	/1	2	5 C+D-b	
ヨコ	オキシジミガイ 83	/3		3	37	2/	3/3	5	17 C-a	
ヨコ	チョウセンハマグリ 84		1/	1	22		4/2	4	42 I-d	
ヨコ	ヌメメガイ 85	2/12	8/7	19	294	11/13	24	560 E-d		
ヨコ	アラヌメメガイ 86		/1	1	7	1/		1	35 E-d+e	
ヨコ	イオウハマグリ 87	1/3	2/1	4	14	4/2	5/3	9	18 D-a	
ヨコ	ホソスジナレガイ 88	28/15	4/6	32	85	48/44	17/27	71	212 E-d	
ヨコ	アラスジケマンガイ 89	19/75	154/159	321	1,065	377/388	355/327	732	2,373 E-d	
ヨコ	オイノカガミガイ 90	1/	1/	2	3				E-d	
チドリマスオガイ科	イソハマグリ 91	3/	3	4	6/4	6/5	12	21	D上部-d	
リュウキュウマスオガイ科	マスオガイ 92	/1		1	4			1	2 C-a	
ヨコ	リュウキュウマスオガイ 93	1/1	1/1	2	14	2/1	5/4	7	66 E-d	
ニッコウガイ科	サメザラガイ 94							1	E-d	
ヨコ	リュウキュウラトリガイ 95		/1	1	4	2/	2/1	4	13 E-d+e	
	計				870	7,813		1,931	11,873	

棲息地の記号について

A 陸 上	E 浅 海	a 泥 底	e 砂 礫 底
B 淡水・河川	F 水 深	b 砂 泥 底	f 岩 礫 底
C 内 湾	G 潮 間 带 下	c 細 砂 底	g 岩 礫 礁
D 潮 間 帯	H 珊 瑚 礁	d 砂 底	h 珊 瑚 礁

* 水深 5 m → F_s 水深 2 m → 水深 10 m → F_{2/20}

重量の「<1」は重量が 1 g 未満

表21 口地区貝類出土状況

科名	種名	番号	I層			II層			棲息地
			個体数	重量	個体数	重量	個体数	重量	
			完形左右	有縫片	基準量(g)	完形左右	有縫片	基準量(g)	
ニシキウズガイ科	ニシキウズガイ	1		28					G-g
ツラサバテイ科	ツラサバテイ	2	1	3	4	102		1	F1/5-g-h
ツル	ツルタカハマガイ	3							F2/10-g
ツル	オキナワシダタミ	4							E-g
リュウテンサンザエ科	ヤコウガイ／蒸	5	1/	1,412			1	116	H-深い穴
ツル	チョウセンサンザエ／蒸	6	2/	2	22				F2/20-g-h
ツル	コシダカサザエ	7	2	9	11	21	1	5	E-g
ツル	カシギク／蒸	8	32/	38/	70	161	1/	1	E-g
ツル	オオベソスガイ	9	3	3	5				D-f-g
アマオブネガイ科	アマオブネガイ	10							D-f
ツル	マキミゾアマオブネ	11							D-g
ツル	ベニツケアマガイ	12							D-g
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	13	46	14	54	53	8	4	A
カワニナ科	カワニナ	14	2	4	6	10	4	4	B
ゴマフニナ科	ゴマフニナ	15							D-g
オニノツノガイ科	クワノミカニモリガイ	16	8	5	13	26			E-g
ツル	カスリカニモリ	17	16	18	34	55	1	1	D-h-g
ツル	カニモリガイ	18	1	2	3	5			D~F20-d
ツル	オニノツノガイ	19	8	44	52	1,382	2	2	G-e-g
ソザガイ科	マガキガイ	20	19	351	370	3,750	2	30	D~F20-d-e
ツル	ネジマガキガイ	21		1	1				G-H-d-f
ツル	オハブロガイ	22							D-e
ツル	スイショウガイ	23							G-d
ツル	イボソザガイ	24							G-d
ツル	クモガ	25	1	1	196		2	2	H-d
タマガイ科	キハドミガイ	26		2	2	20			E-d
ツル	ホウシユノタマガイ	27							E-d
タカラガイ科	ハナビタカラガイ	28	1	5	5	8			D-f-g-h
ツル	シボリダカラガイ	29							D-f
ツル	ホシダカラガイ	30	1		1	100			G-g-h
ツル	ホシヌタガイ	31		1	1	5			E-g
ツル	ヤクシマタカラガイ	32		1	1	24			E-g
フジツガイ科	アラレボラ	33							G-g
アクキガイ科	ガンゼキボラ	34	1	5	6	93		1	E-g
ツル	ヨウラクレインガイ	35	1		1	1			D-g
ツル	アカイガレイシガイ	36	1		1	22			E-g
エゾバイ科	シマベッコウバイ	37	6	1	7	12	1	1	D-h
イトマキボラ科	イトマキボラ	38	4	4	8	914	1	1	G-g
オニコブシガイ科	コオニコブシガイ	39	2	3	5	69		1	E-g
フデガイ科	チョウセンフデガイ	40							E-d
イモガイ科	マダライモガイ	41	1		1	7			E-g
ツル	サヤガタイモガイ	42	1	2	3	24	1	1	D-g
ツル	クロミナシガイ	43	3	3	6	33			E-d-g
ツル	ハナワミモガイ	44							E-g
ツル	イボシマイモガイ	45	3	3	6	26			E-g
ツル	キスカツギイモガイ	46	1	5	6	67			E-g
ツル	ゴマフミモガイ	47	2	2	4	69	1	1	E-d
ツル	ヤナギンボリイモガイ	48	10	10	112		2	2	E-g
ツル	アンボンクロザメガイ	49	1	4	5	323			E-d
ツル	クロフモドキ	50		1	1	362			E-d
ツル	ニシキミナシガイ	51			1	35			G
ツル	イボカバイモガイ	52		2	2	30	1	1	E-g
ツル	サラサミナシガイ	53	3	9	12	272	1	1	E-g
ツル	ヒラマキイモガイ	54	1	6	7	48			E-d
ツル	アカシマミナシガイ	55		3	3	40			G-d

科名	種名	I層			II層			棲息地
		個体数	重量	個体数	重量	個体数	重量	
号	完形	有頭軟骨 最小推定 (K)	完形	有頭軟骨 最小推定 (K)				
タケノコガイ科	ウシノツノガイ 56	1	13					E-d
ナツメガイ科	ナツメガイ 57	3	7					E-g
不明巻貝	1	1	4					
キセルガイ科	ツヤギセル 58	33	30					A
アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ 59	2	29					A
ナンバンマイマイ科	サンバルマイマイ 60	2	1	3	1	1	5	A
タ	タンチャンマイマイ 61	1	1	1	1			A
フネガイ科	ベニエガイ 62	1/2	1/3	5	11			D-f
リュウキュウサルボウガイ	63	9/12	5/3	15	873	1/	1	25
ウダイスガイ科	アユガイ 64							D~F10-g
イタヤガイ科	チサラガ 65		1粒付					E-g+h
ヒオウギガイ 66								D~F10-g
ヒ	キンチャクガイ 67	1/1	1	15				D~F50-f
ウミギタ科	メソング 68	4/2	5/3	9	168	1/1	1	20 E~h
イタボガキ科	オハグロガイ 69	/1	/1	2	10			D-g
ヒ	イタボガキ 70	2/1	1/1	3	693		1	30 C+E-f
シジミガイ科	シレナシジミガイ 71	1/1	9/2	10	385	1/	1	14 B
キクザルガイ科	シロザルガイ 72	/1	/1	2	47			E-g
シモガイ科	シフナミガイ 73	1/	1	369			1	10 G-k+h
ヒ	ヒメジヤコ 74 (幼)	4/2	3/2	7	95		1	5 #
シャコガイ科	ヒレジヤコガイ 75	11/6	5/4	16	487		1	6 D~F1-g+h
ヒ	ヒタコ (幼) 77	1/2	2	51				G-h
ヒ	シタコウ (幼) 78	/1	1	50				E-d+h
ザルガイ科	リュウキュウザルガイ 79	1/		1	16			E-d
ヒ	カワラガイ 80	1/	/1	1	10	1/1	1	3 E-d
マルスダレガイ科	マルスダレハマグリ 81	30/20	37/40	67	458	3/1	3	8 E-d
ヒ	アサリ 82	1/	2/1	3	8			C+D-b
ヒ	オキシジミガイ 83	1/	3/	4	13	1/1	1	4 C-a
ヒ	チョクセンハマグリ 84	1/	2/	3	25	1/1	1	5 I-d
ヒ	メノメガイ 85	7/9	12/15	24	466	1/1	2/2	3 41 E-d
ヒ	アラヌメメガイ 86		1/1	1	16			E-d+e
ヒ	イオウハマグリ 87	1/5	2/2	7	16			D-a
ヒ	ホソスジイナミガイ 88	33/29	11/14	43	144	1/2	2	5 E-d
カ	アラスジケマンガイ 89	217/223/228	440	1,518	5/5	11/8	16	36 E-d
カ	オイカガミミガイ 90							E-d
チドリマスオガイ科	イソハマグリ 91	1/	2/3	3	4			D上部-d
リュウキュウマスオガイ科	マスオガイ 92							C-a
ニッコウガイ科	サメザラガイ 94			1	2			E-d
ヒ	リュウキュウシラトリガイ 95	2/	2/1	4	12			E-d+e
	計			1,455	16,605		103	757

棲息地の記号について

A	陸上	E	浅海	a	泥底	e	砂礫底
B	淡水・河川	F	水深	b	砂底	f	岩礫底
C	内湾	G	潮間帶下	c	細砂底	g	岩礫礁
D	潮間帶	H	珊瑚礁	d	砂底	h	珊瑚礁

※ 水深5m→F_s 水深2m～水深10m→F_{z/20}

重量の「<1」は重量が1g未満

(2) 脊椎動物遺存体

本遺跡より魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類の骨が出土した。この中ではウシの骨片が多く出土しているが、全体的に骨の出土量は少ない。

以下、上記の類別に記述する。

(イ) 魚類

ウナギ目ウツボ科の鰩骨片が1点、スズキ目タイ科のクロダイ属、エフキダイ科、フグ目、ハリセンボン科の魚骨が出土したが、いずれも少ない。下表にその出土状況を示す。

表22 魚骨の出土状況

目	科(属)	部位	イ地区		ロ地区		ハ地区		最小推定尾数
			I層	II層	I層	II層	I層	II層	
ウナギ目	ウツボ科	鰩骨		1					1
スズキ目	タイ科	L R		1 1			+	1	2
	ミナミクロダイ	L R		1 1			+	1	
	エフキダイ科	L R		1 1					
フグ目	ハリセンボン科	上顎骨	— 1	— 1					3
		下顎骨		1					
		棘骨		1	1	1			
不明	不 明	主鰓蓋骨		— 1					3
		椎骨		2			7		
		細片		7			18		

* 左前上顎骨 | 右前上顎骨 · 上顎骨 · 左 | 右
 左歯骨 | 右歯骨 · 下顎骨 · 左 | 右

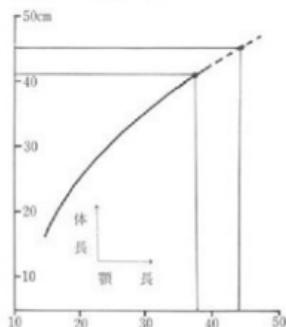
魚類の中では、ミナミクロダイの骨が種名まで確認でき、他の骨は顎骨等で科名までは確認できた。

ウツボ科の骨は鰩骨が1片しか出土していない。

タイ科ミナミクロダイの骨は、上顎骨や歯骨がイ地区とロ地区のII層から出土した。前上顎骨は左右1点ずつ出土しているが、大きさが多少異なる。また右歯骨がイ地区とロ地区から出土しており、この2点も大きさが異なる。

赤沢威氏による、現生標本に於ける顎骨長—体長関係の表をもとに、出土した上顎骨から大まかな体長(尾びれを除)を算出した。

表23 上顎骨—体長の相関表



頸長43mmと38mmのミナミクロダイの体長を表から算出する際、赤沢氏の「上顎骨一体長の相関表」の相関曲線を延長（破線部）した。上顎長43mmと38mmの骨を表にあてはめると、体長が45cm前後と41cm前後の大きな成熟魚である。

エフキダイ科の右歯骨片が、イ地区II層から1点出土した。

ハリセンボン科の上顎骨が2点、下顎骨が1点、いずれもイ地区から出土した。3点とも大きさに差があるので別個体と思われる。

椎骨による科、属の同定は困難であるが、大きさにバラツキがあるので計測値を表24で示す。

表24 椎骨の計測比較

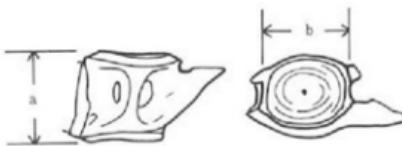
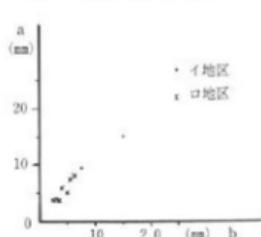


図64 計測部位

小さな椎骨が多く、ほとんどロ地区I層からの出土である。イ地区出土の椎骨は2点で1つは特に大きく、a:15mm・b:15mmと大きい。もう1つはa:7.3mm・b:9.2mmである。この2点はイ地区黒褐色土Bから出土した。

ロ地区出土の椎骨は7点で、すべてロ地区I層から出土した。大きいもので6mm×10mm小さいもので2.5mm×3.8mmあり、イ地区出土の骨に比べると小さい。

主鰓蓋骨がイ地区II層から出土した。左右の区別は右側であることは確認できるが、科名の判別は困難である。

本遺跡から出土した魚骨から、ほぼ7尾の魚が確認できるが、出土量は少なく、魚の食料としての依存度は低かったと思われる。

(iv) 爬虫類

ヘビの脊椎骨が17個、ロ地区I層から出土した。大きさに差異があるので、計測値の一覧表（表25）を示し、さらに大きさを比較する表（表26）を設けた。

計測部位は、破損した骨もあることから、残存部がはつきりした臼状に凹んだ部分の径（図65）を計測した。

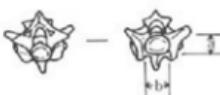


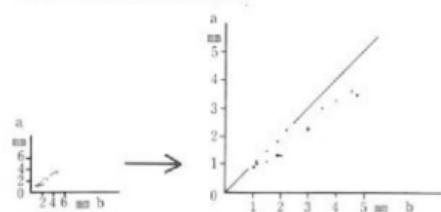
図65 計測部位

表25 径長計測一覧

	径a×径b	a × b	a × b
1	3.6×4.6	7	2.2×2.2
2	3.5×4.8	8	1.8×1.9
3	3.3×4.0	9	1.5×1.5
4	3.0×3.5	10	1.3×2.1
5	2.3×3.0	11	1.3×2.0
6	2.3×3.0	12	1.3×1.9

※単位はmm

表26 椎骨臼部の計測比較



計測一覧をみても、径aが3.0mm以上のものと、2mm前後のもの、1.3mm程度のもの、1mm前後のものに分けられるが、部位の違いによる椎骨の大きさの違いはあると思われる。椎骨臼部aの径長からの個体数の確定は困難である。ただ、径長aと径長bが同大の円状をなすもの（表25の7・9・15）がある。その椎骨に関しては、同部位と考えられ、その部位の大きさが異なることから、複数の可能性もあるが、今回出土した17点の椎骨だけでは体数やヘビの体長の推定は困難である。

(iv) 鳥類

ニワトリの中足骨片が1点、小型トリの中足骨片が1点、骨体片が1点の計3点出土した。ニワトリの中足骨片とトリの骨体片がイ地区黒褐色土Bから出土しており、小型トリの中足骨片が1点出土しているが、出土地点がはっきりしない。

(v) 哺乳類

1. 雪長目

a. ヒト科

出土量は少ないが、そのほとんどがイ地区のI層から出土した。

左右の確認できた骨は、下顎歯M₃のみで、他は細片のため部位確認程度となった。

イ地区I層から出土した大腿骨骨体片が2点出土しているが、骨の太さや出土グリッドが同じで、同一ヒトの骨と思われる。また、腓骨の骨体が2点出土しているが、大きさ等から別個体である。

ハ地区から出土した大腿骨片も、骨の太さや出土グリッドから、同一骨と思われる。

表27 ヒトの骨出土状況

部位	地区		イ地区		ロ地区		ハ地区	
	I層	II層	I層	II層	I層	II層	I層	II層
部位	左	右	左	右	左	右	左	右
下顎歯 M ₃	1							
後頭部	2							
頸頂骨	3							
大腿骨 骨体	2				1	1		2
腓骨 骨体	2							
細片	2							

*中央部の数字は左右不明の骨である。

(以下の表でも同様)

2. 齧歯目

a. ネズミ

イ地区黒褐色土Bから3点、ロ地区I層から16点のネズミの骨片が出土した。

いずれの骨も完全な形のものではなく、一部または大半を欠損している。

頭蓋骨の出土はなく、右側上顎犬歯1点と、上顎・下顎左右不明の第3後臼歯が出土した。

イ地区では右側の肢骨が出土した。ロ地区からの出土は多く、左側の寛骨が2点出土していることから、ロ地区出土のネズミは2体、イ地区とあわせて3体のネズミが確認できる。

表28 ネズミの骨の出土状況

部 位	地区		イ地区	ロ地区
	左	右		
上顎犬歯(C)				1
後臼歯(M ₃)			1	
椎骨				3
上腕骨	近位部			
	遠位部		1	1
尺骨	骨体			1
寛骨			2	1
大腿骨	近位部		1	1
	遠位部			1
	近位部		1	1
胫骨	骨体			1
	遠位部			1

3. クジラ目

a. イルカ科

イ地区黒褐色土Bの西側から、椎体間板が1片だけ出土した。径が41.2mmある。

4. 食肉目

a. イヌ

左下顎枝が2点、胸椎が1点出土した。いずれもロ地区の出土で、約20グリッドのI層から左下顎枝と胸椎が出土しており、黒褐色土Eから左下顎枝が出土した。同地区でも層位が違うが、出土数が少ないので、複数の可能性もあるが、断定は困難である。

5. 奇蹄目

a. ウマ

右側前臼歯1点と左側胫骨1点の2点のウマの骨が出土した。いずれもイ地区で、右側前臼歯は黒褐色土Bから出土しており、左側胫骨の遠位部端は、約24グリッドのI層から出土したが、同馬の骨かという鑑定は不可能である。

6. 偶蹄目

a. イノシシ科

各地区、各層から出土した。量的にはイ地区II層からの出土が多いが、部位の明確な骨片は3点だけである。

出土した骨はほとんど細片で、部位が確認できる骨も一部あるいは半分以上欠損しており、完形骨の出土はない。

今回出土した骨から、犬歯によりオスの成獣、肩甲骨から若獣が鑑定できた。

イ地区・ロ地区から出土した骨をみると、左大腿骨の骨体が2点出土した。出土層が異なること、骨の太さが異なることから少なくとも2頭は確認できる。イ地区のII層から出土した若獣の骨と同一の骨なのかは不明である。

性格の異なるハ地区から、オスの右上顎犬歯がわずか1点だけ出土した。

b. ウシ科

ほとんび地区とロ地区から出土した。出土骨の中では歯が多く、そのほとんどが下顎歯である。後臼歯で、破損が大きく上顎歯なのか下顎歯なのか、左右とも不明な歯が5点出土した。

イ地区的II層から、右下顎歯の乳歯が1点出土した。

出土量はロ地区I層で最も多いが、出土骨は少なく完形骨はない。細片のため、部位確認の困難な骨が多い。

c. 中型獣

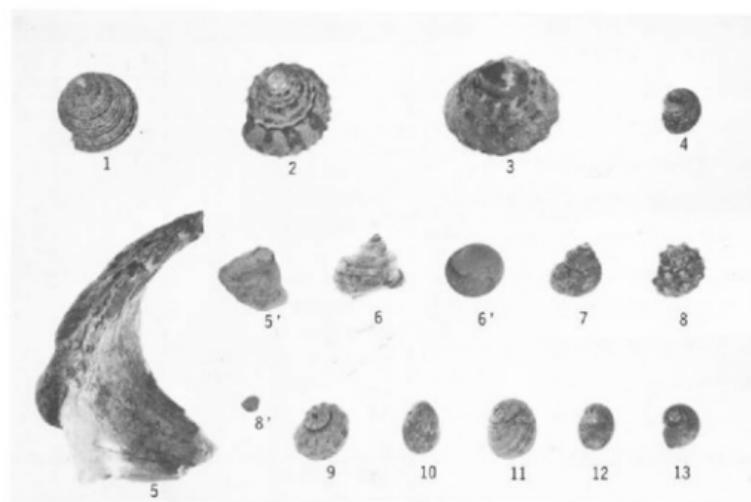
細片のため科の同定の困難な、中型獣の肢骨片が、イ地区II層から3点出土したが、細片のため、科の同定も困難である。

表29 偶蹄目の骨の出土状況

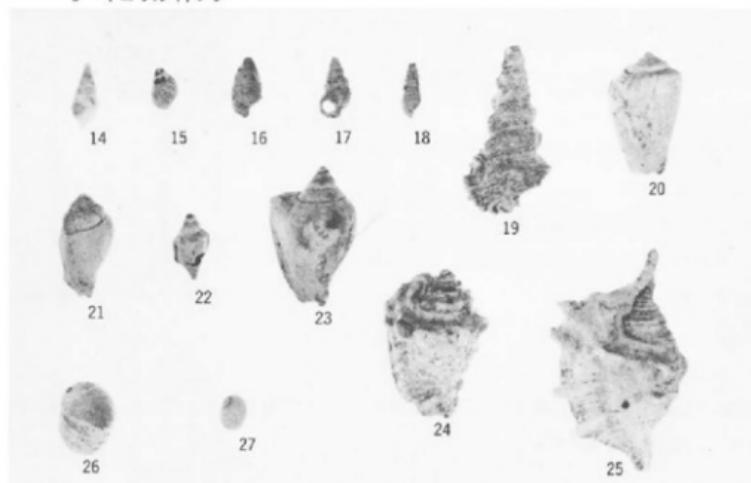
科 部 位	層位	地区		イ 地 区		ロ 地 区		ハ地区	
		I 层	II 层	I 层	II 层	I 层	II 层	I 层	II 层
		左	右	左	右	左	右	左	右
上顎犬歯 (♂)								1	
下顎切歯 (I ₁)				1					
腰 椎						1			
肋 骨						2			
ノ 肩甲骨 (若)				1					
シ 上腕骨遠位部							1		
シ 尺骨近位部		1							
大腿骨 骨体	I	1		1					
II 遠位部						1			
蹠 骨							1		
細 片	10	137		30		58		1	
上顎・下顎不明 M ₁						2			
II M ₂				2		1			
下顎歯 I ₁						1			
II I ₂				1					
II P ₁					1				
II P ₂									
ウ P ₃				1					
II M ₁					1	1	1		
II M ₂				1			1		
II M ₃						2			
II m ₄					1				
筋 骨				1					
シ 上腕骨遠位部		1							
大腿骨近位部						1			
中(?)足骨遠位部						1	2		
中 節 骨							1		
第三足根骨				1					
耳 石				1					
膝 膜	1					1			
細 片	19	29		45		15		2	

註1. 赤沢威 「縄文貝塚産魚類の体長組成並びにその先史漁撈学的意味—縄文貝塚民の漁撈活動の復原

に関する一試案—」『人類学雑誌』第77巻第4号 昭和44年8月



1 ニシキウズガイ 6 チョウセンサザエ／フタ 10 アマオブネガイ
 2 サラサバデイ 7 コシダカサザエ 11 マキミゾアマオブネ
 3 ギンタカハマガイ 8 カンギク／フタ 12 ベニツケアマガイ
 4 オキナワイシタミ 9 オオベソスガイ 13 オキナワヤマタニシ
 5 ヤコウガイ／フタ

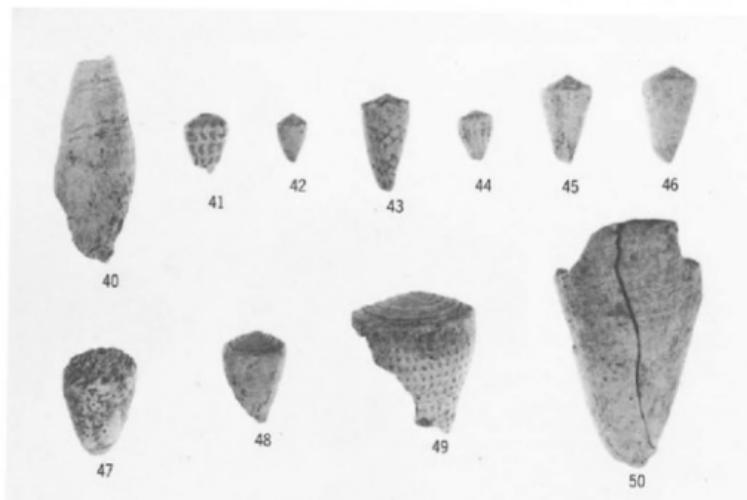


14 カワニナ 19 オニノツノガイ 24 イボソデガイ
 15 ゴマフニナ 20 マガキガイ 25 クモガイ
 16 クワノミカニモリガイ 21 ネジマガキガイ 26 キハダトミガイ
 17 カスリカニモリ 22 オハグロガイ 27 ホウシュノタマガイ
 18 カニモリガイ 23 スイショウガイ

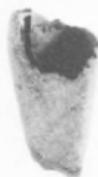
図版68 貝類



28 ハナビラダカラガイ
 29 シボリダカラガイ
 30 ホシダカラガイ
 31 ホシキヌタガイ
 32 ヤクシマダカラガイ
 33 アラレボラ
 34 ガンゼキボラ
 35 ヨウラクレイシガイダマシ
 36 アカイガレイシガイ
 37 シマベッコウバイ
 38 イトマキボラ
 39 コオニコブシガイ



40 チョウセンフデガイ
 41 マダライモガイ
 42 サヤガタイモガイ
 43 クロミナシガイ
 44 ハナワイモガイ
 45 イボシマイモガイ
 46 キヌカツギイモガイ
 47 ゴマワイモガイ
 48 ヤナギシボリイモガイ
 49 アンボンクロザメガイ
 50 クロフモドキ



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



61

51 ニシキミナシガイ
 52 イボカバイモガイ
 53 サラサミナシガイ
 54 ヒラマキイモガイ

55 アカシマミナシガイ
 56 ウシノツノガイ
 57 ナツメガイ

58 ツヤギセル
 59 アフリカマイマイ
 60 ヤンバルマイマイ
 61 クンチャンマイマイ



62



63



64



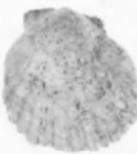
65



66



67



68



69



70



71

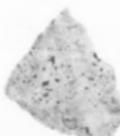
62 ペニエガイ
 63 リュウキュウサルボウガイ
 64 アコヤガイ
 65 チサラガイ

66 ヒオウギガイ
 67 キンチャクガイ
 68 メンガイ

69 オハグロガイ
 70 イタボガイ
 71 シレナシジミガイ



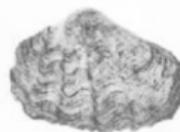
72



73



74



75



76

72 シロザルガイ

73 シラナミガイ

74 " (幼)

75 ヒメジャコ

76 ヒレジャコガイ

77 " (幼)

78 シャゴウ(幼)

79 リュウキュウザルガイ

80 カワラガイ

81 スダレハマグリ

82 アサリ

83 オキシジミガイ



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



87



88



89



90



91



92



93



94



95

84 チョウセンハマグリ

85 ヌメガイ

86 アラヌノメガイ

87 イオウハマグリ

88 ホソスジナミガイ

89 アラスジケマンガイ

90 オイノカガミガイ

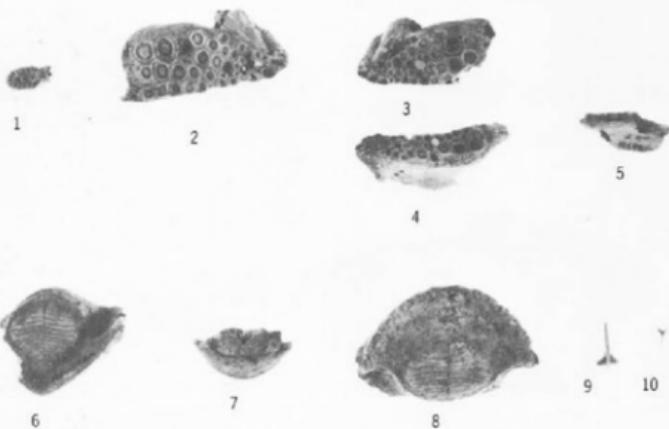
91 イソハマグリ

92 マスオガイ

93 リュウキュウマスオガイ

94 サメザラガイ

95 リュウキュウシラトリガイ



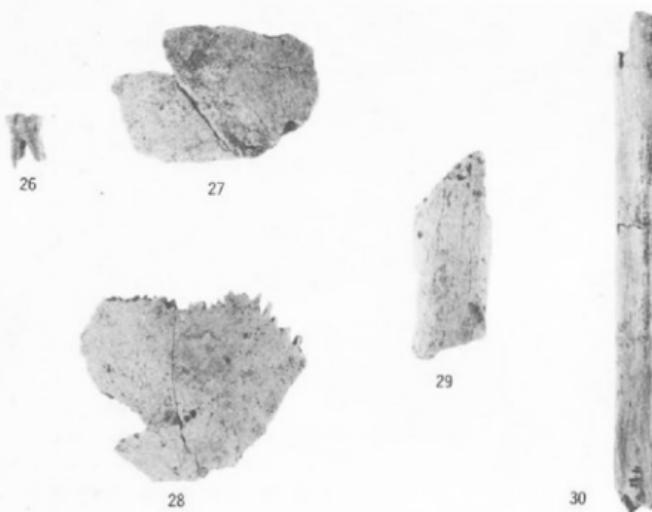
図版72 魚類

1. ウツボ科 2~4. ミナミクロダイ
5. フエフキダイ科 6~10. ハリセンボン科



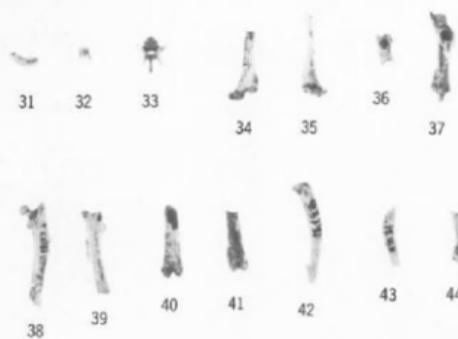
図版73 魚類・爬虫類・鳥類

11~17. 料不明魚骨 18~23. ヘビ
24. ニワトリ 25. 小型トリ



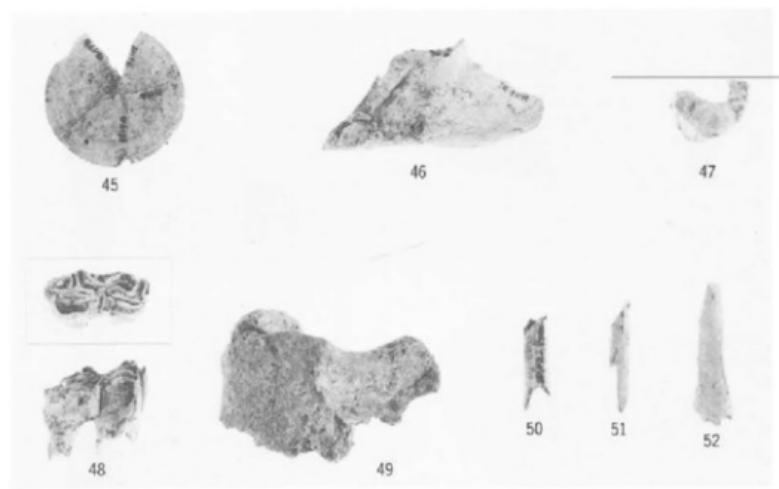
図版74 哺乳類(ヒト)

26. 下顎歯M₁ 27. 後頭部
28. 頭頂骨 29. 大腿骨 30. 肋骨



図版75 哺乳類(ネズミ)

31. 上顎犬歯 32. 後臼歯 33. 椎骨 34・35. 上腕骨
36・37. 審骨 38～41. 大腿骨 42～44. 絡骨



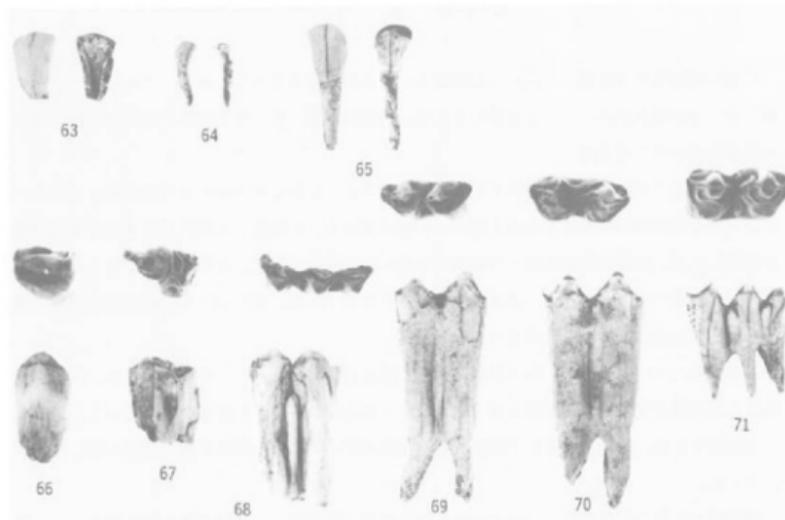
45. イルカ 46・47. イヌ 48・49. ウマ 50~52. 中型獣

図版76 哺乳類(イルカ・イヌ・ウマ・中型獣)



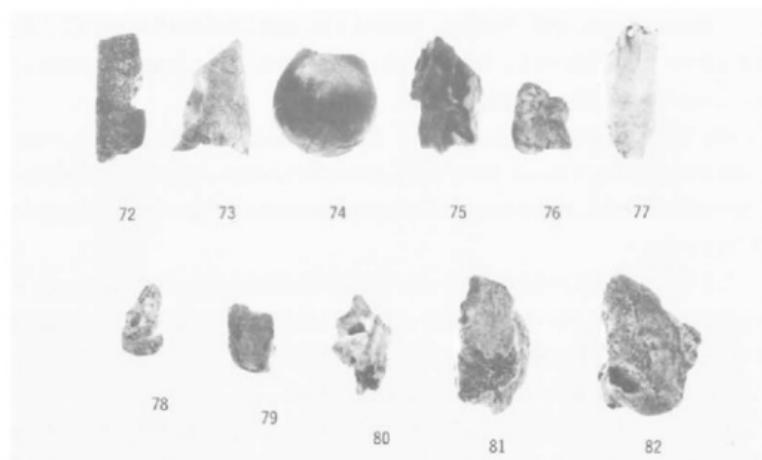
53. 上顎犬歯 54. 下顎切歯 55. 腰椎 56. 肋骨
57. 扁甲骨 58. 上腕骨 59. 尺骨 60・61. 大腿骨 62. 跗骨

図版77 哺乳類(イノシシ)



63~65. 上顎・下顎歯不明
66~71. 下顎歯

図版78 哺乳類(ウシ)



72. 肋骨 73. 上腕骨 74. 大腿骨 75~77. 中手(足)骨
78. 中節骨 79. 第3足根骨 80. 耳石 81・82. 脳蓋骨

図版79 哺乳類(ウシ)

第V章 まとめ

丘陵の南斜面では転落した大小の石灰岩を、至る所で見ることができる。これは幾度となく地にり、土砂崩れがあったことを示している。斜面に堆積していた黒褐色の遺物包含層もこの時破壊を受けたのであろう。

今回の調査で比較的多くの遺物を得ることができた。しかしオリジナルな包含層には恵まれずほとんどが崩壊後の攪乱した表土層からの出土である。イ地区・ロ地区では6地点で包含層を確認したが、斜面の凹地に溜って崩壊から免れた程度のもので、その範囲は小さく、厚さも15~20cmと薄いものであった。出土遺物も極めて少量である。したがって遺物の共伴関係や遺跡の性格を十分に把握するには至っていない。

さて遺物について見ると、先ず多量の磁器の出土が特徴の一つとして挙げられる。幅広い厚味のある鍋蓮弁文の碗、皿が最も多く出土した。出土青磁資料中の20%を占めている。量としては減少するが、櫛搔文皿そして割花文碗、時代は下って無錫の蓮弁文碗、無文の碗、皿等が出土した。

白磁では玉縁口縁碗が古く、量においては口禿碗、皿が多い。磁器で見る限りにおいて、鍋蓮弁文、口禿を主体とした遺跡であるわかる。ところで両者は大略して13~14世紀中頃、中國で製作されたものである。これは押山遺跡の時代設定を考える時、一つの材料にも成りうるであろう。

人工遺物ではその外、鉄器、青銅製品、陶器があるが、磁器も含め最も多いのはフェンサ上層式と称されている土器である。無文のやや固くしまった鉢形、壺形の土器で底部は平底となる。これはグスク時代後半に位置付けられる。

ハ地区では表土層から陶質土器が出土した。丘陵からの流れ込みだと考えたのだが、イ地区ロ地区では全く出土していない。したがって磁器・土器を使用した時期とは異にする生活圏があつたのではないだろうか。地形を見ると、ハ地区は丘陵の西側からも、緩い傾斜面が回り込み伸びてきている。

ところで御嶽は、古代の祖先の葬所であり、村愛護の祖靈神道を祭った所とされている。しかし出土遺物を見ると土器・陶器・須恵器・陶質土器・鉄器・鉄鏃・貝殻等は日常的に使用されていた、明らかに生活残滓であって、祭祀用としては位置付けられないであろう。

集落の立場からも御嶽について改めて考える必要がある。

調査を終了した年の11月頃丘陵上の石灰岩に亀裂があり、その石灰岩の除去作業に立会うことができた。この地には厚さ約60cmの保存状況の良い包含層を確認することができた。更に御嶽の南、南西へと拝がっている。このことは13~14世紀の沖繩を解明する上で押山は貴重な遺跡であると言えよう。

沖縄県文化財調査報告書第83集

うがん　やま　　遺　　跡

—沖闘自動車道（石川—那覇間）建設工事
に伴う緊急発掘調査報告書(5)—

印刷 昭和62年9月25日

発行 昭和62年9月30日

発行 沖縄県教育委員会
編集 沖縄県教育庁文化課
〒900 那覇市旭町1番地
沖配ビル6階

TEL 0988(66)-2731

印刷 文進印刷株式会社
TEL 0988(55)-2323